

青苔の縁青がぶく／＼禿げた、濕つた貼の香のぶんとする、山の書割の立て掛けてある暗い處へ凭懸つて、あゝ、さすがに此處も都だ、と頻に可懐く熟と視た。
其處へ、手水鉢へ来て、手を洗つたのが、若い手代——君が云ふ、其の美少年の猿廻り。」

十二

「急いで手拭を懷中へ突込むと、若手代は其處等頻に前後を向した、……私は書割の山の陰に潜んで居たらう。」

誰も居ないと見定めると、直ぐに、娘をわきへ推遣つて、手代が自分で、爺様の肩を敲き出した。

二人はい、中で居るらしい、一目見て様子で知れる、
「ほう、」

と唐突に聲を揚げて、男衆は小溝を一つ向うへ跳んだ。初阪は小さな石橋を渡つた時。

「私は旅行をした效があると思つた。」

聲は届かないけれども、越でよく分る。……兩手を働かせながら、若手代は、顔で教へて、此處は可い、自分が介抱するから、彼方へ行つて芝居を見るやうに、と勤めるんです。娘が背かな

いのを、優しく叱るらしく見えると、あい／＼と領く風でね、老年を勤る男の深切を、嬉しさうに、二三度見返りながら、娘はいそ／＼と棧敷へ歸る。其の竹の扉を出る時、一寸襟を合せましたよ。

私も歸つた。

間もなく、何、然したる事でもなかつたらう。すぐに肩癖は解れた、と見えて、若い人は、隣の棧敷際へ戻つて来て、廊下へ支膝、以前の如し。……

眞中へ扱つた私を御覽。美しい絹糸で、身體中かゞられる、何だか慥い氣持に胸が緊つて、妙に窮屈な事と云つたらない。

狂犬がむつくり、鼻息を吹直した。

（柿があるか、剥けやい、）と涎で滑々した口を切つて、絹も膚にくひ込まう、長い間枕した、妾の膝で、眞赤な目を睨くと、手代をじろり、然も輕蔑したやうに見て、（何しとる？ 汝や！）と口汚く、先づ怒鳴つた。

（何ぢや、返事を待つた、間抜け。勸定欲い、と取りに來た金子なら、拂うて遣るは知れた事や。何吐す。……三百や五百の金。うんも、すんもあるものかい、鼻かんで敲きつけろ、と番頭に然う吐かせ。）

(はい)と、手を支く。

(早々と去ね、こない場所へのこくと面出しをつて、何さらす、去ねやい。)

(はい)と其でも用済み。前垂の下で手を揉みながら、手代が立つて、五足ばかり行きかゝると、

(多一、多一)と呼んだ。若い人は、多一と云ふんだ。

(待てい)と云ふ。はつと引返して、又手を支くと、婦の膝をはらばひに乘出して、(何ぢやな、

向うから金子くれい、と使が来て店で待つぢやな。人寄越いたら催促やい。誰や思ふ、丸官)と

云つたやうに覺えて居る。……

「え、丸田官藏、船場の大金持です。」

「然うかね、(丸官は催促されて金子出した覺えはない。へ、ん)と云つて、取巻の藝妓徒の顔を

づらりと見渡すと、例の凄いので嘲笑つて、軍鶏が蹴つけるやうに、ボンと起きたが、(寄越せ)

で、一人剥いて居た柿を引手繰る、と仕切に腕を立てて、顔を、新高に居る何處かの島田髻の上

に突出して、丸嚙りに、ぼりくと喰かきながら、(留め了へ)と舞臺へ喚く。

御寮人は、ぞろりと袂を引合せる。多一は、其の袖の蔭に、踞つて居たんだね。

するとね、くひほじつた柿の核を、びよいくと棧敷中へ吐散らして、あは、あは、と面

相の崩れるばかり、大口を開いて笑つたつけ。

(鐵砲打て、戦争押始めろ。大砲でも放さんかい、陰氣な芝居や、馬鹿)と云ふと、又急に、陰

しい、苦い、尖つた顔をして、じろりと多一を睨みつけた。

(何しとる、うむ)と押潰すやうに云ひます。

(それでは、番頭さんに、其の通り申聞けますでございます)と又立つて、多一が歩行き出すと

(こら!)と呼んで呼び留めた。

(丁稚々々)と今度は云ふのさ。

聞く男衆は歎息した。

「難物ですなあ。」

十三

「其からの狂犬が、條理違ひの難題と云つちや、聞いて居られなかつたぜ。

(汝や、はい)で、用を濟ました顔色で、人間並に棧敷裏を足ばかりで立つて行くが、歸つた

ら番頭に何と返事さらすんや。何や! 拂ふな、と俺が吩咐けたから其の通り申します、

と申しますが、呆れるわい、これ、拂ふべき金子を拂はいで、主人の一分が立つと思ふか。(五百

圓や三百圓)と大な聲して、(端金子)で、底力を入れて塗りつけるやうに聲を密めて……(喃、

端金子を、あゝも恚うもあるものかい。俺が拂ふな、と言つたかて拂へ。さつさと一束にして突
付ける。歸れ！ 大白癡、其の位な事が分らんか。）

で、又迫立てて、立掛ける、と又しても、（待ちをれ。）だ。

（分つたか、何、分つた、偉い！ 出来す、）と云つてね、ふん、と例の厭な笑方をして、それ、
直ぐに藝妓連の顔をぎよろり。

（分つたら言うて見い、歸つて何と返事をす、饒舌れ。一應は聞いて置く。丸官後學のために
承りたい、ふん、）と鼻を仰向けに耳を多一に突附けて、其處にありあはせた、御寮人の黄金煙
管を握つて、立續けに、ふか／＼吹かす。

（判然言へ、判然、ちやんと口上を以つて吐かせ。うん、番頭に、番頭に、番頭に、何だ、金子
を拂へ？……黙れ！ 沙汰過ぎた青二才、）と可恐い顔に成つた。（誰か？）と吠えるやうな聲で、
（誰が拂へと言つた。誰が、これ、五百圓は大金だぞ！

丸官、たかを聞いてさへぶる／＼する。これ、此の通り震へるわい。）で、胴肩を一つに揺り上
げて、（大膽ものめが、土性骨の太い奴や。主人のものだとたかを括つて、大金を何の糟とも思ひ
くさらん、乞食を忘れたか。）
と言ふ。

目に涙を一杯ためて、（御免下さいまし、）と、退つて廊下へ手を支くと、（あやまるに及ばん、
よく、考へて、何と計らふべきか、其處へくひ附いて分別して返答せい。……石に成るまで、汝
や動くな、）と又柿を引手繰つて、か／＼と喰ひかきながら、（止め了へ、馬鹿、）と舞臺へ怒鳴る。
（旦那様、旦那様、）と多一が震聲で呼んだと思へ。

（早いな、汝がやうな下根な奴には、三年か、らうと思つた分別が、立處は偉い。俺を呼ぶから
には工夫が着いたな。先づ、褒美を遣る。そりや頂け、）と柿の蒂を、色白な多一の頬へた、きつ
けた。

（もし、御寮人様、）と熟と顔を見て、（何うしましたら宜しいのでございませう、）と縄るやうにし
て言つたか言はぬに、（猿曳め、汝や、婦に、……畜生、）と喚くが疾いか、伸掛つて、ピシリと雁
首で額を打つたよ。羅宇が眞中から折れた。

此方の棧敷に居た娘が、誰より先に、ハツと仕切へ顔を伏せる、と氣を打たれたか、驚いた顔
をして、新高の、丁ど下に居た一人商人風の男が、中腰に立つて上を見た。

藝妓達も一時に振向いて目を合せた、が、其だけさ。多一が壓へた手の指から、たら／＼と絲
すぢのやうに血の流れるのを見たばかり、何うにも手のつけやうがなさうな容子には弱つたね。
お刺に知らない振をして、其のまゝで芝居を見る姉さんがあるぢやないか。

私は、ふいと立つて、部屋へ歸つた。
 傍に居ちや、最う此方が撮出されるまでも、横面一ツ打控がなくツては、新橋へ歸られまい。
 が、私が取組合つた、と成ると、随分舞臺から飛んで來かねない友だちが一人居るんだからね。
 頭痛がする、と樂屋へ横に成つたツ切、あとの事は知りません。道頓堀で、別に半鐘を打たな
 かつたから、あれなり、ぐしやくと消えたんだらう。
 其の婦だ、呆れたぐうたらだと思つたが、

「もし、もし、」

と男衆が、初阪の袖を、ぐい、と引いた。

十四

歩行くともなく話しながらも、男の足は早かつた。唯見ると、二人から十四五間、眞直に見渡
 す。——狭いが、群集の夥しい町筋を、斜めに奴を連れて通る——二個、前後にすつと並んだ薄
 色の洋傘は、大輪の芙蓉の太陽を浴びて、冷たく輝くが如くに見えた。

水打つた地に、裳の綾の影も射す、色は四邊を拂つたのである。
 「やあ、居る……」

と、思はず初阪が聲を立てる、ト兩側を詰めた屋毎の店、累り合つて露店もあり。軒にも、路
 にも、透間のない人立したが、いづれも言合せたやうに、其の後姿を見送つて居たらしいから、
 一見赤毛布の其の風采で、慌しく(居る、)と云へば、件の婦に吃驚した事は、往來の人の、近間な
 のには残らず分つた。

意氣な案内者大に弱つて、

「驚いては不可ません。天満の青物市です。……それ、眞正面に、御鳥居を御覽なさい。」

はじめて心付くと、先刻視めた城に對して、稜威は高し、宮居の屋根。雲に連なる蔓の棟は、
 玉を刻んだ峰である。

向つて鳥居から町一筋、朝市の濟んだあと、日蔽の葎簀を拂つた、兩側の組柱は、鐵橋の木賃
 に似て、男も婦も、折から市人の服装は皆黒いのに、一ツ鮮麗に行く美人の姿のために、宛然、
 市松障子の屋臺した、菊の花壇の如くに見えた。

「音に聞いた天満の市へ、突然入つたから驚いたんです。」

「然うでせう。」

擦違つた人は、初阪の顔を見て皆笑を含む。

兩人は苦笑した。

「ほつこり、暖い、暖い。」

蒸芋の湯氣の中に、紺の鯉口した女房が、ぬつくりと立つて呼ぶ。

「おでんや、おでん！」

「餛飩あがんなはらんか、餛飩。」

「煎餅買ひなはれ、買ひなはれ。」

鮎の香氣が芬として、あるが中に、硝子戸越の紅は、住吉の浦の鯛、淡路島の蝦であらう。市場の人の紺足袋に、はらくと散つた青い菜は、皆天王寺の燕と見た。……頬被したお百姓、空籠荷うて行違ふ。

軒より高い競賣もある。

傘さした館屋の前で、奥深い白木の階に、二人先づ、帽子を手に取つた時であつた。——前途へ、今大鳥居を潛るよと見た、見る目も彩な、お珊の姿が、其までは、よわくと氣病の床を小春日和に、庭下駄がけで、我が別荘の背戸へ出たやう、扱帯で褌取らぬばかりに、日の本の東西に唯二つの市の中を、徐々と拾つたのが、忽ち電の如く、颯と、照々とある圓柱に影を残して、鳥居際から衝と左へ切れた。が、目にも留まらぬばかり、掻消すが如くに見えなく成つた。

高く競賣屋が居る、古いが、黒くがつしりした屋根越の其方の空、一點の雲もなく、冴えた水色の隈なき中に、淺葱や、樺や、朱や、青や、色づき初めた銀杏の梢に、風の戦ぐ、と視めたのは、皆見世ものの立幟。

太鼓に、鉦に、袴々と、打寄する琵琶の、遠巻きめいて、遙に淀川にも響くと聞きしは、誓文拂ひに出盛る人数。お珊も暮るれば練ると云ふ、寶の市の夜をかけた、大阪中の賑ひである。

十五

「御覽なさい、此が龜の池です。」

と云ふ、男衆の目は、——こゝに人を渡すために架けたと云ふより、築山の景色に刻んだやうな、天満宮の境内を左へ入つて、池を渡る橋の上で——池は視ないで、向う岸へ外れた。

階を昇つて跪いた時、言ひ知らぬ神靈に、引緊つた身の、拍手も堅く附着たのが、此處まで退出て、漸と掌の開くを覺えながら、岸に、其のお珊のイんだのを見たのであつた。

藪でも投げたか、奴と二人で、同じ状に洋傘を傾けて、熟と池の面を見入つて居る。

初阪は、不思議な物語に傳へる類の、同じ百里の旅人である。天満の橋を渡る時、ふと何處ともなく立顯れた、世にも凄いまで美しい婦の手から、一通玉章を秘めた文箱を託つて来て、此な

る池で、嘗て暗示された、別な美人が受取りに出たやうな気がして成らぬ。

然も其は、途中互にも言ふにさへ、聲の疲れた……激しい人の波を泳いで来た、殷賑、心齋橋、高麗橋と相並ぶ、天満の町筋を徹してであるにも係はらず、説き難き一種寂寞の感が身に迫つた。参詣群集、隙間のない、宮、社の、フトした空地は、慙うした水ある處に、思ひかけぬ寂しさを、日中は分けて見る事がをりくある。

丁ど池の邊には、此の時、他に人影も見えなかつた。……

橋の上に小兒を連れた乳母が居たが、此方から連立つて、二人が行掛つた機會に、

「さあ、の、様の方へ行こか。」と云つて、手を引いて、宮の方へ徐々歸つた。其の狀が、人間界へ立歸る如くに見えた。

池は小さくて、武藏野の植生の小屋が今あらば、其の涼ばかりだけれども、深翠に萌黄を累ねた、水の古さに藻が暗く、取廻はした石垣も、草は枯れつ、苔滑。牡丹を彫らぬ欄干も、巖を削つた趣がある。剩へ、水底に主が棲む……其の逸するのを封ずるために、雲に結へて鐵の網を張り詰めたやうに、百千の細な影が、漣立つて、ふらふらと數知れず、薄黒く池の中に浮いたのは、龜の池の名に負へる、水に充滿た龜なのであつた。

枯蓮もばらばらと、折れた莖に、ト唯一つ留つたのは、硫黄ヶ島の赤蜻蛉。

鮮鯉の背は鱗々と、お朧の裳の影に靡く。

居たのは、つい、橋の其方であつた。

半襟は、黒に、蘆の穂が幽に白い、紺地によりがらみの細い格子、お召縮緬の一枚小袖、つい

故とらしいまで、不斷着で出たらしい。コオトも着ない、羽織の色が、派手に、澁く、而して際

立つて、ぱつと目についた。

髪の艶も、色の白さも、其のために一際目立つ、——絲織か、一樂らしい、くすんだ中に、晃

晃と冴えがある、きつぱりした地の藍鼠に、小豆色と茶と紺と、すらくつと色の通つた縞の亂立

蒼空の澄んだのに、水の色が袖に迫つて、藍は青に、小豆は紅に、茶は萌黄に、紺は紫の隈を

染めて、明い中に影さすばかり。帯も長襦袢も此に消えて、山深き處、年古る池に、たゞ其の、

すらりと雪を束ねたのに、霧ながら木の葉に綾なす、虹を取つて、細く滑かに美しく、肩に掛け

て背に掛き、腰に流したやうである。汀は水を取廻はして、冷い若木の薄もみぢ。

光線は白かつた。

十六

其の艶なのが、女の童を従へた風で、奴とイむ。……汀に寄つて……流木めいた板が一枚、ぶ

くぶくと浮いて、苔塗れに生簀の蓋のやうに見えるのがあつた。日は水を劃つて、其の板の上ばかり、たとへば温かさを積重ねた心持にふはく當る。

其へ、ほかくと甲を干した、木の葉に交つて青錢の散つた状して、大小の龜は十ウ二十、積の石の數々居た。中には輕石の如きが交つて。――

いづれ一度は擒と成つて、供養にとて放された、が狭い池で、昔賣買をされたと云ふ黒奴の男女を思出させる。島、海、澤、藪をかけた集り勢、これほどの數が込合つたら、月には波立ち、暗夜には潛んで、ひそくと身の上話のはじまらう。

故郷なる、何を見るやら、向は違つても一つく、首を据ゑて目を睜る。が、人も、もの言はず、活ものが此だけ居て餘りの静かさ。孰かが幽に、えへん、と咳拂をしさうで寂しい。

一頭、ぬつと、ざらくな首を伸ばして、長く反つて、汀を仰いだのがあつた。心は、初阪等二人と齊しく、絹絲の虹を視めたに違ひない。

「氣味の悪いもんですね、よく見ると如何にも頭つきが似て居ますぜ。」
男衆は兩手を池の上へ出しながら、橋の欄干に凭れて低聲で云ふ。敢て忍音には及ばぬ事を。

雖然、……こゝで云ふのは、直に話すほど、間近な人に皆聞える。
「眞個、魚ぢや鯛の面色が瓜二つだよ。」

其の何に似て居るかは言はずとも知れよう。
「あゝ、板の下から潛出して、一つ水の中から顯れたのがあります。大分大きうがすせ。」

成程、たらくと漆のやうな腹を正的に、甲に濡色の薄紅をさしたのが、仰向けに鰓を此方へ、むつくりとして、而して頭の尖に、黄色く輪取つた、其の目が凸にくるりと見えて、鱗のざらめ

く蒼味がかつた手を、ト板の縁へ突張つて、水から半分ぬい、と出た。
「大將、甲羅干しに板へ出る氣だ。それ乗ります。」

と男衆の云つた時、爪が外れて、ストーンと落ちた。
が、直ぐに、すぼりと胸を浮かす。
「今度は乗るぜ。」

やがて、甲羅を、残らず藻の上へ水から離して踏張つた。が、力足らず、乗出した勢が餘つて、取外すと、づんと沈む。

「や、不可い。」
忽ち猛然として又浮いた。

で、のしり、のしりと板へ手をかけ、見るも不器用に、堅い體を伸上げる。
「しつかりく、今度は大丈夫。あ、又迂つた。大事な處で。」と男衆は胸を乗出す。

汀のお珊は、褌をすらりと足を一寸踏替へた。奴島田は、洋傘を疊んで支いて、直ぐ目の下を、前髪に手庇して覗込む。

此の度は、場處を替へようとするらしい。

斜に甲羅を、板に添つて、手を掛けながら、するくと泳ぐ。此が、棹で操るが如くに成つて、夥多の可心持に乾いた龜の子を、カラ／＼と載せたまゝで、水をゆらくと流れて亡つた。が、熟として噓したものの一つない。

板の一方は細いのである。

其處へ、手を伸ばすと、腹へ抱込めさうに見えた。

いや、困つた事は、重量に壓されて、板が引傾いたために、だふん、と潛る。

「ほい、了つた。いや、申戯ぢやない。しつかり頼むぜ。」

と、男衆は欄干をトン／＼叩く。

あせる、と見えて、むらく／＼と紋が騒ぐ、と月影ばかり藻が分れて、端を探り／＼手が掛つた。と思ふと、ずぼりと出る。

「蛙だと青柳硯と云ふんです。」

「眞個さ。」

雖然、其の時も爲遂げなかつた。

「あゝ、惜い。」

男衆も共に、唯一息と思ふ處で、龜の、どぶりと沈む毎に、思はず聲を掛けて、手のものを落す心地で。

「執念深いもんですね。」

「あれ迄にしたんだ、揚げて遣りたい。が、最う弱つたかな。」

と言ふ間もなかつた。

此の時は、手の鱗も逆立つまで、しやつきりと、爪を大きく開ける、と甲の揺ぐばかり力が入つて、其の手を扁平く板について、白く乾いた小さな龜の背に掛けた。

「はゝあ、考へた。」

「此奴を力に取つて伸上るんです、や、や、どっこい。やれ情ない。」

ざぶりと他愛なく、又もや沈む。

男衆が時計を覗た。

「最う二時半です、これから中の島を廻るんですから、徐々歸りませう。」

「しかし、何だか、揚るのを見ないぢや氣が残るやうだね。」

「え、私も氣に成りますがね、だつて、日が暮れるまで掛るかも知れませんか。」

「妙に残惜いやうだよ。」

男衆は、汀の婦に一寸目を遣つて、密と片頬笑して聲を潜めた。

「申戯ぢやありませんぜ。ね、それ、何だか薄りと美しい五色の霧が、冷々と掛るやうです。…

變に凄いやうですぜ。龜が昇天するのも知れませんが、板に上ると、其の機會に、黒雲を捲起

して、震動雷電……」

「さあ、出掛けよう。」

二人は肩を寒くして、コト／＼と橋の中央から取つて返す。

やがて、渡果てようとした時である。

「一寸、一寸。」

と背後から、優いが張のある、朗かな、而して幅のある聲して呼んだ。何等の仔細なしには濟

むまいと思つた半日。それ／＼、言はぬ事か、それ言はぬ事か。

袖を合せて、前後に、ト齊しく振返ると、洋傘は疊んで、其は奴に持たした。纏毛一條もない

黒髪は、取つて捌いたかと思ふばかり、瘦ぎすな、透通るやうな頬を包んで、正面に顔合せた、襟は嘸、雪なす咽喉が細かつた。

「手前どもで、」と男衆は如才ない會釋をする。

奴は黙つて、片手を其の膝のあたりへ下げた。

「然うどす。」と判然云つて莞爾する、瞼に薄く色が染まつて、類なき紅葉の中の倂である。

「一遍お待ちやす……思を遂げんと氣がかりなよつて、見て居ておくれやす。私が手傳ふさかい

な。」

猶豫ひあへず、バチンと蓮の果の飛ぶ音が響いた。お珊は帶留の黄金金具、緑の照々と輝く玉

を、烏羽玉の夜の帯から星の手に取るよ、と白魚の指に外づして、見得もなく、友染を柔な膝な

りに、腰をなよ／＼と汀に低く居て——恰も腹を空に突張つてによいと上げた、藻を押分けた—

龜の手に、絶れよ、引かむ、とすらりと投げた。

帶留は、銀の曇つたやうな打紐と見えた。

其の尖は水に潜つて、龜の子は、ばかりと紐を噛む、ト袖口を軽く袂を絞つた、小腕白く雪を

伸べた。が、重量がかゝるか、引く手に幽に脈を打つ。其の二の腕、顔、襟、頸、膚に白い處は

云ふまでもない、袖、袂の、艶に色めく姿、爪尖まで、——宛然、細い、黒髪の毛筋を以つて、

線を引いて、描き取つた姿繪のやうであつた。

十八

池の面は、蒼く、お珊の唇のあたりに影を籠めた。

風少し吹添つて、城ある乾の天暗く、天満宮の屋の棟が淀り曇つた。何處ともなく、はたくと帆を打つ響きは、幟の聲、町には黄なる煙が走らう、數萬人の形を掠めて。……此の水のある空ばかり、雲に硝子を嵌めたる如く、美女の虹の姿は、姿見の中に映るかと、五色の絹を透過して、色を染めた木の葉は淡く、松の影が颯と濃い。

打紐に又脈を打つて、紫の血が通ふばかり、時に、腕の色ながら、しろくと鱗が光つて、其の友染に擲んだなりに懷中から一條の蛇の腕り出た、思ひかけず、ものの凄じい形に成つた。

「あ、」

と云ふ聲して、手を放すと、蛇の目輝く緑の玉は、光を消して、龜の口に銜へたまゝ、するするする、と水脚を引いて其のまゝ底に沈んだのである。

奴はじり／＼と後に退つた。

お珊は汀にすつくと立つた。が、血が留つて、佛は瑪瑙の白さを削つたのであつた。

此の婦が、一念懸けて、爲ると云ふに、誰が何を妨げ得よう。

日も待たず、其の翌の日の夕暮時、寶の市へ練出す前に、丸官が昨夜芝居で振舞つた、酒の上の暴虐の負債を累させるため、とあつて、——南新地の浪屋の奥二階。金屏風を引繞らした、四海波靜に青疊の八疊で、お珊自分に、雌蝶雄蝶の長柄を取つて、橋活けた床の間の正面に、美少年の多一と、さて、名はお美津と云ふ、逢阪の辻、餅屋の娘を、二人並べて据ゑたのである。晴の装束は、お珊が金子に飽かして間に合はせた、寶の市の衣裳であつた。

先づ上席のお美津を謂はう。髪は結ひたての水の垂るゝやうな、十六七が潰し島田。前髪をふつくり取つて、兩端へはらりと分けた、遠山の眉にかゝる柳の絲の振分は、大阪に呼んで(いたづら)とか。緋縮緬のかけおろし。橋に實を抱かせた笄を兩方に、雲井の薰をたきしめた、烏帽子、狩衣。朱總の紐は、お珊が手にこそ引結うたれ。着つけは桃に薄霞、朱鷺色絹に白い裏、膚の雪の紅の襲に透くやう媚かしく、白の紗の、其の狩衣を装ひ澄まして、黒緇子の帯、箱文庫。含羞む臉を染めて、玉の項を差俯向く、ト見ると、雛鶴一羽、松の羽衣搔取つて、曙の雲の上なる、宴に召さるゝ風情がある。

同じ烏帽子、紫の紐を深く、袖を並べて面伏さうな、多一は淺葱紗の素袍着て、白衣の袖を肅ましやかに、膝に兩手を差置いた。

前なるお美津は、小鼓に八雲琴、六人づゝが兩側に、ハオ、イヤ、と拍子を取つて、金蒔繪に銀鍔打つた欄干つき、輻も漆の車屋臺に、前囃子とて樂を奏する、其の十二人と同じ風俗。後囃子が、又幕打つた高い屋臺に、これは男の稚兒ばかり、すり鉦に太鼓を合はせて、同じく揃ふ十二人と、多一は同じ装束である。

二人を前に、銚子を控へて、人交せもしなかつた……其の時お珊の装は、また立勝つて目覺しや。

十九

寶の市の屋臺に付いて、市女また姫とも稱ふる十二人の美女が練る。……練衣小桂の紅の袴、とばかりでは言足らぬ。たゞ其の上下を装束くにも、支度の夜は丑満頃より、女紅場に顔を揃へて一人々々沐浴をするが、雪の膚も、白脛も、其の湯は一人づゝ紅を流し、白粉を波替へる。髪を洗ひ、櫛を入れ、丈より長く解捌いて、緑の雫すらくくと、香枕の香に霞むを待てば、鶏の聲數々聞えて、元結に染む霜の鐘の音。血も潔く清き身に、唐衣を着け、袴を穿くと、しらりと早や旭の影が、霧を破つて色を映す。

さて住吉の朝ぼらけ、白妙の松の樹の間を、靜々と詣で進む、路の裝を、臈月御殿、市の式殿

にはじめて解いて、市の姫は十二人。袴を十二長く引く。……其の市の姫十二人、御殿の正面に揖して出づれば、神官、威儀正しく彼處にあり。土器の神酒、結び昆布。やがて檜扇を授けらる。これを受けて、席に歸つて、緋や、萌黄や、金銀の縫箔光を放つて、板戸も松の繪の影に、雲白く梢を繞る松林に日の射す中に、一列に並居る時、巫子するすると立出でて、美女の面一人毎に、式の白粉を施し、紅をさし、墨もて黛を描く、と聞く。素顔の雪に化粧して、皓齒に紅を濃く含み、神々しく氣高いまで、お珊は爰に、黛さへほんのりと描いて居る。が、女紅場の沐浴に、美しき膚を衆に拙き、解き揃へた黒髪は、夥間の丈を壓へたけれども、一人渠は、住吉の式に連る事をしなかつた。

問際に人が缺けては事が濟まぬ。世話人一同、袴腰を捻返して狼狽へたが、お珊が思ふまゝな金子の力で、身代りの婦か急に立つた。

で、これのみ巫女の手を借りぬ、容色も南地第一人。袴の色の緋よりも冴えた、笹紅の口許に美しく微笑んだ。

「多一さん、美津さん、一寸、どないな氣がおしやす。」

唐織衣に思ひもよらぬ、生地 of 藝妓で、心易げに、島臺を前に、聲を掛ける。

素袍の紗に透過る、燈の影に淺葱とて、月夜に色の白いやう、多一は照らされた面色だつた。「なあ？」とお珊が聞返す、胸を薄く敷を襲ねた、雪の深い襲ねの襟に、檜扇を取つて挿して居た。

「御寮人様。」

と手を下げて、

「何も、何も、私は申されませぬ。あの、たゞ夢のやうにござります。」と漸と云つて、烏帽子を正しく、はじめて上げた、女のやうな優しい眉の、右を残して斜めに巻いたは、笞の疵に、無慚な縷帯。

お珊は黒目勝に、熟と睜つて、

「眞個に、然う云うたら夢やな。」

と清らかな襖のあたり、座敷を衝と向した。

ト柱、襖、其の金屏風に、人の影が残らず映つた。

映つて、而して、緋に、紫に、朱鷺色に、二人の烏帽子、素袍、狩衣、彩あるまゝに色の影。

特にお珊の黒髪が、一條長く、横雲掛けて見えたのである。

二十

時に、間を隔てた、同じ浪屋の表二階に並んだ座敷は、残らず丸官が借り占めて、同じ宗右衛門町に軒を揃へた、兩側の揚屋と齊しく、毛氈を聯ねた中に、やがて時刻に、爰を出て、一先づ女紅場で列を整へ、先立ちの露拂ひ、十人の稚兒が通り、前囃子の屋臺を挟んで、其處に、十二人の姫が續く。第五番に、檜扇取つて練る約束の、我がお珊の、市隨一の曠の姿を見ようため、藝妓、翳間をすらりと並べて、宵からこゝに座を構へた。

が、其の座敷もまだ寂寞して、時々、階子段、廊下などに、遠い燈音、近く床しき衣摺の音のみ聞ゆる。

お珊は袖を聞き、居直つて、

「まあな、眞個に夢のやうにあるな。私かて、夢かと思ふ。」

と、藤丈けた黛、恍惚と、多一の顔を瞻りながら、

「けど、何の、何の夢やおへん。たとひ夢やかて。……丸官はんの方もな、私が身に替へて、承知させた……三々九度やさかい、あゝした我まゝな、好勝手な、朝云うた事は晩に變へやはる人やけど、此ばかりは、私が附いて居るよつて、承合うて、どないしたかて夢にはせぬ。……あん

じよう思うておくんなはれや。

美津さん、

と娘の前髪に、瞳を返して、

「不思議な御縁やな。ほ、」

手を口許に翳したが、

「恠う云うたかて、多一さんと貴女とは、前世から約束したほど、深い交情でおいでる様子。今更ではあるまいけれど、私とは不思議な御縁やな。」

思うて見れば、一昨日の夜さり、中の芝居で見たまでは天王寺の常樂會にも、天神様の御縁日にも、つひぞ出會うた事もなかつたな。

一見で恠う成つた。

貴女な、ようこそ、芝居の裏で、お爺はんの肩摺つて上げなはつた。多一さんも人目忍んで、貴女の孝行手傳ははつた。……自分抱するよつて、一條など、可愛い可愛い女房はんに、澤山芝居を見せたい心や。又な、其の心を汲取つて、鶉へ嬉々お歸りやした、貴女の優しい、仇氣ない、可愛らしさも身に染みて。……

私はな、丸官はんには、軋々と……四角な天窓乗せられて、鶉の仕切も拷問の柱とやら、膝も骨も碎けるほど、辛い苦しい堪へ難い、石を抱く責苦に逢ふやうな中でも、身節も弛んで、恍惚するまで視めて居た。あの……扉の、お仕置場らしい青竹の矢來の向うに……貴女等の光景をば。

悪事は虎の千里走る、好い事は、花の香ほども外へは漏れぬ言ふけれど、貴女二人は孝行の徳、戀の功、恩愛の報だすせ。誰も知るまい、私一人、よう知つた。

逢阪に店がある、餅屋の評判のお娘さん、御両親は、どちらも行方知れず成つた、其の借錢やら何やらで、苦勞しなばる、あのお爺さんの孫や事まで、人に聞いて知つたよつて、不圖な、彼や此や談合しよう氣に成つたも、私ばかりの心やない。

天満の天神様へ行た、其の歸途に、つい虚氣々々と、最う黄昏や云ふ時を、寄つて見たい氣に成つて、貴女の餅屋へ土産買ふ振りで入つたら、

と微笑みながら、二人を前に。

「多一さんが、使の間を一寸逢ひに寄つて、町並灯の點された中に、其店だけは灯もつけぬ、暗いに島田が黒かつたえ。其のな、縋帯が白う見えた。」

小指を外らして指の輪を、我目の前へ、……お珊は其が縁を結ぶ禁厭であるやうにした。

「密々、話して居やはつたな。……其處へ、私が行合はせたも、此の杯の瑞祥だすぜ。」

こゝで夫婦に成らはつたら、直ぐにな、別に店を出して貰ふなり、世帯持つて其處から本店へ通ふなり、あの、お爺はんと、三人、あんじよ暮らして行かはるやうに、私がちやと引受けた。弟、妹の分にして、丸官はんに否は言はせぬ。よつて、安心おしやすや。え、嬉しいやろ。美津さんが、あの、嬉しいやうなえ。

「何うや、九太夫はん。」

と云つた、お珊は、密と聲を立てて、打解けた笑顔に成つた。

多一は素袍の浅葱を濃く、袖を緊めて、又其の顔を、はツと伏せる。

「ほ、多一さん、貴下、然うむつかしうせずと、胡坐組む氣で、杯しなはれ。私かて、丸官はんの傍に居るのやい、此の一月は籍のある、富田屋の以前の藝妓、其のつもりで酌をするのえ。假祝言や、儀式も作法も預かるよつてな。後に又あらためて、歴然とした媒人立てる。其の媒人やつたら、此の席でこないな串戯は言へやへん。」

然ない極らずと居ておくれやす。なあ、九太夫はん。」

「御寮人様。」

と片手を疊へ、

「私は最う何も存じません、胸一杯で、ものも申されぬやうにござります。が、其の九太夫は情なうござります。」

と、術なき中にも、ものの嬉しさうな笑を含んだ。

「然やかて、貴方、一昨日の暮方、餅屋の土間に、……そないして、話して居なはつた處へ、私が、ト行た……姿を見ると、腰掛框の縁の下へ、慌てまうて、潛つて隠れやはつたやないかいな。」

言ふ——其は事實であつた。——

「はい、唯今でこそ申します、御寮人様が又お意地の悪い。其の框へ腰をお掛けなされて、盆にあんころ餅寄せ、茶を持って、此の美津に御意ござります。」

其の上、入る穴はなし、貴女様の召しものの薫が、魔薬とやらを嗅ぎますやうで、氣が遠くなりました。

其の辛さより、犬に成つてのこゝくと、下屋を這出しました時が、尙ほ術なうござりましてござります。」

「ほ、可厭な、此の人は。……最初はな、内證で情婦に逢やはるより、何の餘所の人でないも

のを、私の姿を見て隠れやはつた心の裡が、水臭いやうにあつて、口惜いと思うたけれど、な、
……手を支いて詫言やはる……其の時に、門のとまりに、丁と乗つて、むぐぐ柿を頬張つて居
た、あの、大な猿が、土間へ跳下りて、貴下と一所に、頭を土へ附けたのには、つい、おろく
と涙が出たえ。

柿は、貴下の土産やつたさうに聞くな。

天王寺の境内で、以前舞はしてやつた、あの猿。どない成つた問うた時、些と知縁のものがあ
つて、其の方へ、とばかり言うて、預けた先方を話しなはらん、住吉邊の田舎へなと思つたら、
大切な許に居るやもの。

お、其なりで、貴方たちを、私が方へ、無理に連れまうて来て了うたが、うつかりしたな、
お爺はんは、今夜は私の市女笠持つて附いて貰ふよつて、それも留守。あの、猿は何うしたや
らな。

「はい、」

と娘が引取つた、我が身の姿と、此の場の光景、踊のさらひに臺辭を云ふやう、細く透る、が
聲震へて、

「お爺さんが留守の時も、あの、戸を閉めた中に居て、よくな、何時も留守してくれますのえ。」

二十二

「飼主とは申しましたが、却つて私の方が養はれました、あの、猿でさへ、……」

多一は片手に胸を壓へて、

「御寮人様は申すまでもござりません、大道からお拾ひ下さりました。……又旦那様の目を盗み
まして、私は實に、畜生にも劣りました、……」

「何や……怪我に貴方は何やかて、美津さんは天人や、其の人の夫やもの。まあ、二人して装束
をお見やす、雛を並べたやうやないか。」

けどな、多一さん、貴下な、九太夫やつたり、其のな、額の疵で、床下から出やはつた處は仁
木どすせ。澤山忠義な家來では執方やかてなささうな。」

と輕口に、奥もなく云うて退けたが、ほんのりと潤みのある、脛に淡く影が映した。

「あ、わやく云ふ事やない。……貴方、其の疵、眞個に最う疼痛はないか。こないした嬉しさ
に、づきくしたかて忘れう。けど、疵は刻んで消えまいな。私が傍に居たものを。美津さん
の大事な男に、怪我させて済まなんだな。」

然やけど、美津さん、怨みにばかり、思ひやすな。何百人か人目の前で、打擲されて、熟と堪

へて居やはつたも、辛抱しとげて、貴女と一所に、添遂げたいばかりなんえ。而したら、男の心中の極印打つたも同じ事、喜んだかて可いのです。」

お美津は堪へず、目に袖を當てようとした。が、朱鷺色衣に裏白きは、神の前なる薄紅梅、涙に濡らすは勿體ない。緋縮緬を手に搦む、襦袢は席の亂れとて、強ひて堪へた頬の鬢に、前髪の艶しとくと。

お珊は眦を多一に返して、

「喃、多一さんも然うだすやるな。」

「はい！」と聞返すやうにする。

「丸官はんに、柿の核吹かけられたり、口車に綱つけて廊下を引摺廻されたり、羅宇のポツキリ折れたまで、そないに打擲されやして、死身に成つて堪へなはつたも、誰にした辛抱でもない、皆、美津さんの爲めやるな。」

「なあ、貴方、」

「……………」

「え、多一さん、新枕の初言葉と、私もこゝで丁と聞く。……………女子は女子同士やよつて、美津

さんの味方して、私が聞きたい。貴方は然うはなからうけど、男は浮気な……………」

と見る、目がはつちりと輝いた。多一は俯向いて見なかつた。

「……………ものやさかい、美津さんの後の手券に、貴方の心を取つて置く。あゝまで堪へやした辛抱は、皆女子へ、」

「え、」

「あの、美津さんへの心中だてかへ。」

多一はハツと疊に手を……………其の素袍、指貫に、刀なき腰は寂しいものであつた。

「御寮人様、御推量を願ひたうござります。誓文それに相違ござりません。」

お美津の両手も、鶴の白羽の狩衣に、玉を揃へて、前髪摺れに支いて居た、簪の橘薫りもする。

「お……………嬉し……………」

と胸を張つて、思はず、つい云ふ。聲の綾に、我を忘れて、道成寺の一條の眞紅の絲が、鮮麗に織込まれた。

其は禁制の錦であつた。

ふと心付いた状して、動悸を鎮める氣に、襟なる繪扇の端を緊平と壓へて、ト後を見て、襖に

すらり磨いた、其の下げ髪の丈を視めた。
お珊の姿は陰々とした。

二十三

夫婦が二人、其の若い顔を上げた時、お珊は何気なき面色した。

「眞個になあ、くどいやうなが多一さん、よう辛抱しやはつた。中の芝居で、あの事がなかつたら、幾ら私が無理云うたかて、丸官はんに此の祝言を承知さす事は得爲んもの。……そりやな、夫婦には成らはつたかて、立行くやうに世帯が出来んと成らんやないか。」

通ひ勤めなり、別に資本出すなりと、丸官はんに、應、言はせたも、皆、貴方が、美津さんのために堪へなはつた、心中立一つやな。十年七年の奉公を一度に済ましなはつたも同じ事。

額の疵は、其の烏帽下に、金剛石を飾つたやうな光が映す……お、天晴なお婿はん。

さあ、お嫁はん、お酌せうな。」

と軽く云つたが、艶麗に、然も威儀ある座を正して、

「お盞。」
で、長柄の銚子に手を添へた。

朱塗の蒔繪の三組は、浪に夕日の影を重ねて、蓬萊の島の松の葉越に、如何にせし、鶴は狩衣の袖をすくめて、其の盞を取らうとせぬ。

「さ、お受けや。」

と、お珊が二度ばかり勧めたけれども、騒立つらしい胸の響きに、烏帽子の總の揺るゝのみ。美津は遺瀬なげに手を控へる。

ト熟と視て、

「お、まだ年の行かぬ、嬰兒はんや。多一はんと、酒事しやはつた覚えがないな。貴女盞を先へ取るのを遠慮やないか。三々九度は、嫁はんが初手に受けるが法やけれど、別に儀式だつた祝言やないよつて、何うなと構はん。」

然やつたら多一さん、貴方先へお受けやす。」

「はい、」と齊しく逡巡する。

「何うしやはつたえ。」

「御寮人様、一生に一度の事でござります。迎もの事に、ものが逆に成りませんやう、矢張り美津から……」

と一寸目を合せた。

「女から、お盞を頂かして下さりまし。」

「然やかて、含羞で居て取んなはらん。……何や、貴方がた、をかしなえ。」

ふと氣色ばんだお珊の狀に、座が寂として白けた時、表座敷に、テンテン、と二ツ三ツ、音じめの音が響いたのである。

二人は黙つて差俯向く。……

お珊は、するりと膝を寄せた。屹として、

「早うおしや！ 邪魔が入ると成らんよつて、私も直きに女紅場へ行かんと成らんえ。……な、あの、酌人が不足ない。」

二人は、せはしげに瞳を合して、頻に目でものを云つて居た。

「もし、」

と多一が急いた聲で、

「御寮人様、此の上に尙ほ罰が當ります。不足やなんの、然やうな事がありまして可いものでござりますか。御免下さりまし、申ませう。貴女様、其の召しました、兩方のお袂の中が動きます。……美津は、あの、其が可恐いのでござります。」と判然云つた。

唯、顔を檜扇に、白小袖の底を透して、

「此か、」

と投げたやうに言ひながら、衝と、兩手を申へ、袂を探つて、肩をふらりと、なよ／＼と其の唐織の袖を垂れたが、品を崩して、お手玉持つよ、と若々しい、仇氣ない風があつた。

「何や、此の二條の蛇が可恐い云うて？……兩方とも、言合はせたやうに、貴方二人が、自分たちで、心願掛けたものどつせ。」

餅屋の店で逢うた時、多一さん、貴下は此の袋一つ持つて居た。な、買つて来る次手はあつて、一夜祈はあげたけれど、用の間が忙しうて、夜さり高津の蛇穴へ放しに行く隙がない、頼まれて欲しい——云うて、美津さんに託けう、と其が用で顔見に行かはつた云うたやないか。」

二十四

「美津さんも又、日が暮れたら、高津へ行て放す心やつた云うて、自分でも一筋。同じ袋に入つたのが、二ツ、ちよんと、あの、猿の留木の下に揃へてあつて、——其の時、私に打明けて、二人して言やはつたは、つい一昨日の晩方や。」

其も此も、貴方がた、芝居の事があつてから、あんな奉公早う罷めて、すぐにも夫婦に成れるやうにと、身體は兩方別れて居て、言合せはせぬけれど、同じ日、同じ時に、同じ祈を掛けやは

る。……

蛇も二筋落合うた。

案の定、其の場から、思ひが叶うた、お二人さん。

彼處のな、蛇屋に蛇は多けれど、貴方がたの此の二條ほど、験のあつたは外にはないやろ。私
かて、親はなし、稚い時から勤をした、辛い事、悲しい事、口惜しい事、戀しい事、

と懐手のまゝ、目を睜つて、

「死にたいほどの事もある。……何々の思が遂げたいよつて、貴方二人に類似りたきに、同じ蛇
を預つた。今少し、身に附けて居たいよつて、慥うして置いておくれやす。

貴方、結ぶの神やないか。

けどな、思ひ詰めては、自分の手でも持つたもの。一度、願が叶うた上では、人の袂にあるの
さへ、美津さん、婦は、蛇は、可厭らしな！

よう貴女、此を持つまで、多一さんを思やはつた、婦同士や、察せいでか。——袂にあつたら、
粗相して落とすと成らん。憂慮なやろさかい、私が慥うするよつて、大事ないえ。」

と袖の中にて手を引けば、内懐の乳のあたり、浪打つやうに膨らみたり。

「婦の急所を壓へて置く。……乳胸へられて、私が死なうと、蓋の影も覗かせぬ。さ、美津さん、

先づ、お前に。」

お冊は長柄を丁と取る。

美津は蓋を震へて受けた。

手の震へで滴々と露散る如き酒の雫、蛇の色ならずや、酌參るお冊の手を掛けて燈の影なが
ら、青白き艶が映つたのである。

はた／＼とお冊が手を拍くと、豫て心得さしてあつたらう。廊下の障子の開く音して、すらす
らと足袋摺に、一間を過ぎて、又靜に此の襖を開けて、

「お召し、」

と其處へ手を支いた、裙模様の振袖は、島田の丈長、舞妓にあらず、家から齊眉いて来て居る
奴であつた。

「可いかい。」

「はい。」と言ひさま、はら／＼と小走りに、もとの廊下へ一度出て、其の中庭を角にした、向う
の襖をすらりと開けると、閨紅に、翠の夜具。枕頭に又一人、同じ姿の奴が居る。

お冊が黙つて、此方から差覗いて立つたのは、龍田姫のイんで、霜葉の錦の谿深く、夕映えた
るを望める光景。居たのが立つて、入つたのと、奴二人の、同じ八尺對扮装。紫の袖、白襟が、

紫の袖、白襟が。

袖口燃ゆる緋縮緬、ひらりと折目に手を掛けて、きりりと左右へ廻して、枕を蔽ふ六枚屏風、表に描いたも、錦葉なるべし、裏に白銀の水が走る。

「彼方へ。」

お珊が二人を導いた時、兎角して座を立つた、美津が狩衣の袴の裾は、膝を露顯な素足なるに、恐ろしい深山路の霜を踏んで、あやしき神の犠牲に行く……何故か疊に辿々しく、ものあはれに見えたのである。奴二人は姿を隠した。

二十五

屏風を隔てて、此の紅の袴した媒妁人は、花やかに笑つたのである。

一人を褥の上に据ゑて、お珊がやがて、一人を、其あとから聞へ送ると、前のが、屏風の片端から、烏帽子のなりで、するりと抜ける。

下髪であとを追つて、手を取つて、枕頭から送込むと、其處に据ゑたのが、すつと立つて、裾から屏風を抜けて出る。トすぐに續いて、絶つて抱くばかりにして、送込むと、おさへて置いたのが、はら／＼出る。

素袍、狩衣、唐衣、綾と錦の影を交へて、風ある状に、裾袂、追ひつ追はれつ、ひら／＼と立舞ふ風情に聞を通つた。巫山の雲に、棧懸れば、名もなき戀の淵あらむ。左、橘、右、櫻、衣の模様の色香を浮かして、水は巴に渦を巻く。

「おほ、ほ、ほ、」

呼吸も絶ゆげな、なえたやうな美津の背を、屏風の外で抱へた時、お珊は、其の花やかな笑を聞かしたのである。

好き機会とや思ひけむ。

廊下に楚音、ばた／＼と早く刻んで、羽織袴の、寶の市の世話人一人、眞先に、すつ／＼すつと来る、當浪屋の女房さん、仲居まじりに、奴が續いて、迎ひの人数。

口々に、

「御寮人様。」

「お珊様。」

「女紅場では、屋臺の粗も乗込みました。」

「貴女ばかりを待兼ねてござります。」

襖の中から、

「車は？」
と静に云ふ。

「綱も申し着けました、と世話人が答へたのである。

「待たせはせぬえ、大事な處へ、何や！」

と聲が凜とした。

黙つて、すたく、一同は廊下を引く。

とばかりあつて、襖をあけた時、今度は美津が闇に隠れて、枕も、袖も見えなんだ。

多一が屏風の外に居て、床の柱の、釣籠の、白玉椿の葉の艶より、ぼんやりとした素袍で立つた。

襖がくれの半身で、廊下の後前を熟と視て、人の影もなかつた途端に、振り返ると、引寄せた。

お珊の腕が頸にかゝると、倒れるやうに、ハタと膝を支いた、多一の唇に、俯向きさまに、衝と。

丸官の座敷を、表に視めて、左右に開いたに立寄りもせず、階子段を颯と下りる、と忽ち門へ姿が出た。

軒を離れて、庫に乗る時、欄干に立つた、丸官と顔を上下に合すや否や、矢を射るやうなこ

人曳。あれよ、あれよと云ふばかり、廊の灯に影を散らした、群集はばつと道を分けた。

寶の市の見物は、此よりして早や宗右衛門町の兩側に、人垣を築いて見送つたのである。

其の年十月十九日、寶の市の最後の夜は、稚兒、市女、順々に、後壓への消防夫が、篝火赤き女紅場の庭を離れる時から、屋臺の囃子、姫たちなど、傍目も觸らぬ婦たちは、然もないが、眞

前に神輿を荷うた白丁はじめ、立傘、市女笠持ちの人足など、頻りに氣にしては空を視めた。

通り筋の、屋根に、廂に、數々鴉が鳴いたのである。

次第に數が増すと、まさしくと、薄月の曇つた空に、嘴も翼も見えて、やがては、練ものの上を飛交はす。

列が道頓堀に小休みをした時は、立並ぶ芝居の中の見物さへ、頻りに鴉鳴を聞いた、と後で云

ふ。……

二十六

「宗八、宗八。」

浪屋の表座敷、床の間の正面に、丸田官藏、這個の成金、何の好みか、例なる詰襟の紺の洋服、

高胡坐で、座にある詰間を大音に呼ぶ。

「はッ、」

「き様、逢阪のあんころ餅へ、使者に、後押で駈着けて、今歸つた處ぢやな。」

「御意にござります、へい。」

「何か、直ぐに連れて此へ来る手筈ぢやつた、猿は、留木から落ちて縁の下へ半分身體を突込んで、斃死して居たげに云ふ……嘘でないな。」

「實説正銘にござりまして、へい。餅屋店では、爺の傳五めに、今夜、貴方様、お珊の方様、と額を敲いて、

「即ち、御寮人様、市へお練出しのお供を、お好とあつて承ります。……さて又、名代娘のお美津さんは、御夫婦此に——え、即ち逢阪の辻店は、戸を寄せ掛けた明巢にござります。」

處へ宗八、丸官閣下お使者といたし、車を一散に乗着けまして、隣家の豆屋の女房立會ひ、戸を押開いて見ましたれば、いや、はや、何とも悪食がないいた様子、お望みの猿は血を吐いて斃ち果てて居りましたに毛頭相違ござりません。」

「うむ。」

と苦切つて頷きながら、

「多一、あれを聞いたかい、其の通りや。しと、ぐつと見下ろす。」

一座の末に、うら若い新夫婦は、平伏して居たのである。

此より先、餘り御無體、お待ちや、などと、慌しい婦まじりの聲の中に、丸官の形、猛然と躍上つて、廊下を鳴らして魔の如く、二人の閨へ押寄せた。

襖をどんと突明けると、床の間の白玉椿、怪しき明星の如き別天地に、こは思ひも掛けず、二人の姿は、綾の帳にも蔽はれず、指貫やなど、烏帽子の紐も解かないで、屏風の外に、美津は多一の膝に俯し、多一は美津の背に額を附けて、五人囃子の雛二個、袖を合せたやうであつた。

揃つて、胸先がキヤ／＼と痛むと云ふ。

「酒啖へ、意氣地なし！」

で、有無を言はせず、表二階へ引出された。

欄干の緋の毛氈は似たりしが、今夜は額を破るのでない。

「練ものを待つ内、退屈ぢや。多一やい、皆への馳走に猿を舞はいて見せてくれ。恥辱ではない。汝や、丁稚から飛上つて、今夜から、大阪の旦那の一人。舊を忘れぬためと云ふ……取立てた主人の訓戒と思へ。」

呼べ、と言へば、婦どもが愚圖々々吐す。新枕は長鳴鶏の夜があけるまでは待兼ねる。

主従は三世の中ぢや、遠慮なしに閨へ推參に及んだ、悪く思ふまいな。汝や、天王寺境内に太

鼓たゝいて居て、ちよこんと猿負背で、小屋へ歸りがけに、太夫どのに餅買うて、汝も食ひをつた、行歸りから、其の娘は馴染ぢやげな。足洗うて、丁稚に成るとて、右の猿は餅屋へ預けて、現に猿ヶ餅と云ふこと、こゝに居る婦どもが知つた中。

田畝の鼠が、蝙蝠になつた、其の素袍ひらつかいたかて、今更隠すには當らぬやて。却つて車怯ぢや。遣つてくれい。

が、聞く通り、ちやと早手廻しに使者を立てた、宗八が歸つての口上、あの通り。残念な、猿太夫は斃ちたとあるわい。唄なと歌へ、形なと見せをれ。何吐す、

と、とりなしを云つた二三人の年増の藝妓を睨廻いて、
「やい、多一！」

二十七

「致します、致します。」

と呼吸を切つて、
「皆さん御免なさりました。」

多一はすつと衣紋を扱いた。

浅葱の素袍、侍烏帽子が、丸官と向う正面。藝妓、舞妓は左右に開く。

其の時、膝に手を支いて、

「……ま猿めでたうのう仕る、踊るが手許立廻り、肩に小腰をゆすり合せ、静やかに舞うたりけり……」

聲を張つた、扇拍子、疊を軽く拍ちながら、「筑紫下りの西國船、艦に八挺、舳に八挺、十六挺の櫓をを立てて……」

「喝乎々々。あゝ惜い、太夫が居らぬ。千代鶴やい、猿に成れ。一若、立たぬか、立たぬか、此奴。えゝ！ 婆どもでまけて遣らう、古猿に成れ、此奴等……立たぬか、おのれ。」

と立身上に、盞を取つて投げると、杯洗の縁にカチリと碎けて、颯と缺らが四邊に散つた。色めき白ける燈に、一重瞼の目を清しく、美津は伏せたる面を上げた。

「あゝ、皆さん、私が猿を舞ひまつせ。旦那さん、男のためです。畜生に成つてな、私が天王寺の銀杏の下で、トン／＼踊つて、養ふよつてな。世帯せいで大事ない、もう貴下、多一さんを

唐めんとおくれやす。

ちやと隙もらうて去ぬよつて、多一さん、さあ、唄ひいな、續いて、

と、襟の扇子を衝と抜いて、すらくくと座へ立つた。江戸は紫、京は紅、雪の狩衣被けながら、下萌ゆる血の、うら若草、萌黄は難波の色である。

丸官は掌を握つた。

多一の聲は凛々として、

「しもにんくの寶の中に——火取る玉、水取る玉……イヤア、」

と一つ掛けた聲が、忽ち切なさうに掠れた時よ。

(ハオ、イヤア、ハオ、イヤア) 霜夜を且つちる錦葉の音かと、虚空に響いた鼓の掛聲。

(コンコンチキチン、コンチキチン、コンチキチン、カラ、タツポツポ) 招鉦入れた後囃子が、遙に交つて聞えたは、先驅既に町を渡つて、前囃子の間近な氣勢。

が、座を亂すものは一人もなかつた。

「船の中には何とお寝るぞ、苦を敷寝に、苦を敷寝に楫枕、楫枕。」

玉を伸べたる脛もめげず、ツト美津は、壘に投げて手枕した。

其の時は、別に變つた様子もなかつた。

多一が次第に、齒も軋むか、と聲を絞つて、

「葉越しの葉越しの月の影、松の葉越の月見れば、しばし曇りて又冴ゆる、しばし曇りて又冴ゆる、しばし曇りて又冴ゆる……」

ト袖を卷いて、扇子を翳し、胸を反らして熟と仰いだ、美津の瞳は氷れる如く、瞬もせず睜ると齊しく、笑靨に颯と影がさして、爪立つ足が震へたと思ふと、唇をゆがめた皓齒に、苔のやうな血を嚙んだが、烏帽子の紐の亂れかゝつて、胸に千條の鮮血。

「あ、」

と一聲して、ばつたり倒れる。人目も振も、しどろに成つて背に絶つた。多一の片手の掌も、我が唇を壓餘つて、血汐は指を溢れ落ちた。

一座わつと立騒ぐ。階子へ遁げて落ちたのさへある。

引仰向けて緊乎と抱き、

「美津さん!……二、二人は毒害された、お珊、お珊、御寮人、お珊め、婦!」

と、前後の屋臺の間に、市女の姫の第五人目で、お冊が朗かな聲を掛けた。背後に二人、朱の臺傘を廂より高々と地摺の黒髪にさしかけたのは、白丁扮装の駕籠人足。並んで、萌黄紗に朱の總結んだ、市女笠を捧げて従つたのは、特にお冊が望んだと云ふ、お美津の爺の傳五郎。
一印半纏、股引、腹掛けの若いものが、さし心得て、露じとりの地に据ゑた床几に、お冊は眞先に腰を掛けた。が、此は我儘ではない。練ものは、揃つて、宗右衛門町のこゝに休むのが習であつた。

屋臺の前なる稚兒をはじめ、間をものの二間ばかりづつ、眞直に取つて、十二人が十二の衣、色を勝つた南地の藝妓が、揃つて、一人づつ、皆床几に掛かる。

臺傘の朱は、總二階一面軒毎の緋の毛氈に、色映交はして、千本植ゑたる櫻の梢、廓の空に咲かゝる。白の狩衣、紅梅小袖、灯の影にちらちらと、囃子の舞妓、藝妓など、霧に揺揺つて、小鼓、八雲琴の調を休むと、後囃子なる素袍の稚兒が、浅葱櫻を織交せて、すり鉦、太鼓の音も憩ふ。動揺渡る見物は、大河の水を堰いたやう、見渡す限り列のある間、――一尺ごとに百目蠟燭、裸火を煽らし立てた、黒塗に臺附の柵の堤を築いて、兩方へ押分けたれば、練もののみが静まり返つて、人形のやうに美しく且つ凄い。

唯其の中を、福草履ひた〜と地を刻んで、袴の裾を忙しう。二人三人、世話人が、列の柵

摺れに往きつ還りつ、時々顔を合はせて、二人囁く、直ぐに別れて又一人、別な世話人と一寸出遇ふ。中に一人落しものをしたやうに、うろ〜と、市女たちの足許を覗いて歩行くものもあつて、大な蟻の働振、然も事ありげに見えるばかりか、傘さしかけた白丁どもも、三人ならず、五人ならず、眉を擡め口を開けて空を見た。

其の空は、暗く濁つて、處々朱の色を交へて曇つた。中を一條、列を切つて、何處からともなく白氣が渡つて、細々と長く、遙に城ある方に靡く。此を、あたりの湯屋の煙、又、遠い煙筒の煙が、風の死したる大阪の空を、あらむ限り縫ふとも言つた。

宵には風があつた。其は冷たかつたけれども、小春風の日の餘殘に、薄月さへ朧々と底の暖いと思つたが、道頓堀で小休みして、やがて太左衛門橋を練込む頃から、眞暗に成つたのである。

鴉は次第に數を増した。のみならず、白氣の怪みもある所爲か、誰云ふとなく、今夜十二人の市女の中に、姫の數が一人多い。凡て十三人あると言交はす。

世話人徒が、妙に氣にして、其となく、一人々々數へて見ると、成程一人姫が多い。誰も彼も多いと云ふ。

念のために、他所見ながら顔を覗いて、名を銘々に心に留めると、決して姫が殖えたのではない。定の通り十二人。で、又見渡すと十三人。

……式の最初、住吉詣の東雲に、女紅場で支度はしたが、急にお珊が気が變つて、社へ参らぬ、と言つた爲に、一人俄拵へに數を殖やした。が、其は伊丹幸の政巳と云つて、お珊が稚い時から可愛がつた妹分。其の女は、と探つて見ると、現に丸官に呼ばれて、浪屋の表座敷に居ると云ふから、其の身代りが交つたと云ふでもないのに……
其さへ尋常ならず、とひしめく處に、搗てて加へて易からぬは、世話人の一人が見附けた——屋臺が道頓堀を越す頃から、橋へかけて、列の中に、たら〜、たら〜と一筆づゝ、血が落ちて居ると云ふのである。

二十九

一人多い、其の姫の影は臙でも、血のしたゝりは現に見て、誰が目にも正しく留つた。灯の影に地を探つて、穩ならず、うそ〜搜ものをして歩行くのは、其の血のあとを辿るのであらう。

消防夫にも、駕籠屋にも、敢て怪我をしたらしいのではない。婦たちにも様子は見えぬ。尤も、南地第一の大事な市の列に立てば、些細な疵なら、弱い舞妓も我慢して祕して退けよう。が、市に取つては、上もなき可思しさで。

世話人は皆激しく撃んだ。
知らずや人々。お珊は既に、襟に祕し持った縫針で、裏を透して、左の手首の動脈を刺し貫いて居たのである。

但、初から不思議な血のあとを拾つて、列を縫つて檢べて行くと、靜々揃つて練る時から、お珊の袴の影で留つたのを人は知つた。

こゝに休んでから、それとなく、五人目の姫の顔を差覗くものもあつた。けれども端然として居た。黛の他に玲瓏として顔に一點の雲もなかつた。が、右手に捧げた橋に見入るのであらう、寂しく目を閉ぢて居たと云ふ。

時に、途中では然もなかつた。爰に休む内に、怪しき氣のこと、點滴る血の事、就中、姫の數の幻に一人多い事が、何時となく、傳へられて、烈しく女どもの氣を打つた。

自然と、髪を垂れ、袖を合せて、床几なる姫は皆、齊しくお珊が臨終の姿と同じ、肩のさみしい風情と成つた。

血だらけだ、血だらけだ、血だらけの稚兒だ——と叫ぶ——柵の外の群集の波を、鯨に追はれて泳ぐが如く、多一の顔が眞蒼に顯れた。

「お呼びや、私をお知らせや。」

とお冊が云つた。

傳五爺は、懐を大きく、仰天した皺喉聲を振絞つて、

「多一か、多一はん——御寮人様は此處ぢや。」と喚く。

早や柵の上を踰越め越えて、虚空を掴んで探したのが、立直つて、衝と寄つた。が、床几の前に、ぱつたり倒れて、起直り状の目の色は、口よりも血走つた。

「あ、待遠な、多一さん、」

と黒髪揺ぐ、吐息と共に、男の肩に手を掛けた。

「毒には加減をしたけれど、私が先へ死にさうでな、幾度目をば瞑つたやろ。漸と此處まで堪へたえ。も一度顔を、と思ふよつて……」

丸官の握拳が、時に、瓦の欠片の如く、群集を打ちのめして掻き分ける。

「傘でかくしておくれやす。や、」と云ふ。

臺傘が颯と斜めに成つた。が、丸官の忿怒は遮り果てない。

靴足袋で青い足が、柵を踏んで乗らうとするのを、一目見ると、懐中へ衝と手を入れて、兩方へ振つて、扱いて、投げた。既に袋を出て居た蛇は、二筋電の如く光つて飛んだ。わ、と立騒ぐ群集の中へ、丸官の影は揉込まれた。一人乗のみならず、もの見高く、推掛つた

兩側の千人は、一齊に動揺を立て、悲鳴を揚げて、泣く、叫ぶ。茶屋揚屋の軒に餘つて、土尼の泥波を店へ映と……津浪の餘殘は太左衛門橋、戎橋、相生橋に溢れかゝり、壘屋町、笠屋町、玉屋町を横筋に渦巻き落ちる。

見よ、見よ、鴉が蔽ひかゝつて、人の目、頭に、嘴を鳴らすを。

お冊に詰寄る世話人は、又不思議にも、蛇が、蛇が、と遁惑うた。其の数は唯二條ではない。

屋臺から舞妓が一人倒に落ちた。其處に、めら／＼と鎌首を立て、這ひかゝつたためである。

それ、怪我人よ、人死よ、と其處も此處も湧揚る。

お冊は、心靜に多一を抱いた。

「よう、顔見せておくれやす。」

「口惜い。御寮人、と、血を吐きながら頭を振る。

「貴方ばかり殺しはせん。これお見やす、と忘れたやうに、血が洒れて、蒼白んで、早や動かし得ぬ指を離すと、刻んだやうに。緊乎と持つた、其の脈を刺した手の橋の、鮮血に染まつたのが、重く多一の膝に落ちた。

男は少時凝視めて居た。

「口惜いは私こそ、……多一さん。女は世間に何にも出来ん。戀し、愛しい事だけには、立派に

我まゝして見せう。

寶市の此の服装で、大阪中の人の見る前で、貴方の手を引いて……なあ、見事丸官を蹴て見せう、と命をかけて思うたに。……先刻盡させる時も、押返して問うたもの、お珊、お前へ心中立て、と一言いうてくれはらぬ。

一昨日の芝居の難儀も、慍うした内證があるよつて、私のために、堪へやはつた辛抱やつたら、一生に只た一度の、嬉しい思ひをしようもの、多一さん、貴下は二十。三つ上の姉で居て、何で慍うまで迷うたやら、堪忍しておくれや。」

とて、はじめて、はらくと落涙した。

絶入る耳に聞分けて、納得したか、一度は頷いたが、

「私は、私は、御寮人、生命が惜いと申しません。可哀氣に、何で、何で、お美津を……」

と聞きも果さず……

「わあ、」と魂切る。

傳五爺の胸を壓へて、

「人が立騒いで邪魔したら、撒散かいて拂ひ退けうと、お前に預けた、金貨銀貨が、其の懷中に澤山ある。不思議な事で、使はいで濟んだよつて、其もつて、な、えらい不足なやろけれど、不

足、不足なやろけれど、……あ、衛ない、最う身がなえて聲も出ぬ。

お聞きやす、多一さん、美津さんは、一所に連れずと、一人活かいて置きたかつた。貴方と二人、人は交ぜず、死ぬのが私は本望なが、まだ此の上、貴方にも美津さんにも、濟まん事や思うたによつてな。

違うたかえ、分つたかえ、冥土へ行てかて、二人をば並べて置く、……遺瀬ない、私の身にも成つてお見や。」

幽ながらに聲は透る。

「多一さん、手を取つて……手を取つて……離さずと……——左の此の手の動く方は、義理や、あの娘の手をば私が引く。……さあ、三人で行かうな。」

と床几を離れて、すつくと立つ。身動きに亂る、黒髪。髻弗つ、と真中から二岐に颯と成る。半ばを多一に振掛けた、半ばを握つて捌いたのを、翳すばかりに、浪屋の二階を指麾いた。

「おいでや、美津さんえ、……美津さんえ。」

練ものの列は疾く、ばらばらに糸が断れた。が、十一の姫ばかりは、さすが各自に名を恥ぢて、落ちたる市女笠、折れたる臺傘、飛々に、背を潛め、顔を蔽ひ、膝を折敷きなどしながらも、嵐の如く、中の島籠めた群集が叫喚の凄じき中に、紅の袴一人々々、點々として皆留まつた。

唯見ると、雲の黒き下に、次第に不知火の消え行く光景。行方も分かぬ三人に、遠く遠く前途を示す、其が光なき十一の緋の炎と見えた。

お珊は、幽に、目も遙々と、一人づつ、其の十一の燈を視た。

片しぐれ

今も慍う云ふのがある。

安政の頃木所南割下水に住んで、祿高千石を領した大御番役、服部式部の邸へ、同じ本所林町家主惣兵衛店、傳平の請人で、中間に住込んだ、上州瓜井戸うまれの千助と云ふ、年二十二三の兄で、色の生白いのがあつた。

小利口にきび／＼と立廻る、朝は六つ前から起きて、氣輕身輕は足輕相應、くる／＼とよく働く上、早く江戸の水に染みて早速に情婦を一つと云ふ了簡から、些と高い鼻柱から手足の爪まで、磨くこと洗ふこと、一日十度に及んだと云ふ。心狀のほどは知らず、中間風情には可憐男振の、少いものが、身綺麗で、勞力を惜まず働くから、これは然もありさうな事で、上下擧つて通りがよく、千助、千助と大した評判

分けて最初、其のめがねで召抱へた服部家の用人、關戸團右衛門の最良と、目の掛けやうは一通りでなかつた。

其の頼母しいのと、當人自慢の生白い處へ、先づ足駄をひつくりかへしたのは、門内、團右衛門とは隣合はせの當家の家老、山田宇兵衛召使ひの、葛西の飯炊。

續いて引掛つたのが、同じ家の子守兒で二人、三人目は、部屋頭何とか云ふ爺の女房であつた。いや、勇んだの候の、瓜井戸の姉は、べたりだが、江戸ものはころりと來るわ、で、葛西に、栗橋、北千住の鱒鮓を、白魚の氣に成つて、頭を撫でた。當人、女にかけては其のつもりで居る日の下開山、木の下藤吉、一番鎗、一番乗、一番首の功名をして遣つた了簡。

此の勢に乗じて、立所に一國一城の主と志して狙をつけたのは、あらう事か、用人團右衛門の御新姐、おくみと云ふ年は漸う二十と聞く、如何にも、一國一城に較へつべき至つて美しいのであつた。

が、此はさすがに、井戸端で名のり懸けるわけには行かない。さりとして用人の若御新姐、さして深窓のと云ふではないから、隨分臺所口、庭前では、朝に、夕に、其の下がひの棲の、媚かしいのさへ、ちら／＼見られる。

「千助や」

と優しい聲も時々聞くのであるし、手から手へ直接に、つかひの用の、うけ渡もするほどなので、御馳走は目の前に唯お預けだと、肝膽を絞つて悶えて居た。

其の年押詰つて師走の幾日かは、當邸の御前、服部式部どの誕生日で、邸中とり／＼其の支度に急がしく、何となく祭が近づいたやうにさゞめき立つ。

其の一日前の暮方に、千助は、團右衛門方の切戸口から、庭前へ廻つた。座敷に御新姐が居る事を、豫め知つての上。

落葉掃く様子をして、箒を持つて技折戸から。一寸言添へる事がある、此の節、千助は柔かな下帯などを心掛け、淺葱の襦袢をたしなんで薄化粧などをする。尤も今でこそあれ、其の時分中間が、顔に仙女香を塗らうとは誰も思ひがけないから、然うと知つたものはない。其の上、ぞつこん思ひこがれる御新姐お組が、優しい風流のあるのを窺つて、居廻りの夜店で表紙の破れた御存じの歌の本を漁つて来て、何となく人に見せるやうに捻くつて居たのであつた。

時に御新姐は日が短い時分の事、縁の端近へ出て、御前の誕生日には夫が着換へて出ようと云ふ、紋服を、又然うでもない、しつけの絲一筋も間違はぬやう、箆笥から出して、目を通して、更めて疊直して居た處。

「え、御新姐様、續きまして結構なお天氣にござります。」

「おや、千助かい、お精が出ます。今度は又格別お忙しからう、御苦勞だね。」

「何う仕りました、數なりませぬものも陰ながらお喜び申して居ります。」

「あ、おめでたいね、お客さまが濟むと、毎年ね、お前がたも夜あかしで遊ぶんだよ。まあ、其を樂みにしてお働さよ。」

ともの優しく、柔かな言に附入つて、

「もし、其につきまして、」

と香腕の傍へ蹲つて、採手をしながら、圖々しい男で、ずつと顔を突出した。

「何とも恐多い事ではござりますが、御新姐様に一つお願があつて罷出ましてござります、へい。外の事でもござりませんが、手前は當年はじめての御奉公にござりますが、承りますれば、大殿様御誕生のお祝儀の晩、お客様が御立歸りに成りますると、手前ども一統にも、お部屋で御酒を下さりまするか。」

「あ、無禮講と申すのだよ。たんとお遊び、そしてお前、屹と何かおありだらう、隠藝でもお出したと可いね。」

と云つて莞爾した。千助、頸許からぞく／＼しながら、

「滅相な、隠藝など、へ、へ、就きましてでござります。其の無禮講と申す事で、従前にも向後も、他なりません此のお邸、決して、然やうな事はござりませぬまいが、羽目をはづして酔ひますると、得て間違の起りやすいものでござります。其處を以ちまして、手前の了簡で、何と、今年は一つ、趣をかへて、お酒を頂戴しながら、各々國々の話、土地所の物語と云ふのをしめやかにしようではあるまいか。と、申出ました處、部屋頭が第一番。いづれも當御邸の御家風で、おと

なしい、實體なものばかり、一人も異存はござりません。

處で發頭人の手前、出来ませぬまでも、皮切をいたしませぬと相成りませんので。

國許にござります、其の話につきまして、其を饒舌りますのに、實にこまりますことには、事柄の續の中に、歌が一つござります。

部屋がしらは風流人で、かむりづけ、ものはづくしなどと云ふのを遣ります。川柳に、(歌一つあつて話につまづき)と云ふのがあると、何時かも笑つて居りました、成程其の通りと感心しましたのが、今度は身の上で、歌があつて蹴躓きまして、部屋がしらに笑はれますのが、手前口惜しいと存じまして、へい。

と然も、若氣に思込んだやうな顔色をして云つた。川柳を口吟んで、かむりづけを樂む其の結構な部屋がしらの女房を怪しからぬ。

「少々ばかり小遣の中から恠やうなものを、」

と懐中から半分ばかり紺土佐の表紙の薄汚れたのを出して見せる。

「おや、歌の、お見せな。」

と云ふ瞳が、曇みかけた夫の禮服の紋を離れて、千助が懐中の本に移つた。

「否、お恥かしい、お目を掛けるやうなのではござりません、それに夜店で買ひましたので、御

新姐様、お手に觸れましては汚うござります。」

と引込ませる、と水ではなと云ふのでも、お組はさすがに武家の女房、中間の膚に着いたものを無理に見ようとはしなかつた。

「然うかい。でも、お前、優しいお心掛だね。」

と云ふ、宗桂が歩のあしらひより、番太郎の桂馬の方が、豪さうに見える習で、お組は感心し

たらしかつた。然もさうすと千助が益々附入る。

「え、さぐり讀みに搜しましたが、どれが何だか分りません。其に、あゝ、何とかの端本か、と部屋頭が本の名を存じて居りますから、中の歌も、此から引出しましたのでは、先刻承知とやらでござりませう。其では種あかしの手品同様、慰みになりません。お願と申しましたは爰の事。お新姐様、一つ何うぞ何でもお教へなさつて遣はさりますし。」

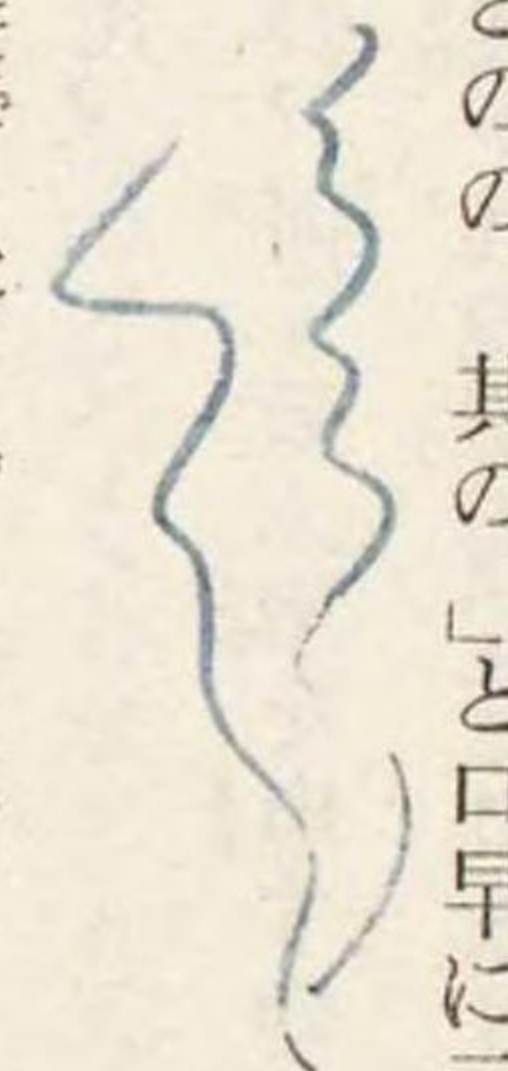
お組が、ついうつかりと乗せられて、

「私にもよくは分らないけれど、あの、何う云ふ事を申すのたえ、歌の心はえ。」

「へい、話の次第でござりまして、其が其の戀でござります。」

と初心らしく故と俯向いて赤く成つた。お組も、ほんのりと、色を染めた、が、庭の木の葉の夕榮である。

「戀の心はどんなのだえ。思うて逢ふとか、逢はないとか、忍ぶ、待つ、いろくあるわねえ。」
 「え、申兼ねましたが、其が其の、些と道なりませぬ、目上のお方に、身も心もうちこんで迷ひました、と云ふのは、對手が庄屋どのの、其の、と口早に云ひたした。
 お組は何の氣も附かない様子で、
 「お待ち、
 と少々俯向いて、考へるやうに、歌袖を膝へ置いた姿は、亦類なく美しい。
 「怒ういたしたら何うであらうね、
 思ふこと關路の暗のむら雲を、
 晴らしてしばしさせよ月影。
 分つたかい、一寸いまま思出せないから、然うしてお置きな、又氣が附いたら申さうから。」
 千助は目を瞑つて、如何にも感に堪へたらしく、
 「思ふこと關路の暗の、
 むら雲を晴らしてしばしさせよ月影。
 御新姐様、此の上の御無理は、助けると思召しまして、其のお歌を一寸お認め下さいまし、お使の口上と違ひまして、つい馴れませぬ事は下根のものに忘れがちにござります、よく拜見して
 覺えますやうに。」
 と、しをらしく言つたので、何心なく其の言に従つた。お組は、しかけた用の忙しい折から、冬の日はやや暮れかゝる、ついありあはせた躰の紅筆で、懐紙へ、圓鬚の鬢艶やかに、もみぢを流す……うるはしかりし水莖のあと。
 さて祝の夜、中間ども一座の酒宴。成程千助の仕組んだ通り、いづれも持寄りで、國々の話をはじめた。千助の順に杯が廻つて來た時、自分國許の事に擬へて、仔細あつて、世を忍ぶ若ものが庄屋の屋敷に奉公して、其の妻と不義をする段、手に取るやうに饒舌つて、
 「實は、此は、御用人の御新姐様に。」
 と紅筆の戀歌、移香の芬とする懐紙を恭しく擴げて、人々へ思入十分に見せびらかした。
 自分で許す色男が、思をかけて届かぬ婦を、かうして人に誇る術は。



三人の盲の話

直ぐに知れた……
 「私かい。」
 と直ぐに答へて、坂上は其のまゝ立留まつて、振向いた……ひやりと肩から窺みながら、矢庭に吠える犬に、(畜生)とて擬勢を示す意氣組である。

来て、其の行違つたものは、一なりびに並んだ三人づれで、どれも悄乎とした按摩である。中に挟まれたのは、弱々と、首の白い、髪濃い、中年増と思ふ婦で、兩の肩がけつそり瘦せて、襟に引合せた袖の影が——瘦せた胸を雙の乳房まで染み通るか、と薄暗く、裾をかけて、帯の色と同じやうに——黒く映して、ぴたくぴたくと草履穿か、地とすれすれの褌を見た。先に立つたのは鼠であらう、夜目には此の靄を織つてなやした、被布のやうなものを、ぐたりと着て、縁なしの帽子らしい、ぬいと、のはうづに高い、坊主頭其のまゝと云ふのを被つた、脊のひよろりとしたのが、胸を敵らして……通る。

後なる一人は、中脊の細い男で、眞中の、其の盲目婦の髪影にも隠れさうに、帯に體を附着けて行違つたのであるから、形、恰好、孰れも判然としない中に、此の三人目のが就中臙に見えた。

此の癖、もしく、と云つた、……聲を聞くと、一番あとの按摩が呼留めた事が、何うしてか

「もしく、其處へ行らつしやりますお方。」……と呼ぶ。

呼ばれた坂上は、此の聲を聞くと、外套の襟から先づ悚然とした。……誰に似て可厭な、何時覺えのある可忌しい調子と云ふのではない。が、辿りかゝつた其のたらく上りの長い坂の、下から丁ど中央と思ふ處で、靄のむらくと、動かない渦の中を、見え隠れに、浮いつ沈みつする體で、蹙音も聞えぬばかり——四谷の通りから穴の横町へ續く、坂の上から、しよなく下りて来て、擦違つたと思ふ、と其の聲。

何の約束もなく、思ひも懸けず行違つたのに、ト見ながら行過ぎるうち、其れなり何事も無しには分れまい。呼ぶか、留めるか、屹と口を利くに違ひない、と坂上は不思議にも然う思つた。尤も其は、或機會に五位警が闇夜を叫ぶ、鴉が啼く、と同じ意味で、聞くものは、其處に自分一人でも、鳥は誰に向つて呼ぶのか分らない。けれども、可厭な、可忌しい聲を聞かすには濟むまい、と思ふと案の定……

「構ひなさんな。」
 無理な首尾の、婦に忍ぶ夜であつた……
 坂上は憤然として、
 「何處へ行つても可いではないか。」

「はあ、お前様で。」
 と沈んで云ふ。果せる哉、殿の瘦按摩で、恚う口をきく時、霧を漕ぐ、杖を權に、斜めに握つて、坂の二三歩低い處に、伸上るらしく仰向いて居た。
 先の二人、頭の長いのと、何かに黒髪を結んだのは、芝居の樂屋の鬘臺に、鬘をのせて、倒に釣した風情で、前後になぞへに並んで、向うむきに立つて、同伴者の、然うして立淀んだのを待つらしい。
 坂上は外套の袖を捻ぢて、踵を横さまに踏みながら、中折の庇から、對手の眉間を透かし視つた。
 「私に用か。」
 「一寸……お話しが……ありまして……」と落着いたのか、息だはしいのか、冬の夜ふけをなまぬるい。

「用事は何です。」
 はじめ、霧の中を、此の三人が来て通りすがつた時、長いのと短いのと、野墓に朽ちた塔婆が二本、根本にすがれた尾花の白い穂を纏らせたまゝ、土ながら、風の餘波に、ふは〜吹き送られて来たかと思つた。
 漸つと、其の(思つた)が消えて、まぎ〜と恚うしてもものを言交はせば、武藏野の丘の横穴めいた、山の手場末の寂びた町を、搜り〜に稼いで歩行くのが、誘ひ合はせて、年を越す蚊のやうに、細い笛の音で、やがて木賃宿の行燈の中へ消えるのであらうと、合點して、坂上も稍もの言ひが穩かに成つたのである。
 按摩は其仰向いて打傾いた、耳の痒いのを搔きさうな手つきで、右手に持添へた杖の尖を、軽く、コト〜コト〜と弾きながら、
 「用と云うて、別に、此と云うてありません。ありません、けれども、お前様今から、何處へ行かれます。何處へ、何處へ、何處へ……と些と嘲けるやうに、小鼻で調子を取つた聞き方をする。
 「構ひなさんな。」
 無理な首尾の、婦に忍ぶ夜であつた……
 坂上は憤然として、
 「何處へ行つても可いではないか。」

「これは、私一人か……
其處に居る人も。」

「たい。」

「行つては不可いと云ふかね。」と、心かかりな今夜の逢ふ瀬の、辻占にもと裏問へば……
「悪いと云うたりとて、お前様氣一つで行かるれば、それまでの事ではあれど、先づお留め申し

「如何にも、もし、それが悪い……」

「杖を持つた手の甲を、丁と敲き、

「然う言はれる、申される……」

「ともものいひも重く成る。」

「遅いのが、何で悪い。」

「激しく動くは胸ばかり……づんぐと陰氣な空から、身體を壓附けられるやうで、

「……山深く谷川の流に望んだ思ひの、暗夜の四谷の谷の底、時刻は丁ど一時頃。
「遅いのが、何で悪い。」
「ともものいひも重く成る。」
「然う言はれる、申される……」
「杖を持つた手の甲を、丁と敲き、
「如何にも、もし、それが悪い……」
「行つては不可いと云ふかね。」と、心かかりな今夜の逢ふ瀬の、辻占にもと裏問へば……
「悪いと云うたりとて、お前様氣一つで行かるれば、それまでの事ではあれど、先づお留め申し

「可うない、其が可うない、お前様、」と押附けに言つた聲に、振切つては衝と足の出ぬ力が籠る。
「何故悪いんだね。」

と、却つて坂下へ小戻りにつかくと近づいたが、餘り傍へ寄ると、霧が、ねばくとして顔へ着きさうで、不氣味で控へた。
「もう遅い！」

と急に幅のある強い聲。按摩は其の時、がつくりと差俯向く。

立ち窘んだ體だつた、長頭の先達盲人は、此の時、のろりと身動きして、横に崖の方へ顔を向けた。

次の婦は、腰から其の影を地へ吸込まれさうに、悄乎と腰をなやして踞む……鬢のはづれへ、ひよろりと杖の尖が抽けて青い。

三人が根をおろしたらしく見て取ると、坂上も、急には踏出せさうもなく、足が地に附着いたが、前途を急ぐ胸は、はツツと、毒氣を掴んで口から吹込まれさうに躍つて、血を動かしては、ぐつと膨れ、肉をわな、かしては、げつそり挫ける。

坂の其の兩方は、見上げて峰の如き高臺のなだれた崖で、……時に長頭が面を向けた方は、空に一二軒、長屋立が恰も峠茶屋と云ふ形に、霜よ、と霧のたまり積んだ、枯草の上に、灯の影

もなく鎖さるゝ。

で、此のものどもの寄つた方は、木の根ぐるみ地壓への枕も露顯に、泥の崩れた切立てで、上には樹立が参差と骨を繋ぐ。其の枝の所々、濁つた月影のやうな可厭な色の霧が擲んで、星もな

と云つて、杖をまつすぐに持直すと、むかうで長頭が、一つ幽な咳。

三

「行くなつたつて、行かなけりや成らない所だつたら何うします。」
と坂上の呼吸はあせつた……

「親が大病だか、友だちが急病だか、知れたもんですか。……君たちのやうに言つちや、何か、
然も怪しい所へでも出掛けるやうだね。」

「へ、へ、へ、」
と杖の尖に頬をすりつけると、可厭に笑ひ、

「其が分ればこそ申すのなり、あの人も言へと言ひます……當てますか、私が。……知つても大
事ない。明けて爾々とお言ひなされ。お前様は婦に逢ひに行く、」

「……」
「な、然も、先方は、義理、首尾で、差當つては間の悪い處を、お前様が突詰めて、斷つて、垣
も塀も、押倒し突破る、……其の力で、胸を搔掻るやうにあせるから、婦も切つて、身にも生命
にも代へて逢はうと云ふ。其へ行く……お前様、其の途中であります。通りがかりから、行逢

うて、慥うやつて擦違うたまでの恐音で、よう知れました。とぼくした、上の空なので丁と分
る……

霧もかゝり、霜もおりる……月も曇れば星も暗し、此の太空にも迷ひはある。迷ひも、其は穩
かなれども、胸の塞り呼吸が閉る、もやくやなあとの、電、はたゝがみを御覽せい。

人間の思ひ、何事も不思議はない。
私が心に思較べた……身に引較べればこそ、此の掌を……」

と云ふ、己が面へ、掌を蓋する如くに、
「……掌を見るとやら申す通り、見えぬ目にも知れました。」

あとの二人とも、此の時言合はせた體に、上と下で、衣ものの襞積まで、頷いたのが腕に分つ
た。

坂上は、氣拔けのした狀に、大息を吻と吐いて、
「辻で賣卜をする人たちか。私も氣が急いだので、何か失禮を言つたかも知れない……」

先方は足袋跣足で、或家を出て、——些と遠いが、これから行く所に、森のある中に隠れて待
つた切、一人で身動きも出来ないで居るんです。

其の事は、私が今まで居た所へ、當人から懸けた、符牒ばかりの電話で知れて、實際、氣も顛

倒して急ぐんです。行かないで何うしますか、行つては悪いんですか。」
「われら考へたも其の通り……いや、男らしく、よう申されました。さて、いづれもお最惜しい
が、あゝ、危い事かな。」

と杖を引緊めるやうに、胸へ取つて両手をかけた。瘦按摩は熟と案じて、
「先づお聞き申すが、唯今、此の坂の此の、われらが片寄つて路傍に立ちました……此の崖下に、
づら／＼となぞへに並びました瓦斯燈は、幾基が所燈が點いて、幾基が所消えて居ります。一寸、
御覽せ、一寸御覽せ。」

と言ひ／＼、がく／＼と項を掉つて首を垂れる。
言に引向けられたやうに、三人の並んだ背後を拾つて、坂下から、上の町へ、トづらりと視る
と……坂上は今夜はじめて此の路を通るのではない。……片側へ並べて崖添ひに、凡そ一間おき
ぐらるに、間を籠めて、一二三堂と云ふ、界限の活動寫眞の手で建てた、道路安全の瓦斯燈がす
くすくある。

しろ／＼と霜柱のやうに冷たく並んで、硝子火屋は、崖の巖穴に一ツ一ツ窓を開けた風情に見
えて、ぼつたり、燈が消えたあとを、目の届く、どれも是も、靄を嚙んで、吸ひ溜め吸ひ溜め、
透間を覗いて切れ／＼に灰色の息を吹出す。

かと思へば、目の前に近いのは、あらゆる事か、鬼の首を古綿で面形に取つた形に、靄がむらむ
らと瓦斯燈の其の消えたあとに蟠つて、怪しく土蜘蛛の形を顯し、同じ透間から吹く息も、これ
は可恐しい絲を手繰つて、天へ投掛け、地に敷き展べ、宙に綾取る。や、然う思へば、靄のねば
ねばは、這個の振舞か。

四

「大抵、皆消えて居ります筈で。」
と按摩は、坂上が然うして、きよろ／＼と瓦斯燈を胸す内に、先んじて又云つた。
「すつかり消えて居る。あゝ、と尙ほ一倍、夜の更けたのが身に染みた。
「な、消えて居りませう……けれども、お前様から、坂の上の方へ算へまして、其の何臺目かの
瓦斯が一つ、まだ燈が點いて居らねばなりません。……見えますか。」
「見える……。」
と答へた、如何にも一臺、薄ぼんやりと、灯が亂れて、靄へ流れさうに點いて居る。
「しかし、何本めだか一寸分らない。
「餘り遠い所ではありませぬ。人通りのない、故道松並木の五位堂は、人の居處から五本目の枝

に留ります、道中定り。……其の灯の消残りましたのは、お前様から、上へ五本目と存じます。私が間違つた事を言ひますれば、其處に居ます師匠、沙汰をします筈。點つて立つて居ります上は、決して相違ないと存じます。數を取つて御覽ぜ、御覽ぜ……一つ、と杖の尖をカタ／＼と二つ鳴らす。

「一い……」

「二ツ、」と三ツ、杖の尖をコト／＼コト。

「三い……四う……確に五本目……」

「でありませうな。」

「何うしたと云ふんです。」

「お前様、此の暗夜に、われらの形、崖の様子、消えた瓦斯灯の見えますのも、皆其の一つの影なので。然もない事には、鼻を撮まれたとて分りませぬが。」

成程、覺束ない、ものの形も、唯一ツ其の燈の影なのである……心着くと、便りない色ながら、

其の力には、揃つて消えた街燈が、時々ぎら／＼と光りさへする——雷が息を吐いて瞬く中に、

坂上の姿もふら／＼として、
「一體、其が何うしたんです。」

「然れば……其の五基目に一ツ残りました灯の下に、何か見えはいたしませぬか。」

「何が、」

と云ふのも聲が震ふ、坂上は又慄然とした。

「何か、居はいたしませぬか。」

「何にも、何にも居らん。」

「居りませぬか。」

「居ない。」

「居ないが定に成りませぬ。お前様が其處までお運びなされますれば、必ず出ます。……それ故に、お留め申すのであります、まあ、お聞きなさいまし。」

と捻向いて、瘦按摩は腰を屈めながら、丁ど足許に一基あつた……瓦斯灯の根を、其處に轉がつた、ごろた石なりにカチ／＼と杖で鳴らした。が音も響かず、雷に沈む。

「先づ……最う一ツ念のために申さうに……われらが居ります此なる瓦斯灯、唯た今、お前様を呼留めましたなり、一步とて後へも前へも動きませぬ……此は坂下からはじめまして、立ちました瓦斯灯の、十九基めに相違ありませぬ。

間違へば、師匠沙汰をなされます。

足袋蹴足で出たと云ふ、今夜は、もしま、あの友染に……あの裾模様、と思ふけれども、不
見馴れて氣に染みついた、其の黒縹子に、小辨慶。
坂上は血の冷えるあとを赫と成る。

と慥う言ひます。
私も血氣で、何を言ふ。第一、其魔ものとはどんなものか、と突懸つて訊きますと、其の盲人
ニヤリともせず、眞實な顔をしまして、然れば、然れば先づ、守宮が冠を被つたやうな、白犬が
胴伸びして、頭に山伏の兜巾を頂いたやうなものぢや、と性の知れぬ事を言ふ。
いや、聞くよりは見るが疾い。さあ、生命を取られて遣らう、と元來、あたまから眞とは思ひ
ませぬなり。づかづか、其の、……其處の其の五基めの瓦斯燈の處まで小砂利を蹴つて参ります
と、道理な事、何の仔細もありません。
處に、右の盲人、カッ／＼と杖を鳴らして、刎上つて、飛んで参り、これは無體な事をなされ
る。……強い元氣ぢや。私が言うて聞かす事を眞とは思はぬ汝に、言託けるのは無駄ぢやらうが、
ありやうは、右の魔ものは、さしあたり汝の影を、掴まうとするではない。
今夜……汝が逢ひに行く……其の婦の影を捉らうと、豫てつけ狙うて居るによつて、嚴い用心、
深い謹慎をしますやう、汝を通じて、其の心づけがしたかつたのぢや。
と慥う又言ふのであります。

「まざ／＼と謔言吐く……私の婦知つたりや、と問ひますと、其を知らいで何を……今日も
晩方、私が相長屋の女房が来て来て話した。谷町の湯屋で逢うたげな。……よう湯の煙で溶けな
んだ、白雪を撫でてふつくりした、其は、其は、綺麗な膚を緋で緊めて、淡い淺葱の紐で結へた、
乳の下する／＼と迂るやうな長襦袢。小春時一枚小袖、藍と紺の小辨慶、黒縹子の帯に、又緋の
扱帯……鬘に水色の絞りの手絡。艶の雫のしたゝる鬘に、ほんのりとした耳のあたり、頸許の美
しさ。婦同士も見惚れたげで、前へ廻り、背後で視め、姿見に透かして、裸身のまゝ、つけまは
いて、黒子が一つ、左の乳の、白いつけ際に、ほつりとある事まで、よう知つたと云ふ話。
何と、此の婦に相違あるまい、汝が逢ひに行く其の婦は……
と又其の盲人が云ふのであります。」

聞くうちに、坂上は、ぶる／＼と身震ひした。其は、其處に、此の話をする按摩の背後に跪い
居て、折から面を背けた婦が、衣服も、帯も、まさしく、歴然と、其の言葉通りに目に映つた
めばかりではない。――

「今度、……其の次……段々に婦に逢ふ事が少くなりました。」
 兎角むかうで、私を避けるやうにしますのであります。
 ……殺して死なう、と逆上するうち、段々委しく聞きますと、其の婦が、不思議に人に逢ふのを嫌ふ。妙に姿を隠したがるのは、此の、私ばかりには限らぬ様子。
 終には猫又が化けた、妾のやうに、日の目を厭うて、夜も晝も、戸障子雨戸を閉めた上を、二重三重に屏風で圍うて、一室どころに閉籠つた切、と言ひます……

他人に、膚を見せたと思ふ如きから、——婦が膝に突俯して、震へる聲の下で、途中、どんなものに逢つて誰に聞いた話だ、と右の影を捉る魔について尋ねました時、——おのれ、胸に問へ！
 なぞと云うて、盲人から聞いた事は言はずに了つたのであります。
 此が飛んでもない心得違ひ。其の盲人こそ、其の婦に思ひを懸けて、影のやうに附絡うて、それこそ、婦の家の居まはりの瓦斯燈のあたりで見れば、守宮か、と思ふ形體で、裏板塀、木戸、垣根に、いつも目を赤く、面を蒼く、唇を白く附着いて、出入りを附狙つて居たとの事。
 はじめから、威したものが盲人と知れば、婦も然までは呪詛れずに済んだのでありませう。」

「何うでありませう。お前様。此から逢ひにおいでなさうと云ふ、其の婦の方は、裾模様、錦の帯、緋縮緬の蹴出しでも。……其の黒縷子に、小辨慶の藍と紺、膚の白さも可いとして、乳房の黒子まで言ひ當てられました、私が其の時の心持、憚りながら御推量下さりまし。
 こゝな四谷の谷底に、酷い事、帯紐取つて、あか裸で倒されてでも居りますのが、目に見えるやうに思はれました。
 で、右の其の盲人は、例の魔ものは、其の婦の影を、嘗めう、吸はう、捉へよう、蹂躪らう、取喰はうとつけ廻す——此の儀を汝から託けて、氣を注げるやう言ひなさい、と申したのを、よくも聞かずに、黒雲を捲いて、飛んで行き、電のやうに、鐵の門、石の唐戸にも、遮らせず、眞赤な胸の炎で包んで、弱い婦に逢ひました。
 影を取る、影を吸ふ、影を嘗める、魔ものに逢つた。此の坂しかくの瓦斯燈のあたりで見つて来た。……
 婦の家は、つい此の居まはりでありました。——
 夜も晝も附廻すぞ、それ、影が薄いわ、用心せい、とお前様。
 可哀氣に、苦勞で氣やみに煩つて、帯をしめてもゆるむほど、細々と成つて居るものを、鐵槌で打つやうに、がんぐと、あたまへ響くまで申しましたわ。
 他人に、膚を見せたと思ふ如きから、——婦が膝に突俯して、震へる聲の下で、途中、どんなものに逢つて誰に聞いた話だ、と右の影を捉る魔について尋ねました時、——おのれ、胸に問へ！
 なぞと云うて、盲人から聞いた事は言はずに了つたのであります。
 此が飛んでもない心得違ひ。其の盲人こそ、其の婦に思ひを懸けて、影のやうに附絡うて、それこそ、婦の家の居まはりの瓦斯燈のあたりで見れば、守宮か、と思ふ形體で、裏板塀、木戸、垣根に、いつも目を赤く、面を蒼く、唇を白く附着いて、出入りを附狙つて居たとの事。
 はじめから、威したものが盲人と知れば、婦も然までは呪詛れずに済んだのでありませう。」

漸との思ひ、念力で、其の婦を見ました時は、絹糸も、むれて、ほろ／＼と切れて消えさうに、なよ／＼として、唯うつむいて居たのであります。

顔を上げました……ト目が、潰れました。へい、いえ、其の婦の両眼で。

聞きますると、私に、件の影を捉る魔ものの話を聞いてからは、瞬く間さへ、瞳に着いて、我と我が影が目前を離れぬ。

臺所を出れば引窓から、縁に立てば沓脱へ、見返れば障子へ、壁へ、屏風へかけて映ります。映ると其の影を、魔が来て、吸ひさうで、嘗めさうで、踏みさうで、揉みさうで、絡みさうで、寝さうで成らぬ。

月の影、日の影、燈の影、雪、花の臘々のあかりにも、見て影のない隙はなし……影あれば其の不気味さ、可厭さ、可恐しさ、可忌しさに堪兼ねる。

所詮が嵩じて、眞暗がり。我が掌は見えいでも、歴々と、影は映る、燈を消しても同じ事。次第に、床の間の柱、天井裏、鴨居、障子の棧、疊のへり。場所、所を變へつゝ、彼の守宮の

形で、天窓にすぼりと何か被つた、あだ白い、胴の長い、四足で敵るものが、ぴつたりと附着いたり、ことりと圓くなつたり、長々と這ふのが見えたり……やがて、闇の中、枕の下にも居るやうに成りました。

見る毎に、あつと聲を上げて、追へば、其の疾い事、ちよろ／＼と走つて消えて、すぐに、のろりと顯れる。

見まい、見まいの氣が逆上つて、もの見えるは目のあるため、と何とか申す薬を、枕をかいもの、仰向けに、髪を縛つた目の中へ点滴らして、其の両眼を、盲にした、と云ふのであります。心も暗夜の手を取合つて、爾時はじめて、影を捉る魔ものの話は、坂の途中で、一人の盲人に聞かされた事を申して、其の脊恰好、年ごろを言ひますと、婦は、はつと、はじめて目の覺めたやうに成つて、さめ／＼と泣出しました。

思ひの叶はぬ意趣返しに、何と！右の其の横戀慕の盲人に、呪詛はれたに相違ありません。

頬の肉を引擱んで、口惜涙、無念の涙、慚愧の涙も詮ずれば、たゞ／＼最惜しさの涙の果は、おなじ思ひを一所にしよう、私これ又此の通り、兩眼を我と我手に、……これは針でズブリと突いたのであります。

三世、一娑婆、因果と約束が繋つたと、いづれも發起任り、懺悔をいたし、五欲を離れて、唯今では、其なる盲人ともろともに、三人一所に、杖を引連れて、晝は面が恥かしい、夜とあれば通ります……

路すがら行逢ひました。

御迷惑か存ぜぬが、霽の袖の擦合うた御縁とて、ぴつたり胸に當る事がありましたにより、お心着け申上げます……お聞入れ、お取棄て、ともお心次第。

此の上は、さて、何も存ぜぬ。然やうなれば、お暇を申受けます。」

言の下より、其處に、話の途中から、さめくと泣いて居た婦は、悄然として、しかも、すらりと立つた。

とぼくとした後姿で、長頭から三つの姿、消えたる瓦斯に、幻や、杖の影。

婦が、白い優しい片手で立つ時、眼を拭いた布が姿を偲ぶ……其の紅絹ばかり、ちらくと……蝶のやうに霽を縫ひ……

絲遊

「久潤。」

と、縞の袷に博多の帯をしめた男が、息ぜはしく、些と切なさうな聲をして言ふと、婦が、胸高に結んだ端然とした帯の上を柔かに一寸折つて、

「眞個にねえ。」

と言ふ、艶々とした結たての圓髻の、すなほな、すつきりした鬢がなぞへに、弱々と首低れた襟脚と、其の手絡の色が白かつた。

其を見る、男の目もすゝしかつた。とばかりで、二人はものも言ひ得ない。やがて、男が瘦せた肩に羽織の紐を、両手で内端に解き掛けて、

「あゝ、熱かつた。」

と云ふ口の、手では竹で編んだ丸火鉢を——郡内らしい、尤も聊か綿が入つたらう、が、此の温気にはもつけの虎侍で、さらりとした——茶と藍と紺の段々の座蒲團の傍へ引寄せらる。

此を隔てに、同じ蒲團の端を履して、嬋嬋にすらりと薄い、焦茶と紺の小辨慶のお召縮緬は鐵火ながら、袴の深い婦の膝。

で、鳩と云ふ身で、兩人が、言合せたやうに斜つかひに對向。時に、正午過ぎ一時間、五月半の眞日中も、青葉の蔭はもの静寂。で、身動ぐ衣の音する氣勢。女中が廊下を運んで来る、と遠くから音が聞えさうに思はれる、其の蹺音も、丁ど響かず。

久しぶりに顔を合せた。心なら、風情なら、世を隔てた山の奥の思ひがすると、蒲團の染も、土色に日射の隈、翠を透した樹立の下に、草を褥の趣がある。

「暑かつたでせう、何うしたつて陽氣なんでせうね、お節句のうちは冷々して、……今日は又急に恠うなんですもの。」

と手紙ぐらゐるに小さく疊んだ、——坐つた傍に軽く置いた、——紫の風呂敷の端を取つて、細りした胸のあたりを其のうつ向いたまゝ、そよ／＼と煽ぎながら、片手を火鉢の縁に掛けた。

然うした婦も、引寄せた男も、火鉢を扱ふ工合と言ひ、風采はどちらも寒さうに見える。其の所爲でもあるまいが、火鉢に又、女中が火を入れた事。

遊 絲
この内では、客あつかひに、まだ春のまゝ、煙草盆には取替へぬ。昨日今日、廣くて室の數が鶴、龜、梅、萩、とばら／＼あつて、つい手入れも届かないか、床の間の掛花活の矢車草は、

急な暑さにしをれたが、火鉢の灰には籬芥子が、めらくくと眞赤に咲く。

其れが、紅梅の散るやうに、婦の手にちら／＼映る。……震へるかと思ふ、しなやかな指のさきで、幽に縁を刻みながら、夜が寝られぬか、はれぼつたい、目ぶちをほんのりと顔を上げた。が、馴れた、遠慮のない、打明けた、解けた瞳で、

「餘程、お待ちなすつて。」

「あ、待たされたぜ。」

「済みませんねえ。」

と言ふと、颯と曇つたやうな濃い睫毛、と忘れたやうに煽ぐ手を止めた。其の紫を膝に落とすと、重いもののやうに再びうつむいて見た。

「ついね、支度はしても出憎くつて、」

男は腕を拱きながら、

「お前、無理をしやしないかな。」

二

「否、家の都合は可うござんした。ですから手紙を出したんです。」

と煙草を一口、とんと静かに拂いた様子には、然うした事にはもの馴れた、落着が胸にあり、青葉に帯の影が濃く、煙管の烏金艶やかに、

「けれども、ね、さあ出ると成ると、平時と違つて、女中にも気が咎めますもんですから、故と落着いたやうにして居て、それでも、そは／＼するんだわね。一度外へ出てから、貴方、紙入を忘れたのに気が着いて、又取りに戻つたり何かして。それも銀貨入れだけは持つて居たんですもの。……途中は別に要る事もあるまいと思つたけれども、おまゐりをして、其から買ものがある分で、御覽なさい。」

と煙管を落して、手を軽く其の紫へ。

「風呂敷を持つて出たんでせう。紙入を忘れたまゝでは、をかしいと思つて、慌てて取りに歸つたり……遅くなつて済みません。餘程待つて？」

「餘程處か、七時間」と眞顔で云つて、然も疲れたらしい顔をする。

「嘘ばかり、まあ、大袈裟な事を。」

と唇の紅が濡れたやうに、婦ははじめて莞爾した。

「否、眞個だよ。」

と時計を見て、着ゆるみのした袴の襟を、ぐいと合せて、

「唯今、一時と些と過ぎです。十二時頃と云ふお約束からは、一時間ぐらゐるしか後れて居はしな
いがね、待つたのは大變だぜ。」

「何うして。」

「家を出たのが、七時半。」

「七時半?……今朝のですか。」

「逆に日が暮れて堪りますか、申戯ぢやない。」

「何處か寄り路をするつもりだったの?」

「氣ばかり急ぐもの。」

と男も微笑み、

「うづかり寄路をして茶でも呑まうものなら……分けて此の頃の心持だもの。どんな半間な事を
喋舌つて、やつは何うかしてゐるぜ、なんて言はれようも知れないからね、誰も友達の處へ寄つて
来るつもりぢや、はじめからなかつたんだ。實は大掃除なのさ。」

「お宅が」と些と乗出す。

「あゝ。」

「丁ど可かつたわね。」

「何、可いものか。」

「だつて出よかつたでせう。」

「出るのには可いが途中が困つた。……今まで、何うして何處に待つて居たと思ひます。」

「然うね。」

と優しく打傾く。……

男は拗ねて、小突くが如く火鉢を押して、

「よ、お國さん。」

「ほゝゝ」と何か慌しげに、件の風呂敷を手まさぐりに取つて、細く口許を蔽うたのである。

「今しがた、其處の通りで、待あぐんだお前さんが、前途から、薄い茶色の洋傘で、漸と益ほど
な小さな蔭を拵へて、一人で町の左側を此方へ来るのを、引手繰るやうに見附けた時は、荒
物屋の前の、郵便箱の前に居たんだから、お前さんが、後れたと思ふ、雑と一時間、彼處に立つ
て居た事と思ふだらうけれど、……何うして、彼方此方ふらふらして、其までの弱りさ加減。第
一……」と言ひかけて、室のうちを覗いた、が、廊下の様子を聞いたのであつた。

「……」と言ひかけて、室のうちを覗いた、が、廊下の様子を聞いたのであつた。
眺へにはまだ間があるか、遠くからさへ、女中の歩の響いて來さうな氣勢もない。寂然とした、
広い家の何處か一所に、ことん、と球を突く音がする。

男は恣越しに、庭を視た。

「手紙で然う言つてお寄越したから、お前さんを待合はせようと思ふ、肝心の橋がないぢやないか。まだ驚いたのは、あの川さへなく成つた。水が干たばかりなら可いけれども、すつかり埋つて、窪地の焼砂と来て、眞赤な埃が立つて居ます。……歳暮に三人で通つた時から此方、やがて半年と云へば半年だけれど、餘り早い變りやうだね、悉皆埋立てたものらしい。

確か、そして、私の方から此方へ渡ると、橋の袂に、大きいんぢやないが、柳が一本あつた筈だね。」

と言ふ、庭の其の青葉の映つた顔には、深く物思ふ影が宿つた。

婦も、同じ色の、且つ果敢なさうに、

「え、ありました。ですから、昨日の手紙にも、橋の袂の柳の下で待つて下さい、と書いて上げませうと思ひましたけれど、……陰氣ですからね。……故と止めたんです。それでも、何故だか、矢張り、あの柳の蔭に待つて在らつしやるやうな氣がしてね。電車の中でも、人さんの襟も扱帯も、青いものばかり目に着いて、……思苦しいほど、急に暑いのに、其ればかりが

冷々と、……あの、其こそ、つかまつて一口吸ひたいほどに思ふんでせう。

一人のなんか、茫乎するほど熟と見詰めて、私、極が悪かつたわ。……其の人の挿して居た、翡翠の珠が欲しいんだ、と思はれたでせう。

電車は直き橋の詰へ留りますから、すぐ其の目の前に、貴方が立つておいでなさると……いくら氣を静めて居ても、又然うでもない、はつと思つて、ふと通りがかりの人に見られて悪いやうな様子があつては不可まですからね、一丁場前で下りて、故と澄まして歩行して來たの。それでも見通しですからね、下りると直ぐに青いものが見えるだらう、と遠くから柳ばかりを、……もう見える筈だと思ふのに、見えないぢやありませんか。

おや、場所を間違やしないか知ら、と其處等振返つて見たり、向したりしても、別に、處は違ひはしないのに。……柳ばかりなら可いけれど、と急に胸が動悸々々して、もしか御都合が悪くつて、それで来て下さらないのぢやなからうかと、此の蔭一つない眞晝間が、貴方、何だわ。眞暗に成つたやうな氣がしたわ。

然う……川もなくなつたんですか。……川も埋りませうよ。……私達を逢へないやうにする世間で、柳も伐つたんでせうよ、貴方に暑い思ひをさせようと思つて。あの、それでも、よく感心に郵便箱を立てて置くわね。」

「何故？」

と聞返しながら、膝を摺らして、片手を横ざまに疊へついた、男は心着いたやうに苦笑した。

「何をくだらない事を言ってるんです。」

「でも、嬉しかったわね。」

「嬉しかった？ 何がさ。」

「柳の許よりか、道が半町ほど、早く顔が見られたんだわ。」

「其のかはり、天狗に攫はれた奴が、ストーンと落し置かれたやうな面だつたらう。尤も来がけに愛宕山の頂邊へ、ほかん、と立つて、何處かの煙突の尖へ胸が引か、つて泳ぐ形で、黄ばみ切つた品川の海を凝視めた圖などと来た日には、憚りながら、お國さんと云ふ婦を狙つて、隠形の印を結んで、花道へ糺上つたものとは我ながら思はれない。何うしても鼻の高い楮ら顔の大山伏に引つかまれた體でね、實は我ながら心細いものでしたよ。」

「可厭ねえ。」

と今度は婦が、蒲團ごと火鉢を押し、

「貴方また高い處ぢや足が萎むの、目がぐらくするのつて身體を弱くして居る癖に、何だつて、愛宕の上へなんか上つたのよ。」

「まだ、お聞きなさい。其よりか前に、日比谷公園の藤棚の下から、池の周圍を廻ること凡そ三度……」

「あゝ、置いて行つて可うござんす。」と、圓盤を品よく、撫肩ですらりと見向くと、銚子取つたを差置いて、手を支いて女中は出た。

四

「お酌をませう。……」

最う今めかしい、然うした中ではなかつたので、男は手酌の方が氣易いのであつた。

「偶會ですもの。」

で、手なりに、なよやかに銚子が傾く。男は忘れたやうに一口飲んだ。

「家鴨は相變らず達者で居ますか。」

「何の、家鴨。」

とばかりで、肴も扱まず寂しさう。

婦は清しく目を睜つたが、もの可懐しく思出した心が籠つて、

「公園の、あの、池の。」

「然うだ。」

と卓子を軽く拍つて、

「うっかり言託を忘れたつけ。……今度逢つたらお國さんが宜しく、と言ふんだつたね。時間はあり過ぎる癖に、氣ばかりわく／＼するもんだから薩張り氣が着かないで惜い事をした。……嗚、不人相な人間だと思つたらう……いつかのやうに八九羽居たよ。」

「貴方、あの時を覚えて居ますか。」

「矢張り、待たせられた事かい。」

「ま、何うせう、と切なさうに莞爾して、ふと手を返して眩しさうに、男の目から遮つて、鬢すが如く前髪を打つ、と一所に白い珠の簪が揺れる。

「だつて、あの時は地の利を得て居ましたよ。公園で出逢ふなんざ今時の商賣往來、戀の手習いは持つて来いです。……おまけに、お前さんは知るまいが、兵法に曰くさ、天の時は地の利に如かずさ、可いかい。……然も其の天の時が、眞夏の明方、烏瓜の花がぼつと眠さうに睫をあけようと云ふ、風はなくても涼しいんだ。……藤棚はあり、樹立はあり、池はあり、贅澤千萬、噴水まである。……芥子の花は咲いてるし、勿體ないことには、家鴨まで泳ぐ。其が鴛鴦でないまでも。」

ね、處で、あの水へ、少々、薔薇か白百合と云ふ香水を加薬に入れて、葡萄酒を氷で冷して、四阿で飲んでる處へ、お前さんが透通るやうな色をして、絹の裾模様で、朝顔の瑠璃の中へ、露でしつとりと顯れてでも御覽なさい。

罰の當つた、……人間には些と職過ぎて居ますから、私なんざ、忽ち目をまはす處、……可い可減に待たされて、此方は夜あかしをしたんだらう、……薄茫乎で、藤棚の柱に凭れて、うとうととした處へ、漸つと、寢ぼけた、と云ふセルに白縮緬、素足に晝夜の引掛けは可いとして、目を擦りながら……」

「ほ、ほ、。」

「洋傘を袖で抱込むやうにして、小走りに、はらく／＼とおいでなすつた様子は、些と又娑婆過ぎたものだつけ。……尤も薫床しき鬢の毛の、と云ふ香水の景物だけはあつたけれど、何の所爲か大分寝亂れてさ。」

「最う……私、澤山。」と婦は邪慳に、ぶる／＼と銚子を揺る。

「お止し！……早く酔はさうと思つて、面倒くさいもんだから、そんなになさらないでも、お爛はよくついて居ります。」

「憎らしい。……あの晩は、夜中から酷く差込んだつて、分つて居るぢやありませんか。」

「だから、其だから先刻待つうちにも大抵氣を揉んだつたらないんぢやないか。……約束は違へた事のない人だし……少々此方が我まゝな無理を言つても……其を自分から時間を丁と然う云つて寄越したのが一時間餘りも後れるから、其の間の心配つちやありやしない。急に持病が起りやしないか、飛んだ間違ひでも出来たんぢやあるまいか、と……其が、——慥うお互に覺悟して、今日は都合が悪くから、又晩になり、翌日なり逢はれるんぢやないやうに成つたんだからね——此を思ふと、同じ、もの足りない、果敢ない中も、まだ、あの時分の方が増だつた。」

「あゝ、最う止して頂戴。」
と纖弱い胸に手を置いて、
「痛んで來さうで、悪いからさあ、……」

五

「だつて、お國さん、お前が。」

と男は崩しかけた膝を、きちんと合せて、卓子に兩腕を組んで掛けつゝ、

「其の時の事を覺えて居るかつて聞くんぢやないか。だから忘れない、これ——だつて。」

「お國は又俯目で、

「忘れないで居て、聞かしておくんさいます。私……其を聞くのは嬉しいけれど……あの、今言つたのは然うぢやないの。……あの時、四阿の前の池の岸へ、私最う坐りさうに成つて、貴方と二人で、——そして、私が、心配事で鬱込んで、水の上へ、何か、果敢ない假名を書いて居たら、向うの噴水の下から、同じやうに、すら〜と字をかきながら、水あしを優しく引いて、すつと手許へ寄つて來て、袖の蔭へ入つてくる〜と廻りました、可愛らしい家鴨があつたでせう。……何のためか胸がせまつて、私が手巾で目を壓へたら、貴方もほろりとなすつたやうで、一生あひ鴨をたたうかつて、然う云つたぢやありませんか。今朝見た時に、其の鳥を覺えて在らしたか、……あの、其を聞いたんですよ。」

「何だ、お嬢さん、鳥の事か。私も錢があると、お夥間の鴨だなあ。」
と煽切りに呷と干して、

「黄色い嘴が揃つて居るもの、どれが、あの時のだか、家鴨の顔に見覚えがあるものか。」

「だから、男は情がないつて云ふの。緑色の首で、眞白な羽で……菖蒲の紫がまだ咲のこつた中に、そりや美しい鳥だつた事よ。今でも居さへすれば、私は丁と覺えて居る。……あの時の池の景色は、時々夢に見ますもの、貴方が船を漕いだり、私が其の鳥の背中に乗つたり、菖蒲が水を

歩行いたり。」

と杯洗を熟と見ると、樹の影が薄墨を彩つて暗く映つた。煙草の煙が静かに留まつて、

「おや、曇つたわね。」

「急に暑過ぎると思つたもの、あゝ、大分眞黒な雲が出たぜ。」

と廂越しに下蔭を透かして言ふ。

「降りはないか知ら。」と煙管をばつたり。で、片手を背後へ。薄い茶に一本獨鈷の博多の帯のお太鼓を一寸壓へながら、すつと出た、……羽織と足袋は脱いで居た……疊觸りの棲深く、障子の棧に手を絶つて、撫肩細くすらりと立つと、葉越しの沖も品川とて、夢の如き海を瞻めた。

「通り雨だらうと思ふ、大丈夫、降つても直ぐに霽らうよ。何時までに歸るんだい。」

「……………」

「よ、お國、」些と酔つたか、はた、と半ば其の身體を寝かした。

「それは、早いほど可いけれど、」

と海を見たまゝ、うつとりしたやうに、然う言つたが、ト向直ると、胸をまつすぐに鬢の毛の黒き裡へ、男の仰向いた顔を包むやうに、熟と上と下で目を合せた時、唼一刷、合歡の花に霞の薄き風情あり。

「貴方さへ、可きや、此つ頃……日が暮れよう」と。

と衝と戻る、棲が蓮葉に、軽い音して、淺葱色の研二重に縁を染めた竹の葉が、すら〜と爪尖へ、雨を誘つた風が添つて、青葉の薫が颯と立つ。

男は起きた。あらたまつた……對の姿で、

「最う、そんな事は默然、と瘦我慢にも極めたつけね……時に、飯にしようかな。」

「あれ。」

と卓子臺へ伸かゝるやうに、お國は思はず手を舉げて、柱の呼鈴を壓すのを止めた。

「申戲ではない事よ。……まだ、貴方は愛宕山へ立つてる處ぢやありませんか。……せめて、あの。」

と目を睜つて、美しく眉を展いて、

「此處まで來らつしやい、一寸、」と見えぬやうに、我が前の火鉢の側を指でたゝく。

「お雛様ぢやあるまいし……お膳を前に並べられますか。」

「だつたつて……」

「だが、何だ、ね、私だつて、愛宕の山に立詰は恐れます。……が、まあ、其の時を何時だつた、と思ひます、漸つと其が九時半さ。」

「まあ。」

「然も、それが、右の公園の池のまはりを、水鳥が戸惑ひをしたと云ふ形で、三度目にすつと出て、途中ふらふらと歩行いてだぜ。十時、十一時、十二時と、まだあとが三時間、……が、また一時間おくれたらう……」

「道之助さん、眞個に。」

と姉が言ふやうに、實體に言つた。

「私、済みません。出掛けに然うやつて氣おくれがしたばかりではないの。もつとね、思ひも着かない事で、途中手間が取れたのよ。……」

變なの、……否、別に變な事はないけれども、まあ、然うやつて、……一丁場向うで電車を下りたでせう。見えないには見えなかつたんですが、其の柳を遠くから、青い彗星でも見つけるやうにして、些とばかり歩行いた、と思ふと、をかしくつてね。」

と片膝を浮かしながら、頸を捻向けるやうに胸を反らした、お國は後袂を折返すばかりにして、歩行くのに、太脛が冷たいやうで、裾が騒々するやうありませんか。水を撒いた靴でも上げた

か、と思へば、じりり、眞白に、路は黄ばむほど乾切つて居るのに、と怒りやつて、貴方、振向いて見たら、何うでせう。……衣ものの裾の帯の下、ちやうど其の太脛に當る處から、うしろさがりに五寸ばかり。」

と、向直つたが、今も驚いた面色で、

「胴裏の紅絹に、此の長襦袢の。」

像で、もの恥を太くする、……お國は、其の袖口を見せるとて、片袖、眉を隠しながら、

「色も搦んで纏れるほど、ふはく、綻びて居るぢやありませんか。」

一目見て、氣が着いたら、私は何の事も思はない、大通りで極りの悪い……それなり地面へ坐りたかつたわ。……電車なんか、澄まして下りて、皆に見られたらうと思つてね、私、辻斬にでも逢つたやうに、慄と總身が窘んだのよ。

最う一步出たら、發奮に、圓鬚から、

と一寸障つた、小指が反ると、掌を玉が涼しくさへる、簪を、つと押へて、三つ四つ、ぐいと插した。

遊 絲 「兩方の足を割つて、ばつたり二つに倒れやしないか、と危険だつたくらるなんです。……私、袂を前で壓へたわ。後が綻びてるんですけれども。……」

洋傘を畳んでさ……其の綻びた處へ、ぴつたり當てて、南風で一つ吹捲られたやうに、身を緊めて立停りましたがね、何しろ、大通りは面目なくつて歩行かれない！……人通りがあれなんでせう。

聞く道之助は、……其の癖、初夏正午の日の下に、身もよもこがれて、寄掛つた、べんがら塗りの郵便箱は、裕を通して、胸が火の如く熱かつた折から、唯一人、烈しく揺れ光る光線の海を渡つて来る、根のある花の萎えしほまぬ、お國の美しい姿を見たに、不思議に凄いほど、往來は途絶えて居た筈だ、と此の時思つた。

「間違つたら。……電信柱へ……打ツつけて、絲切齒を折つて、それに結へて縫ふまでも、せめて、絲一筋、何處かで、買ふなり、無心をするなりと思つたんです。

それにしても、裏町へ入つて、一人でも餘計人目にかゝりたくない、と、まさか、あとじさりして歩行くわけにも行きませんかから、捻切るやうに、振向いた、其の處勝負よ……海の方へ横町は、辻々に澤山あるわね。

私が……駈込んだのは、細い露地だつたの。

ト然う思ふとね、水溜りか、川か何か、矢張り埋地ではないでせうか、一廓に成つて、思つたよりか中は廣かつてよ。

新開らしいの……向ひ合せに、飛々に新築、と言つても粗末な長屋が、……然うね、七八軒もあつたでせうか。皆な、何の家も戸が閉つて、寂然して、地つたら綺麗に掃いたやうに塵一つ葉もなかつたの……何しろ、誰も見ないから、まあ、と思ふと、ひとりでに涙が出たわ、泣いたわ、私」

七

「斜違ひに見える、その、向う側に、よろ／＼とした細い柳の葉の、振れ／＼に垂れたのがあつたんです。赫々と照りつけられて、青いものは、朝つからはじめて見たやうな氣がしました。

節だらけな、それでも新木造りの小さな長屋が一軒、其根にあつてね。低い軒の、廂の下、小店らしい處から、……然うね、七十の上を越したと思ふ、匾、額から顔へ恐しく寸の詰つた、短い顔を出して、鼠色の蓬々髪を、それでも襟頸へ、ピンと反して切下げにした婆さんが、――脊が低いんだわねえ――頤で這ふやうに、下の方から此方を覗くのよ。

人可懐さうなの……だつて、其の隣も、此方隣も、私の立つた背後の家も、不殘空屋で、其の柳から前途は、石をごろ／＼ころがした、だツ広い野原見たいな空地に成つて居て、犬の子一つも居ないんですもの。

絲を貰ひませう。……まあ、地獄で佛のやうに思つて、頼みに行つたら、其の婆さんは、誰も居ない、皆で二室ぐらゐる内に、留守居でもして居たらしい。廂の下の雨落の上が、すぐに框の六疊ぐらゐるで、其の端近な處で、白い桶を一個置いて、芋をうんで居たんです。

すう／＼……あの何とか言ひましたね、むら／＼と慥う、霞が晃々光る……一寸、そんな風に絲を捌いて——針は何なの、ぐた／＼な、縞目も分らない布子の襟に刺して居たのを抜いて、而して、其の紡いでた芋を撚つて、目の達者なのが自慢なんでせう、婆さんが、自分でめどを通して貸してくれたの。

何にも言ふ事はないわ。……いきなり、其の縁側のない、框の敷居に腰を掛けて、筋が違つたつて、と身體を逆に。」

と又振向き、

「踵を帯に附着けるやうにして捻向いて、其の綻びを縫止めたんです。

其のうちにも氣が急ぐでせう……然うでなくつても時間がおくれて、貴方が待つて在らつしやるだらうと思つて。

小さな銀貨を一つ置いて、其の横町を急いで、通へふいと出ると、何だか花道へ突出されて、

貴方の立つて在らつしやるのを見たのは、それから、何だか歩行かない内だし、すぐに此家へ來たんですから、何でも直き此の近所だわね。婆さんが柳の下で芋を紡いで居た處は。其でも、何だか遠い處の、野中の一軒家でもあつたらしい、私、夢のやうな氣がして成りません。」

道之助は額に手を置き、卓子に肘をついて、何かもの案じするらしかつたが、婦の言の切れた時、故と元氣らしく、しかし、口重く、

「恥かしかる年紀ぢやなし、引端折つて來れば可いの……」

「そして、姉さん被りなの。」

「御勝手さ。」

「そりや、駈落をする時だわ……でなきや、貴方が向う岸の柳の下に立つて居て、川が埋らずに、橋のない時。」

と吻と息すると、肩がなえたやうに、手を支き反らして胸を張つた。帯のあたり胸へかけて、横雲がかゝるやうに、眞暗に成つた大空が座敷へ入つた。

顔は一際しろ／＼と、

「矢張り夢のやうだわね。」

「先刻の夢だと、其の桶から芋が水に成つて湧いて出て、新開に菖蒲が咲いて、お前さんが家鴨

に成る……」

「首は青いかも知らないけれど、羽は餘り白くはない。」

と衣紋を一寸緩げる、襟裏細く紅に、胸の雪がくつきりと、

「私は少し酔いました。」

「いや、眞面目に。」

肩が聳えて、男は腕を一ツ組直した。

「夢と言へば話がある……」

八

「例の如くさ。お前さんと段取が出来て居て、何處かで逢はうと云ふ處らしい。……こんなに、今日待たされるしらせだつたかも知れないが、約束の時間までぶらぶらと歩行つた。」

で、當人足は地に着かぬが、人が見たら下駄を引摺つてるやうだらう……腕を組むでもなし、懐手をするでもなし、仰向くでもなけりや俯向くでもない。自分では、つい通りだけでも、矢張り他人目には、何とも持扱つた、取留めのない形で、うっかり出た處が、何處か、廣い通りの電車路だ、とまあ、お思ひ。

朝にしては黄色だし、晩方にしては白し、正午にしては蒼過ぎる。……時刻は解らないが、出會がしらに、赫と光つて、蜈蚣が一卷半捲いたやうに、満員の手と足で眞黒に埋つたのが、ブーンと唸つて鳴つて來たので、ハッと退つて、勿飛ばされた形で、すぐの横町へ突入りながら、まあ、と顔を出して、御隨意にお急ぎ下さい、と電車に言つた。……

此方はお國さんと云ふのがあつて逢ひに行きますつさ、……可い氣なものぢやないか。夢だから、黙つて聞きつこ。

お前が、先に勤めて居た時分の、家から見える、……あの大時計ね、二階の欄干へ手を支くと顔が打着るくらゐだらう……待てよ、あの大時計の数字の中へ、赤か青か色電燈で、暗號を顯す工夫はないか。然うすりや危なつかしい手紙にも及ばないものを、と其の癖あの大時計が、今度圍はれた家の角にあるつもりさ。そんな愚にも付かない事を考へながら其の横町を入ると、存外一廊で中が廣い。……

今聞いたのだ、と新建の長屋が七八軒、ばらばらに不行儀に並んだらしい、其處は違ふ。私が見たのは箱をさしたやうに整然と並んで、矢張り、どれも皆空屋で、寂寞して誰も住まない。端の小家の扉さがりに、同じく柳が青い葉を弱々と靡かしてゐたんだ。」

「まあ、夢で？」

「あゝ、……其の柳さへ乾き切つた、何か青紙でも刻んだものやうにばらばらして居るのに、道わるでね、地はどろどろして濡れで、下駄の齒へねばくと附着く、……ぐつたりと其處らが黒いから、白い長屋が、浮上つたやうに見えた。」

と言ふ。折から墨を流した雲が、天井へかさなるばかり。で、二方の壁が、夢の其の長屋の如く見えたのだ。

お國はフト聲を忙しく……

「お待ちなさい……道之助さん。然う言へば、私が言つた其の新開も、びつしより、ぐつぐつに濡れて居たの、其處だけ撒水をしたらしく、」

「妙だなあ……で、矢張り此も、其の柳から前途は、だつ広い野原見たいな空地さね。あゝ、石がごろ／＼してね。私の見たのは、其の周囲、處々青竹の柵があつた、お前の話には無かつたね。」

「えゝ、と唾をのむやうに云ふ。

「何かい、而して其の婆さんが、框に二人で苧を紡んで居た雨落ちに、手水鉢はなかつたかい。」
「ありましたとも。私、咽喉が乾いて、息が切れてなりませんから、あゝ、其の水でも可い、一口飲みたい、と思つたくらるるですもの……でも、もう些とだと思つて我慢をしました。腰さへ立

つんだか何うだか、怪しい、年寄を、臺所へ立たせるのは氣の毒でしたから。」

「私は又……突のめつて轉んだんだ。躓いたか辻つたか、其處は解らないが、もろに兩手をぐしやりと支いた、丁ど其の柳のある長屋の前さ。」

はつと立つたが、心持が心持で、自分でも危なつかしく、うか／＼して居た處だから、げつそり瘦せたか、と思ふほどでね。

顔容はお前さんの言つた方が委しい。朦朧として居たが、今聞いたので判然解つた。……白髪の切髪、寸の詰つた、其の通りの婆さんが。」

婦は、衝と白い手で、話を遮るやうにして、

「可厭ねえ。」

「だつて、這ふやうに顔を出して覗いたのよりか増だ。……手水鉢の前に立つた、と云ふが、膝を支いたくらの、曲つた腰で、私の方へ、此方へ乗出す形をして、柄杓に水を汲んで居たらうぢやないか。」

年寄のしんせつ、難有い、と手を出すと點々と掛けてくれた……たしない水で、おまけに、ぬらぬらと生温かつたけれども、そんな贅澤を云ふ場合ぢやない。

婆さんがまた、緒を立てて遣らう、と言つて、すぐに桶の、其の苧を、皺びた指にからんで捌

く……

先方に言はれるまで気が着かなかつたも變だけれど、轉んだ時か、前端緒が蟲のあたまを捻切つたやうに弗つりと切れて居る……

最う其の時に悚然とした。

ぐなくぐの膝を、框へ乗出すやうにして、婆さんが、下駄を取つてたててくれた。

まあ、禮を言つてさ。さあ、思の外手間を取つた……今度はお國さんの方が辻に立つて居ようも知れぬ、と急いで歩行かう、とすると何うです。

たてたばかりで、切れはしないが、其の端緒が他愛もなく、する／＼と指を離れて抜けるぢやないか。

拍子抜けがして踏止まると、する／＼とひとりに動き出す。と、繋がつて、尾を曳くやうに、横端緒が一所に成つて、するりと、下駄の臺を地へ抜けた、と思ふと、ぬらぬらと伸びて、やがて一尺ばかりの、ぼつたり胴太りのした蟲に成つた。

何の蟲だか解らないが、濕々と、恙う、蛭の滑つた膚へ鱗を生して、ドス赤の皮の上へ、いぼいぼの紫だつた奴が、下駄から、ものの五六尺も離れた、と見ると、急に勢づいて、畝々と胴中を捻つた時、蚯蚓の頭へ突通しに耳が生えた形の首を、むくりと出して、鎌首のやうに擡げたつ

け。柳の幹へでも上りさうに、のら／＼と走つたが、や、迅い。

足が片一方氷のやうに成つた、其の時の心持と言つたらなかつた。

まだ驚いたのは、婆さんの膝の周囲にも、壁にも、天上にも、……手水鉢には、めら／＼と宙へ畝つた、同じ蟲が幾つとなく居て、それがね、婆さんと一所に、熟と私を見たんだ。

目が覚める、と冷汗が流れるやうさ。

「道之助さん。」

と呼ぶお國の聲は變つて居た。

手酌で一人傾けながら、何の氣もなく、然までの注意も拂はないで居た道之助が、呼ばれて顔を見て驚いたのは、お國が色を變へて居たのである。

「何うしたの。」

「私の縫つた糸も何かぢやないでせうか知ら。」

「話らない事を、夢なんだよ。」

「否……夢の方ならまだ可いけれど、私は、現に今しがた。」

と、ものいひも暗く沈んで、

「見なくつちや……一度、見ませうね。」

で、其まで、氣を緊めて居たやうだつた、急に慌しく胸を弓なりに脊筋へ曲げた、が、框に掛けて針を運んだ時も然うしたらう。太座の白いまで、踵を高く擧げながら、襦袢のはづれに襟を翻した……お召縮緬の縫目の條を、不氣味さうに熟と視たが、

「あゝ、」と言つた。

「何うした。」

「え、」と其のまゝ蛇に巻かれたか、と素直に立つて、振腕るばかりに、背負上を解いて、博多のを、する／＼と弛めて落すや、二つ三つ足踏みに扱帯を解くと、雪を被つた翠のなよ竹、小袖は白い羽二重の裏を返して、すつと鳴つて、撫肩を這つたが、

「あれえ。」と裾を刎ねて身もだえした……

「襦袢が一所よ。」

裏を通して、長襦袢とともに縫留めてあつたのである。

と廂も軒もざつと鳴つた、光るやうな雨が篠を亂して横ざまにかゝつた中に、お國の姿は、白糸の瀧を碎いて戦ぎながら、

「切れるものを、切れるものを、……婆さんの糸は皆蟲よ、蟲よ、繫つて動いてるわ。——道之助さん、女中を呼んぢや可厭。」

と烈しく頭を掉つたので、櫛が抜けてカチリと落ちた。殆んど發作的に肩を擡つて、汗も絞るよと、目も當てられぬ。

盞を落して茫然として居た道之助は、お國が長襦袢さへ、脱棄しようとするのを察して、狼狽しく、長い廊下を、俄雨の暗がりに、壁へ打突りさうにして帳場へ駈着けた。

切れものを、と云ふ時、人は心して、濫りに、剃刀、庖丁などを貸すべきでない。

帳場では小刀を貸した。

引摺んで取つて返して、何心なく襖を明けたが、道之助は思はず、ハタと閉して退つた。

お國の身は、美しい、衣を離れて、座敷の隅に、雪に手足を刻んだやうな、あからさまな姿で

居た。

「投げて。頂戴、放り込んでよう。」

と縫り着きさうな悲しい聲。

「危いよ、危いよ。」と此方も、ものいひが亂れながら、襖を細目に密と投げた。

あとを又、ぴつたり閉めたが、……然うした婦の自身に小刀がある。

道之助が、思はず足を爪立てた時、ころん、とトシヤ降の雨の中へ、球突の球の音が、はた、

遊 絲
神の如く響いた。

「あッ、」

と言ふお國の聲が、途端に耳を劈いたので、我を忘れて、衝と入ると、颯と電が瞳を射た。竹の翠の、其の羽二重より美しい、萌黄を浴びた——氣あせりに怪我をして、左の掌に鮮血の迸る、婦の身を、肩なりに、冷たく確乎と膝に抱く時、蒼白なる面に皓齒を結んで、

「道之助さん。」

「確乎おし……」

「貴方、貴方、殺して頂戴。」

「氣を鎮めて、お國さん。」

「家へは歸れやしませんから。」

唯、見ると長襦袢さへ重ねて透して、裙を色紙形に切抜いたのが、吹き込む風に、雨ながら、ちら／＼と散つて翻然と動いた。が、夢の斷片に媚かしく艶なる彩して、柳に掛けたやうであつた。

歌仙彫

たそがれの事であつた。

冬木の辨財天の御堂の、向つて正面から左へ廻縁の、横手の障子がすつと開くと、年紀頃五十分ぐらゐで、中肉で、人がらな出家の鼠色の被布を着たのが、据置いた小机に差寄せて敷いた、淺葱に唐草が水に藻と見える、古びた座蒲團の上から、身體を捻ぢ向けに大きな眼鏡を晃平とやつて見込んだのは、狭い境内で間近ながら、晝も薄暗いのが、最う時刻で、早や夜にかゝつた額堂の額の下。

で、透かすやうに見遣りながら、

「もしく、其處においでの御仁。」と聲を掛ける。

トぎよつとした體で、

「はあ、」

と答へた、……薄茫乎と其の暗い中に、誰が描いたともなし額縁も無くつて立つた、瘦せた青

年の形が、長棒で一つ拂たかれた蝙蝠と云ふ體で、……日のなごりも、月の影も、まだ屋もない、初夏の夕暮を、本堂の常燈明が薄りと影を放つて、前の大池にすらくと、黄色いが些と冷い光を曳く、……其の水ながら、灯ながら、上へ映り返すやうな、青葉若葉の累なつた下へ、搔容んだ様子で出て来て、

「恐入ります……何うも」

と云つて、烏打帽を脱いだと思ふと、一掴みに手で握る。

「何も恐入んなさる事はありませんが、」

「否、眞に濟みません。」

「別に濟まんと云ふではないのでの。」

「飛んだ何うも、お邪魔をいたしましたまします。」

とたゞ詫びる。

出家は膝でぐるりと廻つて、

「決して、お咎め申したではありません、はい。」

と其の實は咎めたのを、慙う成ると氣の毒さうに、

「御覽の通り、通りがかりにも、休んで行かつしやるやうに、木の床几も差置きますほどで。こ

れが家のうちと云ふではなし……其とてもぢや、御堂の事、おまゐりとならば、お通夜なさつても仔細ありません。

額堂であります……邪魔も差支へもあらうやうはございせんが、先刻、二時頃お見受け申してから、最う焦う、日も暮れます……

私も其の間、一寸々々納戸へ立違ひます……お前様とても、御堂の居まはり、石段の上り下り、あちら此方なされたらうが、久しい事ぢや。

今しがた夕飯を済まして、此へ參つて見れば、矢張り額堂に熟として居さつしやる。何か御心配な事でもあるか、人でも待合はせさつしやるか、其とも御病氣でありませぬか、と些とお案じ申したに付いて、一寸聲を掛けました。

唯御休息となら仔細ありません、が、別にお心地が何うと申すでもないのか。」

さて近寄つた顔を見れば、氣も落着かず、色も悪し、太く思沈んだ中に、うかくとした、取留めのない風情があるから、出家は、裏問ふ聲も、次第に、いとしと思ふ、調子に變つた。

其時、然うした便りない、覺束ない中にも、寂しいながら莞爾して、
「難有うございます、御隠居。」
と云つた、又其が相應しい出家の風采だつたのである。

「お尋ねですから申します。實はこゝに人を待ちます、……心配な事もございます。屹と病氣もあるんでせう。」
と思ふには似ず、清しい聲。

二

黙つて顔を見合せた。

青年は翳した樹立を仰いで、

「あゝ、成程、最う日が暮れます……長い間お邪魔をしました。實は、はじめから、時々障子越に、御隠居、御僧が然うやつて在らつしやるお姿は見えて知つて居ました。が、何ですか、極りが悪くつて、更めてお許しも申受けないで居たんです……お詫びをします、それぢや此で失禮。」と會釋する。

出家は乗掛るやうに障子から半身出て、

「まあ、然うお急ぎなさらんで、些と此へ。」

と掌を向けて縁に支いて、

「私が言葉を掛けまして、急にお歸りとあつては、矢張りな、何かお咎め申したにも當つて心持

が可うござりません。唯今も言ひます通り、實はお案じ申したに就いて、一寸と御意を得ました次第ぢや。

御都合なれば何時までも御緩りとなさつて、決して差支へありませんが、何うかお心持も悪いとか、而して、其のお待合せの方は如何なされた。」

「其ですから恐縮します。御場所がらで、何とも申兼ねましたが、私の待つて居りますのは婦人なんです。」

と何か、屹とした、聊か激した様子で言つた。

「いづれな、其の邊で、は、あ、」と少し笑ふ。

「否、」

と又呼吸急いで、

「然し、怪しいわけではないのです……いづれ、又更めてお参詣なり、お詫びになり伺ひますが、私は慥う云ふものでございます。」

と云ふ中に、懷中を捜つて名札を取つて、衝と敷居へ上つて縁側へ差置いた。

「はい、はい。」

と請取つて一寸拝し、仰向けに燈に翳して、眼鏡をことごとくと動かしたが、

「矢的三千枝さん、とおつしやるか、これは御丁寧な。私は上崎典和と言ひます、堂守でござりますよ。」

「はじめまして……否、其の婦人と申しますのが、矢張……と云ふのも可笑なもんですけれども、先刻はじめて逢つたばかりなんでしてね……私が此處へ参りました時に、丁ど御堂の階の處に、杵屋へ通ふと云ふ形で、眞赤な風呂敷を持つて、背後向きに立つて居ました、慥う、其方を拜んで……」

と矢的は其の横手から、斜めに一寸頭を下げたが、引摺んだ鳥打で、胸の所を軽く敲いて、

「御僧もお見覚えではありませんまいか。」

「若い婦人で？」

「え、色の白い綺麗な娘です。」

「成程見掛けましたやうにも思ひます、……二時半頃な。」

「丁ど其の時分、」と手を下げて、片手で、其の二の腕のあたりを壓へながら、熟と出家の顔を見る、矢的は、手掛りでも得さうな氣構へ。

典和法師は眼鏡を掛けた額に手を當て、咳を一つして、

「處がな、それが貴客、……何か道心堅固と云ふのを吹聴いたすにあたり、街つて申すかにも聞

えましてお恥かしいが、御覽の通り、坊主の棒で一向な木の端でございます。依つて、……お守を申上げる御主人、御本尊が御本尊ゆゑに、先づ、切めて其の煩惱、あけすけに申せば色氣だけは、と存じて此へ參つた、……まだ恚うまで老朽ちませぬ以前から、年少な婦人に逢ひます時は、必ず、ちつと、其の、

と眼鏡を取つて、一つ揺つて、小机の端へコトンと置いて、

「見まいやうに目を瞑つたでございます。癖になり、癖になり、婦人を見ますと今以て、眩しいやうで。はツと思ふと、ちらりと姿は分りましたも、つひに顔と云ふは覺えませんが、……いや、私が顔で恚う申すと、狸寝とやらに聞えませうで、はツはツはツ。」

三

典和が笑ふにも、矢的は眞面目であつた。

「すると、其の娘をお待合はせで、」

「實に申譯はありませんが、然うなんです。」

「……お詫には及びませんが、然うした事なれば緩りと……と申して此が如何なものか、本堂に御休息とは、些な、御本尊の思召しもありうで、私からは申兼ねます。が、其とてもで、何氣なく

お籠の分ならば兎や角うは言ひますまい。」

と小首を傾げ、

「しかし、大分手間が取れますやうな、が何かな、お逢ひに成ります時刻なぞ、大抵お打合せがありますか。」

「お星様も御存じです。」

と誓ふが如く、すつくと立つて、矢的は池の彼方の、柳を黒く、水を青く、屋根を離る、明星を此の時仰いだ。

「待つと申して境内を憚らねばなりませんやうな、怪しからん意味なのぢやありません。唯今も申しましたが、私は何です、此頃言ふに言はれない屈託があります。爲めに、仰つ反つで、魂なんぞ、頭から足へぐらぐらと轉げ廻つて居るやうに思はれまして、時々茫乎して、まあ、確乎しないか、と自分で活を入れたり、あ、助かつた、よく電車に轢かれなかつたと線路で活を入れられたりしますんですから、目さへ、何う成つてるか、其さへ分りませんもの……」

店賃のしみつたれた長屋でも、住つてれば、自分の家の、其の家でさへ、時々赫と成つて、馬の顔が覗いたり、犬の首が轉がつたりする始末なんですから、他家様の、分けて恚うしたお住居です、何を見て間違へたんだか知れませんが、」

と俯向いて、自から氣を沈めむとする趣であつた。

「青葉の薫に、ひやくと包まれた中に、藻も萍も見えませんが、大池の水の香と、何處からともなく、香花の匂がしますばかり……赤いものは灯の色で、其も薄し……咲残つた椿一つ、紅色の菖蒲があるでもないのですから、眞晝間、何を見違へたか分りませんが、向う裏の石段を一畝り上つて來まして、其處の石の手水鉢、右に……釘店、佐原佐助、左に……江戸橋、佐原勘兵衛としてございますね。」

「然れば……よく御存じで、」

「え、」

と若い返事して、何か極りが悪さうに見えた。又……自から嘲ける如く打棄つたものいひで、

「鳥居際では、左右の獅子が、前脚を支いて、天眼に、儼然と一つ狂つた處……此の御堂だけに兩方とも牡ではないらしく見えます。嚇と威すやうに揃つて口を開けた中に、小判の形の青葉が四五枚づゝ、脚へさしてありました、何かのお禁厭なんぞせう。」

「近所の御婦人がなさるゝのぢやが、さ、何の禁厭か、私は却つて心得ません。」

「其も見ました……途中で、深川座の前へ立つて、けばくしい烈しい繪の具の庵看板を覗めながら、何が描いてあつたんだか、いまだに分りません。それから見れば、獅子の舌の青葉を見たら、石に刻んだ奉納主の名も見ました、目は確だと思ふんですが。」

其處で、

と指す、彼方に、其の御手洗を背後にして、くるりと横向きに、身を、典和の坐ふ縁に寄せた。「手を洗ひながら、階の正面、賽銭箱の左です、欄干の許に立つた、其の赤い帯と、其の右の袖に捲げるやうに軽く乗せた、緋色した風呂敷包みを持つたのを一寸見ました。……」

「は、あ、」

と矢的の顔を覗くやうにして、典和は又ホカリと眼鏡を嵌めたが、障子から蝸牛、角振分け、大廻りに階の方を透かしながら、

「其の御婦人でありますな、お約束をなさつたは。……」

四

「まあ、然うなんです。」

矢的は忙しさに巻蓑を抜いて持つたが、

「否、ございます、お構ひなく。」

と典和が差出す、手の附いた瀬戸の手烘に及ばず、馴れた様子で燧火を擦つた。……其の火も

御堂の片陰に、小さな燈明のやうに見える……汀の樹立は深かつたのである。

「其の娘は、いづれお參詣をして居るんでせうと思ひますから、人が行つちや、分けて男ぢや氣が散つて悪からうと、密と控へて待つて居て、——一寸又俯向いて拜んだ様子で、背後を向いたなり向うへ出ましたから、——其の後へ行つて、而して私も祈念をしました。

ト其の娘は、正面の石段も下りず、私が來ました獅子の方へも行かないで、あの、額堂の下へ入つて、薄暗い中に、くつきりとした姿で立つたんです。

日南は汗が出ます。日中は随分暑いのに、洋傘も日傘も持たないやうでしたから、一息涼んで歸るんでせう、……服装は澤山よくないけれども、松竹梅の額でも納めさうな娘だ、とそんなくだらない事を考へながら、私は何心なく、歸るつもりで、其の石段を下り掛けます時、ぱつと花が開いたやうに額堂の中に燃立つた色があります。

はじめは、上氣した顔でも煽ぐのに、振を翻して長襦袢の袖を引いたのかと思ひました。

彼處に、自然木の眞黒な腰掛が置いてあります。

あれへ、其の緋色の風呂敷包を開いたんです。

「其の娘が、はてな。」と持つた煙管をばつたり置く。

矢的は巻裏の灰を拂いて、

「御僧、私は目を射られたやうに思つて、と視ました。……清元長眼の稽古本か、裁縫の道具でも入つて居るのかと思ふと、然うぢやありません、……萌黄だの、紫だの。中でも赤いのは、白い胡粉の顔が見えた、可愛らしい彩色をした木彫の人形。」

「木彫の人形。」

と典和が鸚鵡返しをやつたほど、矢的の其の聲に深い意味が籠つて聞えて、柳に青き明星と、葉越に紅さす燈明とに、薄りと彩られて、額堂の暗い處に、髻髻として今も倅に立つばかり。

「思ひも掛けず不意に見ました、場所が、辨財天の御堂と云ふんで、光が添つて見えたんでせう。此方で視めて、一ツ一ツ刻んだ眉も口許も分りました、業平、小町、喜撰、遍照、……あの繪の通りの姿をしたのが、六個あつて、其の御僧、人形が、六歌仙。」

典和は背屈みに腕を組んで、

「あゝ、珍しい。」

「珍しいより、吃驚して、私はつか／＼と宛然夢中で、

まあ、可愛らしい。

と云つて、額堂へ入つたんです。

美しい娘が一人で、其處に、然うやつて、雛遊び、と云つた處へ、こんな野郎が、可愛らしい

なんぞと聲を掛けて、つか／＼入つて行つて可いもんですか、何うです、御僧。」

聞惚れて居た典和法師は、急に何か問掛けられたので、つけもなく、

「はあ。」

と云つた。

「可いか、悪いか、御僧、考へて見て下さい。」

と入つたと云ふ當人が、そもさんか、詰るが如く眞向から、嵩にかゝるので、聊かあしらひ兼ねた、と云ふ體で、フト黙つたが、咳で一すつないで、

「釣れますか、などと文王そばへ寄り……と云ふ川柳を聞きました、それ體の所でありませうかな。」と云つたつけ、……對手が眞顔で、屹と見据ゑるばかりにして居たので、些と氣の毒と云つた面色。

五

老實に眼鏡を掛直して、

「けれども差支へはありませんまいか……餅草、嫁茶、摘草の風呂敷を覗かぬものとも限りませんな。對手が娘でも、小兒でも」と典和は宥めるやうに言ふ。

「だつて、何んです。」

と尙ほ獨で急込み、

「……まあ、可愛らしいは、可厭な言ひぐさぢやありませんか。……屹と娘は變な野郎だと思つたでせう。」

しかし御僧、

と矢的は漸と少し落着いたらしい様子で、

「然うした所の額堂へ、其の娘の傍へ入込んで成らないと云ふ、假に爰に堅い掟がありましたも、是非然うしないでは居られない譯があるんです。」

其だと又……可愛らしい、尙ほ變ですが、……御僧、何か私の言ひます事は取留がないでせう。けれども一目見て間違へはしないんです。娘が其處に持つて居ました……彩色した木彫の六歌仙と云ふのは、實は私が拵へたものなんですから。」

典和の眼鏡は、人影を見た木兎の如く、夜の翠に輝いた。

「御免下さい、」

と躑り上りに縁の端へ腰を掛ける、と典和は默然で押出すやうに蒲團を直す。敷くに及ばず、疲れた風で、手を支いて、

「私は、實は學校を出ましてから、未だ何ほどの修業もしませんけれども、これで何です、食つて居る職業に、がら／＼人形、木葉彫と云ふのを遣ります。」

と寂しい笑を浮べたが、細面は凛とした。

まだ長い、其の巻頁を突刺し棄てて、訴ふるやうな口吻で、

「長屋住居の御僧、六疊敷の眞中に、一昨年の暮頃から、一ツ轉がつて居る、花桐を切つた木材が一個あるんです。」

意地にも、義理にも、生命にも、何時までも然う遣つて、目鼻のあかない丸火鉢のやうな形にして、打棄つて置くわけには行きません。

第一桐の方で迷惑します。

明けても、暮れても、久しい間、面白くもない同じ野郎が、抱いたり、撫でたり、睨んだり、齒齧をしたり、唐突に怒鳴つたり……やけ酒を飲めば鼻唄を聞かされるんだ、堪るもんですか！然うかと思へば、日がな一日、鬚の生えた清姫と云ふ形で、七卷半に、堂々纏りをされるんですもの。

氣の毒にも何にも……此が女房なら、最う疾くの昔遣出します。」

「……又桐の其の木材にした處で、大抵齧まのない人間に愛想を盡かして、自分で葉を生すなり、芽をふくなり、花を咲かすなり、乃至はベツカツことをするなり、何うにか手足でも拵へて駈出しさうなもんですけれども、化け銀杏の死骸でも、狸が棲んだ空洞の所でもないんですから、何うにも成らないで、筵の上に白けて居ます。」

勿論傍に寝て、夢には時々魔されます。……最う此の頃ぢや毎晩です。ものがものだけに、可怖くも凄くも見えるんぢやありませんが、船に成つて荒海の中を引摺つたり、碇に成つて、此の手足を打つたりする……鳳凰なら、これが人柄だと羽衣にも見えるんでせうが、對手が私ですか、長襦袢に變じて横腹へズドンと來たり、花牌に化けて、ばら／＼と散るかと思ふと、其奴が、雨に成つて、土砂ぶりに屋根から浴びせる。

風も吹きます……ト鉤屑が咽喉を巻いて、おが屑がむら／＼と目、口、鼻へ、押かぶさつて、息も詰るぢやありませんか。

虚空を掴んで目を開くと、冷汗びつしよりで、鐘の音にぶる／＼と其の木材が動くんでせう。」

六

「夜が明ければ茫乎して、仕事も何にも手に着きません。……ぢや出來ないから、と云つて、此

が其のまんま打棄つて置けるのぢやないんですから、片時も氣の休まる間はありませぬ。

で、飯を嚙めば砂利のやうで、湯水も灰汁を飲む氣がします。

ぐたくと成つて、のめつたり、拳を握つて突立つたり、何の事はありません、此の頃の心持は、宛然大地震の中にでも坐つて居るやうなんです。

典和は聞いて、傷ましい病人に接する状に、掌を舉げて、吸續けた煙を拂ひ、

「處で、先生、」

と更まつて煙管を置いた。

「其の御工夫をなさいます、木材と申すのは、一體何をお刻みに成りますので、矢張り其の六歌仙でございませぬかな。」

「否、六歌仙は小遣取。苦し紛れに酒を飲みます、ごまかしの巾着錢です。」

密賣を遣るんですな……極内證で……其も自分で拵へたものなら、長屋の出窓へ一個幾らと、

正札を着けて、青いんだの、赤いんだの、宿場の饅頭見たやうに、大びらに安賣をすれば可いんです、卑怯で其も出来ませぬ。

唯今、

と一息ついて、典和が響應の遊茶を一口。

「お話し申しました、私が持歸して居る其の木材には、詠文主があるんです。他所の令夫人なんです。」

と言ひ掛けて、熟と胸に手を置いた、……

「いつれ私のやうなものに、そんな事を頼まうと云ふ人なんですから、幾干か變つて居るには違ひない。何時と云ふ日も極めず、何を刻め、と云ふ約束もなしに、最う久しい間、月々のものを貢いでくれます。」

はじめは東京に居て、其から引續きなんです、今は其の主人と一所に遠方へ參つて居ます。

祕密と云ふんぢやありませんが、主人が自分でするのでなく、若い夫人が、自分の小遣の中から繰廻して寄越すんですから樂なものぢやありません。

尤も昨年の春ごろまでは、其の夫人の實家と云ふのが、伊豆に鑛山を持つて、随分繁昌して居ましたから、自然お化粧料と云ふ融通が付いた。が、霖雨の山崩れで、金も銀も不殘濁水に成つてから、其方の藏は潰れたために、今ぢや全く、お手許金ばかり、と成ると、湧くのではないから定限があります。

彫仙歌
下着、羽織は脱がないまでも、其の時々の流行と云つては、コオトもヴェールも何にも無い。……遺失たと聞くが當には成らない、主人が久しい間の洋行土産に贈られたと云ふ、瑞西製の金

時計も、細い金ぐさりも、帯に懸つちや居ず、瘦せた指も飾なしに、唯細く白いばかりです。髪とても、其の通り、珊瑚もなし、櫛巻、襲着もしない膚薄で、婦人何とか會、連中、赤十字の交際もせずに、大な邸に奥深く、蓴菜が浮いて、岸に初茸が生えると云ひます……大な池を前にして、遠い所に、

と見返つて恍惚した。冬木の池には漣が立つて、包んだ夜の一所、明星が白く柳を離れた、水の色は恰も海の如く縹渺として見えたのである。

矢的の聲は落着いて、

「あ、不思議な所へ參つて居ります。無論、うかくと來たものではありませんが、思ひがけない、御僧、見知越でもない方にお目に掛つて、こんなお話をしようとは思ひませんでした。

最う暗く成りました……路も遠し、此で失禮いたします。

「いや少時、貴方、恚やうな端近、蕎麥の香も如何と存じて、唯今納戸へ饅飴を申付けました。」

「まあ！何時の間、」

「池を御覽で、熟と俯向いておいでの内に。」

「……此の暮四月、公用があつて、主人が上京をした次手に、其の夫人も見えました。築地の旅館から使があつた、が長旅で弱つたから、今夜は休んで、翌日は晝過ぎに逢ひに行く……と云ふんです。

私の狼狽方をお察し下さい。小刀一ヶ所、相鑿一手、手が着いて居るのぢやありません。お庇で活きて居る癖に……

翌日は、其の時分、目も離さないで居ましたから、出窓の隙間を横に切つた、車の上の其の姿が雲を下りるやうでした。で、玄關へは飛出したけれども、面目がなくなつて口も利けない。

格子を開けて入るのを、障子を盾に、硝子越に見たばかり、夫人の方でも熟と視ました。

婆やが、……五十ぐらゐるです……私は其の雇女と二人住居で。——其が、框まで出迎へたんです。

夫人が、矢張り障子の硝子越に優しく睨んで、

入つては悪いんですか、何うしませう……遙々逢ひに來ただけけれど、私最う上らないで歸ります。

と片頬笑みに、怒つた細い横顔を見せて、……其の癖、眞個に引返すと思つて、太く慌てた婆やの手へ、土産の包みと、お召の半コオトを脱いで渡したんです。

車夫に、歸れ、と云つて、一枚小袖に細りと紋着の羽織を着た……旅篋れで、櫛巻にもはらはらと、透通るやうな耳へ掛けて、おくれ毛の、浮世を知つて苦勞らしく見えるのが、澄まして上つて、私より先に、ずん／＼仕事場へ通つたぢやありませんか。

御僧、仕事場にも客間にも、人の坐れさうな處は其の間。

ト坐つたでもなし……立つたでもなし……轉がつたと云ふでもなし、しまひつかん、……右の木材、ずんど切の一件ものが、ポカンとして床の間に居るんでせう。

些とは片附けて置いたんです。

其の、のつべらぼうとした木材と、とぼんとした木彫の先生、

と、今は、御堂の小机を横に、典和法師と差向ひで、蒲團に割膝で居た、矢的は我が手で、耳を引撮んで苦笑した……

「……先生の其の顔とを見較べながら、……優しく一寸俯目に成つたが、黙つて脱いで、美しい、派手な何處かヒヤ／＼と身に染むやうな桔梗色の其の羽織を、すらりと桐の上へ掛けました。汚い部屋も、花野に月の明りが射すやう。しなやかに引いた袖隠れに、裏梅の紋の白いの、人の情に月を浴びた、眞珠のやうな、露に擬うて見えました。何にも言はずに、

東京見物に参りました、今日は急ぐの。明日何處かへ案内をして下さい。

ト軽く衣紋を合はせながら、華奢に消々とした斜つかひの氣高い姿で、縁越しに臺所の様子を、それとなく覗したんです。

私は胸がせまりました。……」

と差俯向いてしめやかに、矢的は聲を曇らしたが、

「唯今でも思ひます……何の彼のと屈託をしようより、其の夫人の、桔梗紫の羽織が掛つた、其のまんまを、あの木材に刻んだ方が佳ささうだと……」

まだ、其よりか、羽織を借りて、正のものを、其れなり包んで掛けて、今秋又上野で開く……例年の展覧會へ出品しようと思ふんです。

そんなに、私のために心配をしてくれませんが、其の人は、いざ、出来たものを、自分のものにして、ようと云ふのぢやありません。其の展覧會へ出品をさせようためです。

ですから、もし、其の會の審査員が許したら、木材に羽織を被せて、熨斗だけは附けないで、ずつと出して見せうと思ふ。」

「私は其より、」

と矢的の聲に力が籠つて、

「審査員が許さないでも、其の人が差支へさへないと云へば、構はず、羽織を借りて被せて、床の間の板を引剥がした奴を臺に着けて、展覧會へ背負つて出る、が無論許可には成りやしません。無法な事を考へますのも、實際、何を刻まうか、と途方に暮れるからなんです。」と又沈んで云つた。

典和は眼鏡で頷いて、

「種々御苦心の様子、何うやら分らぬながらもお察し申す事が出来ます。で、まだ何とも御分別は着かんでございますかな。」

「雲とも水とも、天地の間に、芥子粒ほども、全然まとまりが着きません。……仕事は急ぐ……唯今申した事情ですから、其の人にも然うまで續けて厄介を掛けるわけには行かず、と云つて、何か一つ出来ないでは、かれ此二年越、お手許金頂戴で居るんでせう。腰揚の中——其の何です——夫人と云ふのは、胸が切ないといつて、紙入は腰揚の中へ入れて居ます——其の軽いのを承知ながら、今更断るにも断り切れない苦しさをお察し下さい。で、先方へ迷惑を掛けまいためには、差當り、片時も遅く、仕事を仕上げるにあるんです、が

焦れば焦るほど方がへしが着きません。

「焦う、考慮の取留めのない事と云つたら、雲の上に雲雀を一羽と思ひました。……雲なら雲、雲雀も雑と可いとして、私が拵へたいのは、ほんのりと霞んだ蒼空に、目に見えない雲雀が轉る、……其の譬へば晝の星が、笛を吹きつゝ、くるく舞つてるやうな聲を、一つ彫込みたいと思ひました。」

其の人と二人で、目黒の青麥の畦路で、花の霞む上に聞いたからです。

此の春、東京へ見えた事は申しましたつけ。

都は花の眞盛、歌舞伎も帝劇も大評判。

と上野へも日比谷へも行きたいとは言はないで、静な處で摘草がして見たいと云ふ……婆やに相談をすると目黒を教へたので、翌日連立つて出掛けたんです。

脚馴らしに一鞍責める騎手が一騎。あの、廣い馬場の幽な向うに、鷗が飛ぶやうに見えるばかり、霞の花も夢かと思ふ眞晝間、寂として誰も居なかつたもんですから、

暢氣に遊びませうよ。

と云つて、夫人が御僧、身輕に馬場の埒の上へひよいと乗つて、スーツと立つて歩行いたぢやありませんか。

幻の浪か見える……陽炎に流るゝやうに浮いつ沈みつ。早く一埒内側の、直き目の前へ駈けて来た、其の乗手より、埒の上に、花より高い、美しい姫神の姿に、馬の方が嘶いて、前脚で棹に立つた。

危い。

と私は下に引添うて、夫人が持ったなりの洋傘の尖を持ちましたつけ、ヒヤリと脈に響いて冷たかつた。

来る路の小川の淀みに、お玉杓子のうじやくとかたまつたのを、其の人が、洋傘の其處でぼちやぼちやと驚かして、嬉しさうに遊んだのが、まだ乾かずに居たんです。

私は冷さが身に染みた。

あの、木材を切細碎いて、せめて、お玉杓子にでもしたいもんだと考へました。

ですもの、御僧。

満足にお玉杓子さへ出来ないものが、雲の上に囀る雲雀の心持が刻めますか。

摘草は名ばかり。餅草も嫁菜も葉の揃つたのは見附りません。二三人、野面に居る百姓に聞いたんですがね……二人で歩行くのを怪しからないと見る所爲で、故とない處を教へたのだらうと思ふと、然うでもない、中でも正直な奴等の云つたのをお聞きなさい。

此の米の高いのに……そんなものは此方人等が揃んで賣らあな。——
ですつてさ……」

九

「其の夫人が、ひよろりとした、つくしを二三本と、色の薄い菫の花を大事さうに持ちながら、あゝ、あれは何でせう。

雲雀です。

と背中合はせて、明るい麥畠の青い中で、薄り虹のやうにかゝつた蒼空の、白い暖い雲を見ました。

御僧、爾時の雲雀なんです。が、さあ、其の心持が、玄能ぢや、此の腕が堅くつて敲出すわけに行かんです……然うかといつて、柔い、寂しい、美しい、鳥の羽を刷毛にしたのでは、木を削れませんものね。

だらしない事つたら、雲だの、雲雀だの、と云ふと、口だけでも何か偉さうに聞えますが、其實は、歸途がけに苔香園と云ふ植木屋の庭へ入つて、四阿へ休みました。其前のちよろゝ流れの、一所、草のひやくとある池に成つた、角ぐんだ蘆の中に、玩弄ほどな葺屋を飾つて、整然

と圍爐裡まで切つたのがありました……背戸と思ふ、其のつくしの丈ほどの柳の樹の植わつた下に、高麗鼠が廻しさうな小さな水車が仕掛けてあつて、ちやツツと器用に水羽を廻しながら、綺麗な雫を、短かく摘つた、菖蒲の青い葉に浴せて居ました。

けちな、私の了簡ぢや、唯其の水車さへ、大車輪の如く、中空に渦を巻くかと思つたんです。其の人が傍に居るので、……何にも拵へないものは、箱庭の水車にさへ恥入つた。

此の菖蒲の咲く頃には、些とはお出来なさいませうか。催促はしないけれど、私、身體が弱いから……答の中に……

と云つたんですが、お話をします通り、今以つて何の形も着きません。……と云ふのが、何か又……其の木材の胴腹へ藁屋と水車をくり抜きにして、刻んで、菖蒲の葉を添へたやうな、氣がして居たのが、矢張り其のまゝに成つて、——愈々菖蒲の咲いた、此の頃ぢや、面目なくつて、申譯がなくつて、手前で小さな蛙に成つて、目黒の其の池の縁の藁屋の中へ、潛込んで、ちよんと手を支いて、けろりとして、雲雀と一所に高い處に、恩人の其の夫人を視めて居たいくらなものです。……

なぞと云つて、冬木の此の池のまはりを、きよとくうろついて居る處は、尻尾の方から半分方、蛙に化けてるかも知れませぬ。

と、矢的は冷たさうに、鐵を刻んだ服の膝を、ニツ三ツ敲きつ、云ふ。
「目黒ぢや、劍と炎で恐怖いから、同じ蛙に成るんなら、辨財天のお膝許の方が、と思つて胡亂胡亂と參つたんです。」

典和が口を挟む間もなかつた。
崩した膝を居直つて、
「來がけにも、御僧聞いて下さい。額に汗がじとくで、相鑿を片手に、片手に玄能を握つたなり、くなくなえたやうに成つて、……枕にも出来ない桐の丸太棒を睨んで打倒れて居たんですかね。」

優しい桔梗紫の、梅の紋の羽織の袖が掛つては居ませんから、ずぶりと、のつべらぼうと露出で、白茶けて嘲笑つて、ト大きく構へて、四ん這ひの猿を挫いだ、白と云ふ面で居る……
魔されようぢやありませんか。

うとく仕掛けた處を、岸破、と起きて凝視めましたつけ、御僧。口惜くつて涙が出ます。
手が汗ばんで、仕事か、ねばつて、それで相鑿の動きが着かないやうな氣がしますから、振り取つて、両手の道具を筵へ落して、フイと立つて、狭いが縁があるんです……鉢前の手鉢の處へ出て、突然柄杓を取らうとすると、射るやうに、此へ、

と云ふ、眉が顰んで、カッと額を片手で壓へた。
「此の雨上りの初夏の烈しい日の光……」

十

「椿の樹の厚ぼつたい、濃い緑の葉を颯と辻つて、ぱつと瞳を射たんですが、くらりと眩んだ
目前へ、南天よりも丈の高い、其の手水鉢の四五寸上と思ふ處へ、眞紫の強い影が、顔の色も眞
白に成つたか、と思ふまで、一つ閃めいて映つたんです。

吃驚して、塞いだ目を俯向けに開けて見ると、一坪ばかりの庭ですが、眞中の日當りへ、瓦の
缺、木の屑を、いけぞんざいに、叩合はせて拵へて置きます、花壇の片隅に植ゑた、縁日ものの、
小さな紫の花の咲いたのが、光線に輝いて、上へ幻が拔出したんです——何うでせう、草花の吐
いた氣に、目が眩むやうぢや仕方がない。

私は床の暗い柱に、眉も鼻も揉込んで、男泣きに泣きました。

此方へ参りますにも、電車を下りてから、路を訊いて、——深川座でせう——芝居の前を薄茫
乎と通ると、木戸はまだ閉つて居ましたが、穉色や淺葱の幟が、軽い塵の風を誘つて、……散る
憂慮はないのですから、庵、看板、つツと、廊へ打つた櫻の造花を、さらりと掠めて、驟々と、

屋根の提灯も眞赤です……

ト見ると、まあ、可かつた、……此が紫だ、と大道で腰を抜かす、と思はず獨言が出る始末。
橋の上を、びんくと鳴つて……電車が、ぐんと行く、と又吃驚する……

不動様の裏へ續いた水の岸を、柳の並木は聞えたが、電車が駈出さうとは思ひませんもの。

一體、辻に居た煎豆屋に路を訊くと、すん／＼其の通りをおいでなさい、ひとりでに橋へ出ま
す……其の橋を渡つて行け、と教へたんぢやありませんか。

深川で冬木の路を聞いて、ひとりでに出ると云ふ橋だ、御僧、青柳の中に筏を渡る事と思つた
處へ、鐵の棒を、火の車見たいなのが轉がるんです。

私は呆氣に取られた、尤も……

と矢的は上の空らしいが指折り算へて、

「八九年以來、……醉過ぎた時でもありませんと、永代を渡つた事はないんですから、變るのも
其の筈ぢやありますけれど——や、こりや、うか／＼して方角を間違へたかも知れないと、最一
度、剥身屋で煙草を賣つてる、小店の婆さんに聞きました。

違ひはしません、矢張り渡つて、向うに丁度普譜中の學校がある……」

「ごさいます、立派に建直ります、小學校で。」

と典和は口を挟んで云ふ。

「え、其に着いて曲れと言ひます、……成程、棧橋へ着いた、汽船の腹を見るやうな煉瓦造が、屋並の上へ浮いて見えます。

又、此にも氣を抜かれた。

と云ふのは、茫乎と橋を渡つて、片側をぶら／＼で、浄土宗心行寺、と額を讀んで見たまでは可かつたが、……やがて、此處等だつけ、とひよいと見ると、學校が消えて、無い。

あの、大な建ものが、と慌てて伸上つても、影も形も、根こそぎ何處へ飛んだか、全然見着かないぢやありませんか。

電車道を斜に切つて、向側へ駈出して、漸つと、丁度今まで、其の屋根の下に自分が居た事、軒並にあるんぢやなく、路地へ引込んだ建もので、傍へ附着いたんでは、成程見えないのが道理だ、と氣が着きました迄は、ぼかんとして其の心細さつと云つたら、……胸へ空洞が出来て、深川の町が、スー／＼水のやうに大川へ抜けるんぢやないか、八幡前の大煙筒が、あの、眞黒な津浪のやうな煙と一つに、ぐら／＼と頭の上へ崩れて來やしないか、と慄毛立つまでだつたんです。虚氣さつたらありやしない。」

「馬鹿が、」

と吐出すばかり、自分で云つた、が、口惜しさうに肩が震へて、

「……それでも、まだ、何處か心底には、瘦我慢にも仕事のこととは忘れないと見えて、フイとあの、石段の下の、妙な自然石、——恠う犢が蹲つたくらゐの大きさで、すんと控へた形は、狛犬のやうにも見えますが、よく見ると、する／＼と皺が入つて、上へ巻いて、蟒蛇がとぐるを捲いたやうな、不氣味らしい。……然うかと思ふと、上で引傾がつて、三角形に、べたりと着いた頭らしいのの尖つた工合は、兒來也が出る蝦蟆とも見えます。で、變に其の石ながら、ふは／＼として柔らかさうで、全體があめ色に鼠色の斑のあるのが蛭が化けた様子もあつて、得體の知れないのを見ましたつけ。……何うかして居ますから、草花の色にも眩む私の目にだけ見えたのかも知れません。」

否、其は確にある。磴の下の處狛犬の一つに並んで、斜めに路を截つて、池の上へ影を投げた、老松の根に蟠つて……

「ごさいますとも、しかし其を御覽なさつて？」

「え、！此だ。此にしよう……彫むものは、渾沌として海鼠にも似た處が可い、手が着けられな
いで面白い。」

辨財天の暗示であらうも知れないと思ひました、實際……思つたんだからお察しものです。
其の癖、考へるまでもない。辨天様より、第一そんなものを拵へて、其の夫人に見せられますか。
しまひには、手水鉢の處へ立つて、止めたへ……一層の事、あの、祟をするやうな木材を横
倒しにして、奉納、瀬戸もの町、佐原佐助、釘店、佐原勘兵衛、と彫つて、展覽會へ投出して遣
らうと……自棄です……

其のくらるなら石置場へ行つて、石を削つて、手前の戒名を彫着けて、玄能を返す手で、頭を
割つた方が増なんですよ。」

と氣競つて云つたが、言も終らず悄乎する。
「御堂の御本尊も端麗な女體だと存じますと、其の夫人にも面目なくつて、拜んだ頭も上らんの
でした。」

然うまで夢を見ては居ないんですから、今思ふと何だか怪しいやうですけれども、額堂で見ま
した娘も幻ではないでせうか。」

「さあ、其の事でもございしましたな。」

典和法師は待構へた、と云ふ體で、
「先生がお作りになつた、六歌仙の人形を持つて居たと云ふのは、何うした譯でございます。」

「何うにも恚うにも、私は唯呆氣に取られて……恚う、極り悪さうに肩を斜に……彼處に、一
體、辨財天のお姿を寫した額があります、——其を仰ぐ體で、顔を背けて居ました、其の娘を熟
と見て居たんですがね。」

姉さん、此の人形は？
何うしたのかと未だ聞かない前に、

お一つめしませんか。
と鈴の様な聲で言ひます。

賣るのかい。
はい。

お前さんが。
御僧、當人が其處に居て、一つ買はないか、賣る、と云ふのに、お前さんが……は變でせうが、
其は恚うです。

元來、其の夫人が月々のものを仕送つてくれますのも、然うした小遣取りに、半端を稼がせま

い爲なんですのに、苦い酒でも打倒れるまで飲まずには、我慢にも辛抱がして居られない處から、心の鍵を捻切つて、苦し紛れに飲代を拵へるんです、御僧。
私の家の方を、咽喉から血を削る、ぎやつと五位鷺の啼くやうな、切ない、苦しい、其の癖大聲で、鋏刀、庖丁、剃刀、と喚いて来る、木乃伊に澁を刷いたと云ふ乾干びた研屋があつて、極つて、明い眞晝間も、然も影法師のやうに通る……」

十二

「町の遠くの曲角から、ぎやつと啼いて……時々蹴躓くか、石に嚙り着きさうに引掠れて、又ぎやつと啼いて来る。……如何に何だつて、其の鹽辛聲が餘り苦しうで、玄能を掴んでのめつて胸を搔撈るやうで、自分の心持に較べると、實に氣の毒らしく思つたもんですから……意味もなしに、唯澁茶一杯振舞はうと思つて、婆やに臺所へ呼込ませましたものです。何程なまくらだつて、私は自分の相鑿なんか、研屋を呼んで、研がせようとは思ひません。此で居てまだ惜い、裏刃は使ひ手の生命ですもの。庖丁か何か研がせました。」

其の時が縁に成つて、七日に一度、十日に一度、月に多い時は五度、少いと三度ぐらゐるつゝ、町内へ廻つて來ます毎に、ぎやつと遣るのが、家の四五軒先で、ぼつたり止むと、寂寥した廊下の路地を廻つて、もつさり臺所口へ入ると、

やあ、今日は……
で、えいやつと、と大な掛聲……うゝむ、と一つ唸りながら、千草色の半股引、乾上つて、茶澁の光る……萬古の瀬戸ものと云つた空脛を片一方、すつとんと投出して、敷居の上から板敷へ挫げた形で腰を掛ける。

婆さん、可え天氣だの……
が、お極りで。……御僧、尾籠ながら、股倉を引摺むやうに、兩提の煙草入を抜いて、ぱくりぱくりと日南へ、ぶつきらばうな煙を吐きます。

骨と皮ですが、其が御僧、聲だけ聞いたとは大分違ふ元氣な爺で。
段々馴染になると、私が立つて出ない日は、
旦那、御機嫌よう……今日は、うむ、……

と唸つて、開戸から、のそく鉢前へ入つて來て、蒼い面だね、一鹽さつせえ。
と言ふです……

一時申戲半分に、最初の六歌仙を一組。

お互に米が高いたが、爺さん、軽いから荷に成るまい、其の天秤で擔ぐ箱の中へ入れて行つて、望み手があつたらお寶にしてくれないか。いけぞんざいな不出来なものだ……お媒妁人に頼むのは、お爺さんが相當だが、私が拵へたと云ふ事だけは極内に頼む、が、何うだい。些とばかりでも輕子賃は出すぜ。

で、人形を見せました。……

ト兩方の掌へ、ころ／＼と据ゑた處は、平家方の落人が、阿蘇ヶ嶽の山男に搦まつたと云ふ風です。

ひやあ！ 飛ばねえぜ、刎ねえぜ、こりや何うぢや……

と小額へ皺を刻んで、げつそりした頬邊半分くひ込むほど、唇を引結んで、撓めて視ながら、お錢があると、私が一個買ひてえくらるだ、いくらづゝに賣んなさる。

研屋の爺がお取次にしては、些と方外な價値を云つて頼んだのです。が、別に驚きもしないで、新聞紙を引裂いて包んだのを、ト一ツ、氣の毒らしい、頂いて懷中へ入れて出ました。

五日ばかり経つと、例より些と早めた、ぎやつと啼いて、ぴたりと止んで、臺所がツたりで、やあ、婆さん、可い天氣だ。

すぐと開戸から、

蒼い顔だね、旦那、一鹽さつせえ。

で、懷中から新聞紙の疊んだのを出して、

あらためて、取つてくつせえ。

と云ふのを開けると、耳を揃へて……正札通……澤山です、正札で。」

と此の時穩かな微笑が見えた。

「ふう、」

と傾き、

「見事に捌いたと見えまするな。」

十三

「私も實は案外でした……むしやくしや腹の遺瀨なさに、八つ當りと云つた工合、出鱈目に何でも試るんで。」

爺に渡した六歌仙が、實際、有るものか無いものなんだか、其さへ自分で分らないくらゐだつたんですからね。

それに、したゝかな意氣込で、直ぐに又品を渡せ、追掛けて世話をして遣らうと言ふ。尤も後

仕込みはして置かなかつたんですから、其の日は其なりで歸しました。

處で、賣つてくれた金子ですが、其は木の葉にはならないかはり、しびれ薬と云ふのに成つて、二三度私を轉がしたんです。

「さあ、可い事に心得て、爺のやがて来る毎に、同じ六歌仙を頼んぢや、賣つて貰ふのが、御僧、此の二月から此方、引續き、既に一昨日も又一組。」

其處でお話がございます。

「爺は、何と云つて賺しても、宥めるやうにしても、決して禮を受取りません。自分の商賣ではないと言ひます。が、稼人が其のために時間が費える……手間賃だ、と言ひました時、しやぼんをべたりと塗廻はしたやうに頤に、かくく、硬さうな頸の骨を巖乘に左右に振つて、

引受けて行くのは私だが、賣子は違ふ、別にある、と云ひます。」

其は何となく、早くから私も心着いて居ました。

破れると取替へますが、人形を渡す時、新聞に引包んで渡しますと、今度金子にして来る、其の金子を、矢張り、……同じ新聞に包んで寄越す。……それが、きちんと成つて、綺麗に皺を伸して疊んであるのが、もの柔かで、優しい、床しい、可懐しい手障りがするんですから。御僧も、何となく、お聞きのうちに、然う云ふ氣がなさりはしませんか。」

「如何にも、」

と典和法師は引入れられた顔色で、

「婦人の仕事らしく思はれますな。」

「さあ、……で、それも、少い、美しい婦人のやうに思はれて成りません。」

其の所爲と云つては、申憎い氣もします。けれども、私は頻に其の人が見たく成つた。……

勿論、爺さんは何にも言はない。唯、家は深川の方……其も(方)だ、とばかり話した事がある

のを便りに、此の四五日は毎日です……御僧思召しもお恥かしいが、汗を流して歩行き廻つて……

……何處かで、何かの便りさへありますと、恚うした風の研屋は、と尋ねますが、まるッ切知れません。

五位驚が化けたんですツて?……

と、一軒ね、鳥屋の姉さんに笑はれました。

其の事です。

御僧。

ですから、賣るものをつかまへて、賣るのか、と云つて聞いたぢやありませんか。額堂で……」

「で、娘は何と申しました。」

と聞くものは、じり／＼乗り出す。

「人に頼まれたと云ふんです。」と何故か、もの足りなさうな調子であつた。

典和も落膽したやうに胸を引いて、

「矢張り、研屋の爺さんに頼まれたでございませうかな。」

娘は、

「否、姉さんに……」

姉さん、姉妹？

と又半間を喋舌る。

私の、近所の。

で、娘が申すんでは、今しがた、お湯へ行かうと思つて、手拭と、しゃぼん箱を持つて出掛けたと云ふ。

いづれ、此の邊の町なんでせう。……途中で、お人形さんの此の風呂敷包みを持つた、其の姉さんと云ふのに出逢ひました。まあ、今日も賣りに出るよ、と思つた、と話しましたから、娘は様子を知つてゐるに違ひありません。

一寸、お前さんが湯へ行くのを見たら、……急に一風呂入りたく成つた。戸は閉めて、鍵をお

隣りへ預けて来たから、内へ取りに歸るのも億劫な、其をお貸し、お湯屋で借りたんぢや氣味が悪い。……お前さん、其の間に、いつもの辨天様拜んでおいでな、風呂敷つつみを預かつて、い

いお客のあるやうに、私のお参りも頼んだよ。

と好きな事を云つて、手拭を取つて、からころ湯へ行く……

娘はお参詣に来たんださうで。

思懸けない手柄をして、其の姉さんを驚かさう、とものすき半分、おつかなびつくりだけれど

も、結目を解いた、と言ひます。

私は夢を胸へ抱いて、目が覺めたやうな氣がしました。

尤も、自分が其の作人なことは知らない顔。で、何にも言はずに、

皆買はう。

が、其の姉さんと云ふのに一寸逢ひたいと云つたんです。」

「如何にも其の筈で、と典和は言ふ。

「では、姉さんに然う云つて、湯から、直ぐに連れて来る。

待つて在らつしやいまし、此處で。

と愛想よく、いそ／＼行くのを、手放しては、何だか苧環の絲が切れさうな氣がしましたけれ

ども、慙う見えて、私も臆病、眞晝間、新姐のあとへ附着いて行くとも言へませんから、池のふちを、水へちらくちらくと緋鯉のやうに映つて行くのを、樹の間越に見送りました。

其が二時半。

御存じの通りです。

額に描いた、眞黒な蛇の形が、浮出して、日が暮れると、凄いやうに其の目が光つて、睨むと思ふと、御僧のお聲が掛りました。あの、蛇、あの、眞黒な……」

典和は居直つて、徐に茶を替へた。

「まづ、何より、氣をお落着けなさるが可い。」

矢的は溜息して又四邊を視た。

時に、おのづから、ひとりでに音が出たやうに、からくと鈴が鳴つた。

典和は薄鼠に、半ば開いた障子から明白で、半ばの障子に、矢的が其の影法師。茶盆を中に小机を控へたのが、横縁から、額堂と差向ひに黄味がかつた燈の明で、縁の中に、薄り浮く。

ト頸の雪のやうなのが、烏羽玉の髪の艶、撫肩のあたりが、低くさした枝はづれに、樹の下闇の石段を、すつと雲を踏むか、と音もなく下りるが見える。

慙うした光景、慙うした事は、御堂に時々あるらしい。

紅提灯

トばつさり裂けた蛇の目の傘。顔も胸もべたべたと眞白に塗つた、黒羽二重に朱鞘を落して、ギツクリと百日かつらの首を掉る、と故とか、魚匂か、笠ばかり仰反つた形が見えた、尻餅支いた與一兵衛の袖の下に、小田原提灯が、めらくと蒼味も交つて燼と燃えたのを、丁ど見た。人動搖きで、わつと云ふ。

其の光景を、可笑く、寂しく、もの可憐くも視めて立停まつたが、前途を急いだので、件の茶番の舞臺を左に……其の夜はどんよりと曇つた空の、星一ツない雲の中まで煉瓦でぶツしりと仕劃をつけた、なにがし女學校の高塀を右に、人通りは早くも途絶えた裏町から、見上げるばかりの火の見櫓の暗い下を、紅に、萌黄に、電燈の火花の散る、四谷見附へ出たのであつた。

些と手間が取れて、築地に行く電車の灯の眞蒼なのと一所に成つたので、寄つて見よう、歸途には、と心かけた、其の茶番の催は疾に濟んで、境内の入口から、暗夜ながら、咲揃つた八重櫻の花の影にほのかに白い、廣々とした境内の空地を覗くと、大百の鬘めく神樂堂の屋根が廂下り、黒々とした柱の形が、行途に見た定九郎の佛を留めて、ぬつくと立つのみ。燃えた提灯の煙かと見る、夜の霞の餘波も見えぬ。

月々の神樂の時さへ、恚う早く群集が落果てようとは思はなかつた、が、氣が着けば空模様。今にも、ぼつりと來さうなのである。其のためか、花片を誘ふ風もないのに、人は逸早く散々

四谷見附から番町へ入る處に、境内は廣い、が小さな稻荷様の堂がある……毎月、月がしらの三日が居まはりだけの縁日で、煎豆屋、飴屋、おでん屋など三四軒。固より見世もの、植木屋などの出るほどではないが、宵のうちは二十五座の催もあつて一寸賑ふ……

時に、殿井と云ふ、郵便局へ出勤して、澤山上級の方でない處を勤める、月給も、身上も氣も軽い、年紀は二十六七と云ふのが、件の稻荷堂で、フトした思ひがけない事に出會つたのは、矢張り宵のうち賑かだつた、其の初夜過ぎて、境内の寂寞した時である……

けれども、其の夜は、例の三日の縁日の晩ではない。

四月の末で、此の境内に見事なのが、七重七本、八重八本、九本十本に餘る……おくれ咲の山櫻の眞盛に、つい近所の、或工場の職工たちが思立ちで、旗、提灯に景氣を付けて、神樂堂で茶番の興行をした當夜。

殿井は四谷の通へ、用達の行掛けに、咲揃つた櫻の下に、ふらりと推懸けた群集の上に、

に成つたらしい。

と思ふ……殿井がイんだ、生垣の彼方に、ほたく、と重い媚めかしい……傳へ聞く、遊女が
棲捌きをするやうな、寂しくうつとりとした音がする。

氣勢が眞紅で。

雨垂ではない、其處に一本、片側續の武者窓づくりを昔のまゝの門長屋の屋根より高い、大木
の椿の花の燃ゆるが如く咲満ちたのが、夜露と共にこぼれるので、日のうち、見馴れた目には、
バラリと溝石の上に碎ける色さへ、幻ながら描かれた。

稻荷の御堂は、路傍に近く、件の生垣を一重隔てて、其なる椿の樹の蔭に——木の芽の重なつ
た暗さを透いて、そして未だ幽ながら灯が點れる。

二

「寄つて參詣をしよう。」

と思ふと、入口に、提灯は最う拔取つたが……雨覆を掛けた黒塗の、あの高張の臺柱が、朦朧
と立つて、笠の下からぬいと細長い手を出して小手招きをするやうに見えた。……其も神樂堂の
茶番のあとで、もの凄くはどではなく、百鬼夜行の滑稽けた門番、見る目に漫ろに微笑まれつ。

さて、生垣の裏へ廻つて、背丈ばかりの鳥居を一ツ、櫻の露の點滴に、手洗鉢の灯は最う消え
た、が、花片が軽く積つて、取る手に重い柄杓の柄に、搦分けて掌に搦んで、最う一つ鳥居を潜
る。

二間がほどを次第に低い、三ツ目の鳥居の際に、豆腐田樂が化した風な、ぼやけた行燈が一ツ。
青竹に掛つて消残つて、唯見ると、ふつくり、圓々つい紅さした頭を横傾げに、三ツ並べて、
葉と葉を紙雛の袖に合はせて、斜ツかひに、こちく擦つたさうに肩を揃へて、泳ぐ形で、薄灯
にふはりと浮いて、翻々と飛びもしさうな、酸漿の繪を紅彩色。で、上に散らして、

——ほうづき様幾つ——と記してあつた。……

「は、あ、お月様幾つたな。」

と、句も、其の心も、優しく、仇氣なく、罪のない、可愛らしさが、何となく花の明を添へて、
ほんのりと殿井の瞳に映つた。

十七ばかり、島田ざかりの色白い、美しい娘で、——殿井の女房と見知越、町の湯などで、

「今晚は……小母さん。」

と挨拶する……女房は今年二十四五、十七から小母さんは、些と役不足とあるべき處を、對手
の可愛らしさに、つい釣込まれて。

「はい、今晚は。」

と博多節の切で行つて莞爾だと聞く。……心がらなり、玉の膚の清らかさ、透通る耳許まで、
界限で評判のお米さん。

江戸兒だから聊か俵、前垂で隠しもしないで晝間、こゝへ店を出す……蜜豆を買ひに行く……
と其も評判。

で、宵の内の、茶番に群集した中も、あつちこち、其の角絞りの緋手絡が、花の色に、ちらち
ら照映えたであらう、と思ふと、

——ほうづき様幾つ——

と云ふのが、其のお米さんの風情に見える。

が、初々しい、派手な、花やかな中にも、ぱつちりした目の涼しさにさへ、朝顔の藍にも勝る、
秋のあはれの、もの寂しさが、消残つた地口行燈の、鬼灯の色にも出たのは、近い頃、長煩ひが、
とげくしい春寒の刃に切れて、其の娘の父親が、世を去つて、母親ばかりと成つた事を、近所
づからよく知つた殿井には、然うしたお米の行末さへ、豫て案じられて居たからであつた。

目を外らすと、灯はなしに、同じやうな行燈が、所々、寂しい窓のやうに暗がりにおいて、花
の顔が、どれからも皆覗く。……

犬であらう、……鳥居の奥の祠の横手、椿と生垣と押重なつた、漆のやうな眞暗な中に、がさ
がさと音がした。

殿井は祠の正面を左へ避けて、鈴の紅白の綱の傍に、鳥打を脱いで立つた。

賽銭箱のうしろに、燻つた眞鍮の、寶珠の珠の形した蠟燭立の裾の處に、たゞ一挺、其もやが
て残少なに、残燈めいて、じりくくと鳴つて、淺葱に、黄を交せて、薄赤う、蠟燭が點いて残る

……

唯これだけで、何も見えず、——お供物の三寶が、三ツ四ツ茫乎として、壁、廂を漏る月の、

それも朧の影らしい。

が、何處かに、ものの氣勢がする。

三

殿井は、何故か、雨垂が掛つたほど悚然としながら、

「お蠟燭を。」

と聲を掛けた。が應答がない。で、何も居ないかと思ふと……然も居る。そして、其の白木の
三寶の並んだ背後に、鼠には大い、猫には……否、小御ほどな影が取留めもなければ、微に映す。

妙に不氣味で、其のまゝ後退りに成りかけたが、御堂に向つて一旦申出でたものを、……今度は、賽銭箱の角越しに、裡を、蠟燭立の金杵から覗込むやうにして。

「お蠟燭を願ひます……」と云つた。

トぬいと其の蠟燭立ての向うへ出た顔が。

頤のげつそりと瘦せた、衝と隆い鼻の尖に、齒のない口を、もぐぐと行る。唇が一つに成つて、くなくとしながら、顔なりにづいと突出た、黠も同然、七十にも餘んぬらむ、翁か、媼か、一寸見ても差別が着かぬ。……眉毛は見えずに、たゞれ目らしい、べろりと剥げた血のやうな赤い脛を、しよんぼりと細めたのが、其の鼻の附元から耳際へ掛けて、逆さづりに、きりりと上釣つた……白髪散斬、すくくと針を植ゑた、皺黒く黄味がかつて、べたべたと茶の浸點のあゝる、蒼ざめた細い顔で……

向つて眞正面の蠟燭立、殿井が覗いたのと、先方で擡げたのと、驚破、恰も其の尖がつた鼻と鼻を突合はせる。

通夜の夜のしらくあけかと思ふ、強い、蠟燭の香がじりじりと脳へ来て、殿井は思はず氷のやうな汗を流した。

其の灯のまたゝく影に、瘦せた蒼い顔が、ひくひくと動いて、

「よう、御参詣にござります。」

とぼけた聲。ものを云ふのに、唇が上下内側へ捲れ込む。

「お世話ですが、お蠟燭を願ひます。」

突弾かれたやうに顔を引込ませた殿井は、尋常な聲が出たのに自分で感心をしたくらゐ……尤も少なからず敬遠の意を表して、慇懃に會釋をしたのは言ふまでもなく、臆病な男である。

「はい、はい、是は御奇特な。」

と云ふ、二度目の聲は最初より判然して、

「其の何でござります、御参詣が立籠みましたで、お生憎な儀で、お蠟は悉皆に成りましたが、なう。」

と目皺を刻んで、殿井の顔をじろくと縦に睨んだ。

一議もあらず、遁構へで。

「是はお邪魔を」と退つたり。

「やれ。」

と引留め、

「ぢやが、お待ちあつせい。此處な邊に、まだ一挺や二挺は残ツつろ。……捜いて見申そ、捜い

て見申そ。」

「否、別に……」

「お待ちあつせい。」

と聲を掛けて、

「捜いて見申そ、捜いて見申そ。……と今度は獨言のやうに、例のむぐぐと唇を捲き込み、身體も疊みさうに、ぐなぐと成つて、蠟燭立から顔が消えた。

其の寶珠の珠の形をしたのが、恰も眞暗な、底の知れない横穴のやうで、底にかつた怪しい姿見に、背後から……殿井は自分が立つた背後から——肩越しに不思議な顔を映したのであるらしく、フト考へた。

主は對うに居るのではない、其の背後の、鳥居の上にも居はしないか、と思ふばかりで、振り返る處か、身動きも、さて出来ぬ。

四

震聲で、

「如何ですか。」

と少刻して促して見た。が、返事がない。唾を呑み、唾を呑み、又頃刻して、

「なければ可いのです、なければ可いんですよ。」

と云ふ。

賽錢箱へ投げたのが、カランと響いて、カン／＼と鳴つて、深い井の底へ、石の側へ當りながら、ものの落込む音がした。

はつと又此に吃驚して、箱の角に掴つて、

「最う可いんです、何をして在らつしやるんだ。」

ト直き其處に聲がした。

「鼠がなう、荒れて荒れて、黄金升の米を溢すによつて、番せぬ事には成らんで、なう。」

と、もそ／＼と聲を包んで、ぼやりとした影が映り出す……矢張り堂の中に、寶珠の蔭に居るらしい。

物と息吐いて立直つた。

灯提紅

はじめて心着いて、鈴をと、棟はづれに、仰向けに胸を反らして、廂を包むほんのりと薄紅の櫻を見た……而して、花ながら枝を振つて、すら／＼と下げたやうな紅白の緒を引くと、鈴がころころと鳴つた時、殿井はフト自分の住居の格子戸を開けて娑婆へ還つた心地に成つた。

「何だ!……」

上りが八里、人跡絶えた峠の辻堂に來たではなし……番町の我が家でも、ものの三町とは間かない。二階から見附に見えるそれく火の見櫓。さて其處に立つ……地口行燈の酸漿もまだ消えぬ。

何の怪しい事があらう。

「お爺さん。」

と、こゝで氣安く、可加減に呼んだつけ、しかし聲はまだ陰に籠つた。

「最う可いんですよ……そんなに搜して頂くと、提灯が消えて蠟燭を買ひに入つたやうで、御堂を荒もの屋と間違へたらしく成つて濟みません。……故と此のまゝにして、歸ります。」

云つても壁があるばかりで、人間らしいたよりのないから、

「ぢや、御免下さい、失禮します。」

「お待ちあつせえ。」

と筒抜けに、蠟燭立から迸つて聲が出た。

途端に、燃さしが舐めて取つた體にフツと消えて、殿井は又ぎよつとしたのみならず、此の聲を聞くに齊しく、魂が峠の上へ飛んだのである。

もぞくとして、形は見えぬが、尖り鼻、釣目の翁は、今度は膝行出たらしい。

「まん、此處なてへ、腰なと掛けたが可うござります……まそつとぢや、お待ちあつせい。」

「……………」

此方は聲が出なかつた。

「いまに、お米も見えるでなあ。」

「何ですか。」

と、しどろに成つて、きよとく聲で、

「此處へ見えますと……お米さん、と申しますと……」

つい、又謹んで訊くのであつた。

「近所の、美しい娘ぢやが、主は問ふまでもあるまいが。」

「はあ、お米ちゃん、あの娘が、此處へ?」

と云つた、半ばは呟くやうにした。殿井は、氣を奪はれた體に、縁か、扉か、鳥居の柱か、背に當つたものに、ぐたりと凭れた。

「かれこれ、一時……此の夜中に、今時分……お爺さん。」

返事がない。

「お爺さん、何をして居るんです。」

堂の中に、もそりと音して、

「鼠がなう、荒れて、荒れて、黄金升の米を溢すによつて、番せぬ事には成らんでなう。」

五

「其のお米さんと云ふ娘が、此の御堂へ来るんですか、お爺さん。」

「然ればい、来もすれば、升にもあるなう。」

と又こそく動く。

「お爺さん、何をしに？……あの、矢張り、お参詣に来るんですか。」

もし然うだとして、信心なれば、夜中途中が憂慮はれるばかりで、別に怪しい事もない、と考

へながら殿井が訊いた。

「其處どころは分らんなう。」

「毎晩来ますか、日参でもするんですか。」

「違ふなう、今夜に限つた事ぢやがなう。」

「へい。」

「主の仔細を知つてぢやらう。」

と堂の中から先んじて言ふ。

「私が仔細を。」

「知らないでかい、約束なれば逢ひに来る、何も縁ぢや、なう。」

とばかり言葉じりを投げたやうに云つた。が其なり寂寞と静り返る。

殿井は、ふはくくと浮いて来て、目前にちらつくかと思ふ行燈の繪の、赤い酸漿を視めて恍惚

と成つた。

敢て何にも思はぬまでも、場所が場所、時も時、言ふものが言ふものなれば、前世もあるか、

と身に染みるやうで、うつゝに来る人の姿が待たれた。

ト花の梢を、さらくくと風の音。

「や、誑かされた！ 明方に天秤棒で撲られよう。」

で、慌しいまで、吃驚する、ト頸許から慄然としたが、ぼんの窪を敲いたやうな、唐突な、

「ハッ！……噫……」

五ツ六ツ七ツ八ツ、馬鹿らしいまで、たて續けで、一息も留まらず、ハツ、ハツクサメ、ハツ、

クシヨイ、ハツと出る……

いや、我ながら餘りの事の淺間しさ。

「え、」

と氣を入れて身を揉みく、うむと堪へて、吐出す臍腑を引摺みさうに、む、と兩手で口の端を壓へる、と……手答へして、スポンと音がするまで、皮ぐるみ竹の子を握つたやうな手觸りで、驚いて一撫で撫でると、

「はツくしよん！え、」

頤ながら、唇ながら、鼻ばしらから、ぬい、と尖つて、持餘るばかり突出て居る。……

と思ふや否や、ひくくひくくと動く、眉に連れて、キリキリと目尻が痙攣する。

口から鼻が、くわツとほてつて、じりじり、黄込む可厭な臭氣、だらりと蠟燭が溶けて流れて出さうで、一息も堪へられぬ。

伸びたり、窘んだり、爪立つたり、殿井は半狂亂の體で、

「目が覺めろ。」

と心覺えの手水鉢に——足も地につかず、ふらくと成つて、ドンと取着くと、いきなり、兩手で、ぼちやくと猫のやうに洗つたが、散り浮く花片とは思はれず、ぬめらと、顔中へ何かへばりつくのが、其ま、べたべたと茶色の浸點。

黄色く蒼く、ぶくくと、尖つた陰火の如く、自分の顔が鈍く光る、と我ながら、赤たゞれにたゞれたらしい目に映つた。

「何事だ。」

とつい知らず、情ない聲を出して、踏躑として、鳥居に纏れて、のけぞるばかり、惱亂の拳を握る、と命の綱よ、其の折なれば、鈴の緒に、掛つた手を、放さじ、と確乎と取つた。

六

「お爺さん、神官、堂守の方……」

で、殿井はあらゆる名を呼んだが、内で返事もしなければ、南無三寶、馬かと思ふ鼻息荒く蠟燭くさい息ばかりで、ふかくと聲が出ぬ。

ト其の纏着いた鈴の緒を、一生懸命に揺つて曳いた。

何時か、臉を合はせたやうに格子もびたりと閉つて居た。

が、冴えた鈴音高らかに、からくからくと空に鳴る。其の、鳴るのを聞きく、殿井は氣も遠く沈む耳に、奥深く遙かに傳はると、枝に響いて櫻に揺れて、床しく、清く、チリ、チリ、リン、コロくと、響の音か、琴の音か。

花の香誘ふ、しめやかな、爽かな風が颯と来た。
梢の雲は飄々くばかり。

留南奇の薫のぼつとするのが、清涼劑のやうに面を打つた……背後に近い、一ツ目の鳥居のあたりで、衣擦れの音がしたと思ふと、軽い登音が、はたと留まつて、清しく、優しい、女性の聲で、

「お爺さん、お爺さん。」

と二度呼んだ。

格子の扉が、御堂の内から、ギイと開いて、

「お、お姫様、お遊びか、なう。」

と先刻の翁の聲がする。

「御門まで立寄りました……あの、用意は最うしましたかい。」

「御覽ぢやれ、それ、此の通り。」

と殿井を指す趣きで、聊か嘲つた調子を含んだ。

ト背後から、柱を楯に、此方を見透かす氣勢がした時、半ば喪心した殿井は夢のやうに、あの、行燈の薄明りで、端麗に美しい樓のあたりをちらりと見た。……

鳥居がくれに花の蔭から、かさねて聲して、

「それは違ひました……お米を狙ふ男には、来る時、三念坂を上るのに逢ひました、あれは些と後れてから此處へ來ます。」

「何と、人違ひ。」

とひたと乗出し、御堂の端から殿井の目の前へ出した顔は、以前とは肖もつかぬ、能の面の柔らかな翁で、

「したり……」

と膝のあたりを、己が手で丁と拍つた。

「これは、さても沙汰の限りな。いや、唯今、祈辰さう。……お姫様、先づ此へ。」

「鈴の音ゆる急いで來ました、更めて花見に參らう。……まあ、さらば……」

「されば、待ちます。」

櫻がさらりと皆揺れる。

「客人、まづ、其の顔を、」

と翁が言ふ時、凡そ十四五挺、向つた寶珠の杵に、蠟燭がぱつと珠なりに燃え立つと、萬燈の如き御堂の明に、正面の姿見が晃々と輝く裡に、衝と映つたは、蒼ざめて、黄色な、獸の如く鼻

の尖つた、赤たゞれの目の引釣つた我顔で。

「あつ」と殿井は尻餅支く。

「憂慮ない、面ぞ、腕がせう。」

と翁が云ふ時、ヒヤリと掌が顔を撫でる、とすつきり身體中清々しく成つたが、忽ち四邊は暗夜に返つた。

「堂守、老眼に確とも見極めいで、なう、迷惑を掛けた、恥かしく存じます。豫て……あの、可愛らしいお米を附廻す曲ものがあつて、なう、それ、附手紙などは言はずともぢや。種々に手を盡すが、さて、天人に紙礫、一向に手答のない處、あの娘の父親が、世を去つたに附入つて、計を企んだわ。

桂庵の悪婆を頼んで、此を先づ、其奴が母親と拵へた。

何と、此の前の縁日の夜の事よ。お米は例の他愛もなう、最惜やの、境内馴染の親仁から、色入の甘露糖、千代紙を浸しもの體に刻んで、附木板に載せたを買つて、嬉しさうに手に提げて、裏町を歸る處を、其の曲ものから頼まれた、右なる桂庵の口入婆、暗がり、あの娘の袖を引くと早や、先づ、それ、大地へ領伏して、さめくと泣いた、なう。

身にも世にも代へられぬ、唯一人の悴が、姉様のるにこがれ死に死にまする。婆と二人、生人命を助けると、思ひ汲んで、又とは言はぬ、一度だけ、逢うて遣つてくれい、と拜む。

巧んだな。

優しい、あの娘ぢや。

分けて、片親失うて、袖もまだ乾かぬ折よ、我身が戀しく親なつかしい情にせまつて、そんなら、とそれ約束した。

其が今夜よ。

逢うて、いざ、何と成る。……其れまでも考へまい。

清い身に怪我させまい、と餘りのいぢらしさに、われら面々、一ツ堂に落合うたが、なう。

人の口から、兎や角のうちは知らず、先づ逢はう、とあの娘が、心動いての上なれば、夢枕にも、前兆にも、悪いと留めても思直さぬ。

恠やうな事は、なう、正面から留めれば意地を尙ほ張るもの。

よつて、其の、曲ものの、若い奴、約束の場所にした、此の堂へ来るを待つて、一眠らせ、當て身をくれて、——客人知つたな、——今の怪しげな面を被せて、人目を忍んで何も知らず、罪もなく犠牲に成りに来る娘に、其の面見せう……

一目見て倒れもせうが、やがて、可恐しい夢は覺めて、朝機嫌に又例の可愛い酸漿を鳴らすで

あらう、となう、最前よりの仕儀であつたよ。

鹿匆は、老人詫申す。

が、よい次手ぢや……やがて、娘も此へ参らう。其の路は裏門ぢや……客人、途中に待うけて、此の趣言ひきかし、お米を納得さして歸さうなれば……蟲も出ようぞ、可哀げに、可恐いもの見せず済む……

な。

夜も更けた、花も眠らう……

然らばぢや、客人よ。」

と二句ばかり、氣高く嚴かに聞えた、と思ふと寂寞した。

鳥居をかけて、花の梢が、ひたくと御堂を包む。

獨りおのづから威儀正しく、三たび禮拜して鳥居を出て、衝と路を裏門の方へ取つて、境内を

辭する時、怪しや、其の時まで消残つた行燈から、赤い酸漿の繪が三ツ、斜めに並んだなりで、

葉を羽に、蜻蛉のやうに、翻々と抜けて出て、櫻の中を縫ひながら、板塀、垣根、ちらくると裏

町へ送つて出たが、ひよい、と前へ飛んで、前途へ、ほたくと紅に點灯れて行く……

其方に、其方に、鈴か……否、カラコロ、カラコロと響く音。夜を遊行する、先刻の姫か、誘

き出されて來かゝる、お米か。

淺
茅
生

鐘の聲も響いて來ぬ、風のひつそりした夜ながら、時刻も丁ど丑滿と云ふのである。……此の月から、桂の葉がこぼれく、石を伐るやうな斧が入つて、もつと虧け、もつと虧けると、やがて二十六夜の月に成らう、……二十日ばかりの月を、暑さに一枚しめ残した表二階の兩戸の隙間から覗くと、大空ばかりは雲が走つて、白々と、音のない波かと寄せて、通りを一ツ隔てた、向うの邸の板塀越に、裏葉の翻つて早や秋の見ゆる、櫻の樹の梢を、ぱつと照らして、薄明るく掛るか、と思へば、颯と墨のやうに曇つて、月の面を遮るや否や、むら／＼と亂れて走る……ト火入れに燻べた、一把三錢がお定りの、あの、萌黄色の蚊遣香の細い煙は、脈々として、そして、空行く雲とは反對の方へ靡く。

其の小机に、茫乎と頰杖を支いて、待人の當もなし、爲う事ごさなく、と煙草をふかりと吹かすと、

「おらは香氣だ。」と煙が輪になる。

「此方は忙がしい。」

と蚊遣香は、小刻を打つて畝つて、せつせと燻る。

が、前なる縁の障子に掛けた、十燭と云ふ電燈の明の届かない、昔の行燈だと裏通りに當る、背中のあたり暗い所で、蚊がブーンと鳴く……其の、陰氣に、沈んで、殺氣を帯びた様子は、煙にかいふいて遁ぐるにあらず、落着き澄まして、人を刺さむと、鋭き嘴を鳴らすのである。

で、立騰り、煽り亂れる蚊遣の勢を、ものの數ともしない工合は、自若として火山の燒石を獨り歩行く、脚の赤い蟻のやう、と譬喩を思ふも、あゝ、蒸熱くて夜が寝られぬ。

些との風もがなで、明放した背後の肱掛窓を振向いて、袖で其のブーンと鳴くの拂ひながら、此の二階住の主人唯吉が、六疊やがて半ばに蔓る、自分の影法師越しに透かして視る、雲ゆきの忙しい下に、樹立も屋根も静まりかへつて、町の夜更けは山家の景色。建續く家は、なぞへに向うへ遠山の尾を曳いて、其方此方の、庭、背戸、空地は、飛々の谷とも思はれるのに、涼しさは氣勢もなし。

「暑い。」

と自棄に突立つて、胴體ドタンと投出すばかり、四枚を兩方へ引すり開けた、肱かけ窓へ、拗ねるやうに突掛つて、

「やッ」と一ツ、棄鉢な掛聲に及んで、其の敷居へ馬乗りになり打跨がつて、太息をほつと吐く……風入れの此の窓も、正西を受けて、夕日のほとぼりは激しくとも、波にも氷にも成れとて觸ると、爪下の廂屋根は、さすがに夜露に冷いのであつた。

爾時、唯吉がひやりとしたのは――

此の廂はづれに、階下の住居の八疊の縁前、二坪に足らぬ明取りの小庭の竹垣を一ツ隔てたばかり、裏に附着いた一軒、二階家の二階の同じ脇掛窓が、南を受けて、此方とは向を異へて、つい目と鼻の間にある……其處に居て、人が一人、燈も置かず、暗い中から、此方の二階を、恚う、窓越しに透かすやうにして涼むらしい姿が見えた事である。――

「や、」

たしかに、其家は空屋の筈。

二

唯さへ、思ひ掛けない人影であるのに、又其の影が、星のない外面の、雨氣を帯びた、雲に染んで、屋根つたひに茫と來て、此方を引包むやうに思はれる。――

闇に咲く花の、たとへば面影はほのかに白く、あはれに優しくありながら、葉の姿の、寂しく、陰氣に、黒いのが、ありとしも見えぬ雲がくれの淀んだ月に、朦朧と取留めなく影を投げた風情に見える。

雨夜の橘の其には似ないが、弱い、細りした、花か、空燐か、何やら薫が、たよりなげに屋根に漾うて、何うやら其の人は女性らしい。

「婦人だと尙ほ變だ。」

唯吉は、襟許から、手足、身體中、柳の葉で、さら／＼と擦られたやうに、他愛なく、むすむすしたので、ぶる／＼と肩を揺つて、

「此は暑い。」

と呟くのを機會に、跨いだ敷居の腰を外すと、窓に脇を、横ざまに、胸を投掛けて居直つた。

爾時だつたが、

「え、え、」と、小さな咳を、彼方の其の二階でしたのが、何故か耳許へ朗らかに高く響いた。其が、言を番へた、豫て約束の暗號でもあつた如く、唯吉は思はず顔を上げて、其の姿を見た。

肩を細く、片袖をなよ／＼と胸につけた、風通しの南へ背を向けた背後姿の、腰のあたりまで

仄に見える、敷居に掛けた半身で帯と髪のみ艶やかに黒い。浴衣は白地の中形で、模様は、薄月の空を行交ふ、——又少し明るく成つたが——雲に紛る、やうであつたが、つい傍の戸袋に風流に絡まり掛つた蔦かづらが其のまゝに染まつたらしい。……そして、肩越しに此方を見向いた、薄手の、中だかに、すつと鼻筋の通つた横顔。……唯吉を見越した端に、心持、會釋に下げた頸の色が、鬢を透かして白い事……美しさは其のみ成らず、片袖に手まさぐつた團扇が、恰も月を招いた如く、弱く光つて薄りと、腋明をこぼれた膚に透る。

袂はづれさへ偲ばるゝ、姿は小造りらしいのが、腰掛けた背はすらりと高い。

髪は、ふさ／＼とあるのを櫛巻などに束ねたらしい……でない、肱かけ窓の、然うした處は、高い鬢なら鴨居にも支へよう、其が、やがて二三寸、灯のない暗がり、水際立つまで、同じ黒さが、くつきりと間をおいて、柳は露に濡れつゝ濃かつた。

慥う、唯吉が、見るも思ふも隣り間で、

「暑うござんす事……」

と其の人の聲。

此方は喫驚して黙つて視める。

「貴方でもお涼みでいらつしやいますか。」

と直ぐに續けて、落着いた優しい聲なり。

何を疑つて見た處で、其のものの言ひぶりが、別に人があつて、婦と對向ひで居る様子には思はれないので、

「えゝん。」

とつけたらしい咳を、唯吉も一つして、

「何うです……此のお暑さは。」と思切つて、言受けする。

「酷うござんすのね。」

と大分心易い言ひ方である。

「お話に成りません。……彼岸も近い、残暑もドン詰りと云ふ處へ來で、まあ、何うしたつて云ふんでせうな。」

言ひ交はすのも窓と窓の、屋根越なれば、唯吉は上の空で、

「はて、何だらう、誰だらう……」

三

「でも、最うお涼しく成りませう……此がおなごりかも知れません。」

と静な聲で、慰めるやうに窓から云つたが、其の一言から冷たくなりさうに、妙に身に染みて、唯吉は寂しく聞いた。

蟲の聲も頻りに聞える。

其の蟋蟀と、婦の聲を沈んで聞いて、陰氣らしく、

「其だと結構です……でないと言切れません。何うか願ひたいもんでございます。」

と言ふうちに、フト其の（おなごり）と云つたのが氣に成つて、此だと前方の言葉通り、何うやら何かがおなごりに成りさうだ、と思つて黙つた。

少時人の住まない、裏家の庭で、此の折から又颯と雲ながら月の宿つた、小草の露を、揺こぼしさうな蟲の聲。

「まあ！……」

と敷居に、其の袖も帯も靡くと、ひらくと團扇が動いて、やゝ花やかな、そして清しい聲して、

「御挨拶もしませんで……何うしたら可いでせう……何て失禮なんでせうね、貴方、御免なさいまし。」

「いゝや、手前こそ。」

と待受けたやうに、猶豫はす答へた……

「暑さに變りはないんです、お互様」と唯吉は、道理らしいが、何がお互様なのか、相應はない事を云ふ。

「お宅では、皆さんおやすみでございませうか。」

「如何ですか、寝られはしますまい。が、蚊帳へは疾くに引込みました。……お宅は？」

と云つて、唯吉は屋根越に、また透かすやうにしたのである。

「……………」

婦は一寸言淀んで、

「あの……實は、貴方をお見掛け申しましたから、其の事をお願ひ申したいと存じまして、それだもんですから、つい、まだお知己でもございませぬのに、二階の窓から濟みませぬえ。」

「何、貴女、男同士だ、と何うかすると、御近所づから、町内では錢湯の中で、素裸で初對面の挨拶をする事がありますよ……」

「ほゝ。」

と唇に團扇を當てて、それなり、たをやかに打傾く。

唯吉も引入れられたやうに笑ひながら、

「申戯ぢやありません、眞個です。……ですから二階同士結構ですとも。……そして、私に……とおつしやつて、貴女、何でございます……御遠慮は要りません。」

「はあ……」

「何でございます。」

「では、お頼まれなすつて下さいませう。」

「承りませう。」

と云つたが、窓に掛けた肱が浮いて、唯吉の聲が稍々忙しかつた。

「貴方、可厭だとおつしやると、私、怨むんですよ。」

「え、。」

と、一つあとへ呼吸を引いた時、雲が沈んで、蟋蟀の聲、幻に濃く成んぬ。

「……可厭な蟲が鳴きます事……」

と不圖、獨言のやうに、且つ何かの前兆を豫め知つたやうに女が言ふ。

「可厭な蟲が鳴きます？……」と唯吉は釣込まれて、つい饒舌つた。

が、其處に、又此處に、遠近に、草あれば、石あれば、露に仰く蟲の音に、未だ嘗て可厭な、と思ふはなかつたのである。

「貴女、蟋蟀がお嫌ひですか。」

と、うら問ひつゝ、妙な事を云ふぞと思ふと、うつかりして居たのが、また悚然とする……

四

雲が衝と離れると、月の影が、對うの窓際の煤けた戸袋を一間、美人の袖を其處に縫留めた蜘蛛の巢に、露を貫いたが見ゆるまで、颯と薄紙の露を透して、明かに照らし出す、と見る間に、曇つて、また闇くなり行く中に、もの越は、蟲の音よりも澄んで聞えた。

「否、つゞれさせぢやありません。蟋蟀は、私は大すぎなんです。まあ、鳴きますわね……可愛い、優しい、あはれな聲を、誰が、貴方、殿方だつて……お可厭ではないでせう。私のやうなもので、義理にも、嫌ひだなんて言はれませんか。」

「ですが、可厭な蟲が鳴いてる、と唯今伺ひましたから。」

「あの、お聞きなさいまし……一寸……まだ外に鳴いて居る蟲がござんせう。」

「はあ、」

と唯吉は、恰もいひつけられたやうに、敷居に掛けた手の上へ、横ざまに耳を着けたが、可厭な、と云ふは何の聲か、其は聞かない方が望ましかつた。